

第4章 雀居遺跡の木製品

はじめに

雀居遺跡の木製品を語る上で特に重要なのは、第4次調査出土の木製品である。第4次調査の調査成果は福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集『雀居遺跡2』1995(平成7)で報告しているが、膨大な量の出土木製品は整理がほぼ完了していながら未報告のままになっていた。第10、12、13次調査出土遺物の木製品とを合わせることによって弥生時代早期から古墳時代に至る木製品の変遷や各時代ごとの組合せを知ることができる。福岡空港の下に眠る雀居遺跡の全容解明上重要であるばかりでなく、この地一帯が日本における水稻耕作開始地であることから、水稻耕作技術の受容と発展、弥生時代の歴史的形成を直接解明することとなり、資料的な意味はきわめて高い。

先ず、簡単に第4次調査出土木製品の概要についてふれておきたい。出土木製品には農具、工具、武具、生活用具、祭祀具、建築部材など多種多様なものがある。時期的には縄文晩期終末(弥生早期)から古墳時代前期にまで及ぶ。量的に多いのは縄文晩期終末(弥生早期)から弥生前期にかけてと、弥生後期後半である。時期ごとに特徴的なものをあげた。

縄文晩期終末(弥生早期)の夜白單純期では木製農具がセットで出土している。諸手鋤、平鋤2種類、エブリ、鋤が無い、脱穀具として堅杵が伴う。諸手鋤やエブリには半製品や未成品、素材などがみられ集落内で多くの農具が生産されていたことを示している。漆塗りの弓、鉢、赤漆塗り容器把手、把手付槽、石斧の装着された斧柄なども注目される。

弥生前期から中期初頭では、農具に又鋤が加わり、漆塗りの弓や細形鋼劍の把頭盤部なども出土している。工具には横槌などがみられる。

弥生後期後半では多くの木製品が出土し、中でも組合式机、内面に水銀朱を塗った盤(羽貫式案)、木甲、木鐵、漆塗りの筒形容器などが特筆される。組合式机は規格が数種類あり、刃物キズが多く観察される。これらは「指物」技術で作られたとみられ、新たな規矩術の伝来を考慮しなければならないだろう。雀居遺跡の木製品は弥生文化が木の文化であることを彷彿させるものである。

以下、各木製品について説明を加えていきたい。

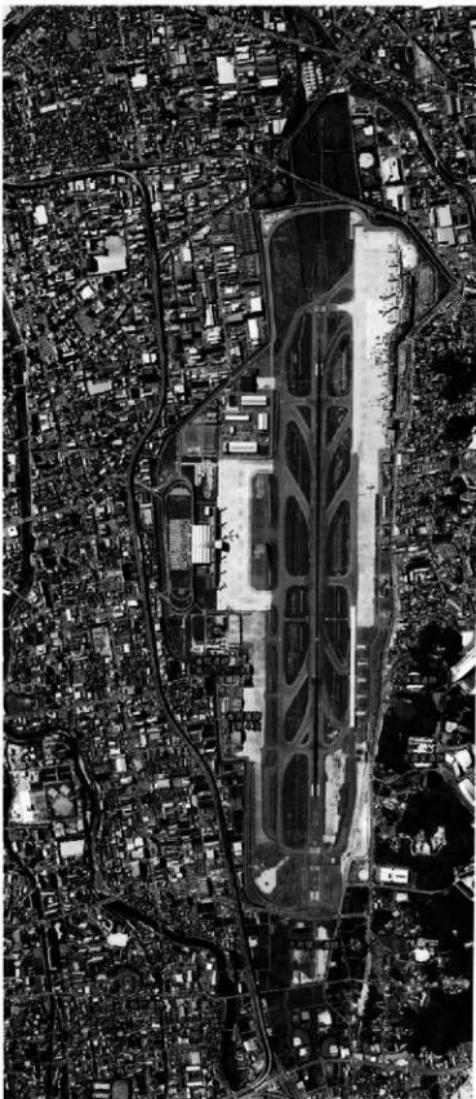


Fig.1 雀居遺跡周辺の遺跡



Fig.2 調査区遺構平面図（縮尺1/300）



Fig.3 調査区全景（北から）



Fig.4 調査区全景（西から）

発掘した遺構

各遺物の個別説明をする前に、木製品が多く出土した遺構について若干ふれておきたい。

木製品が出土した主な遺構は、SD01、SD02、SD03、SX04、SX08、SX11、SX12、SX13、SC05、SK32などである。調査区を南北あるいは東西に流れる溝、環濠、湧水点を持つ不定形土壙、堅穴状遺構、土壙などが具体的な遺構である。

大溝は3条検出している。調査区中央部を南北方向に流れる溝がSD01である。溝底から古代の黒土師器柄が、夜白式土器や弥生前期～後期の土器群と共に出土していることから、古代以降の時期のものであろう。この溝は明治33年の地図にも同一方向で流れしており1000年以上も機能していたことが窺える。この溝からは木製品の出土は少なかった。SD02は調査区南東側から北西方向に弧状に伸びる溝で、多量の木製品と弥生後期後半の上器が集中して出土した。調査区東半部分は次に述べるSD03と重複していたので、SD03の上層として処理していたが、第5次調査でさらに東側の溝の様子が確認されたので、この二つの溝は完全に方向を変えて伸びることが判明した。SD02は環濠と考えられ、木甲や組合式机などが出土している。SD03は南東から西側に伸びる自然流路である。下層は夜白式土器を単純に出土する層で、多くの木製品が流路に溜った様な状態で出土している。木製農具はセットになっており、中には柄がついたままになっているものも存在した。台風か洪水などの災害で一度に流された様な観を呈していた。

SX04～SX13はSD03の南側に広がる不定形土壙である。それぞれの遺構は境が明瞭でなく重複関係もはつきりしなかった。皿状に深む遺構の形状、遺物のまとまり具合などからいくつかに分けた。SC05は堅穴状の遺構、SK32は古墳前期の土壙で、第5次調査側に広がっている。

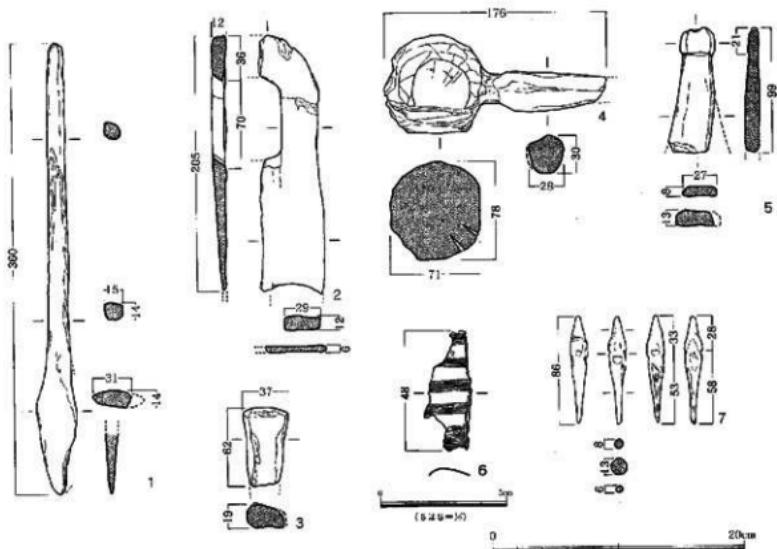


Fig.5 包含層出土遺物 (縮尺1/2-1/4)

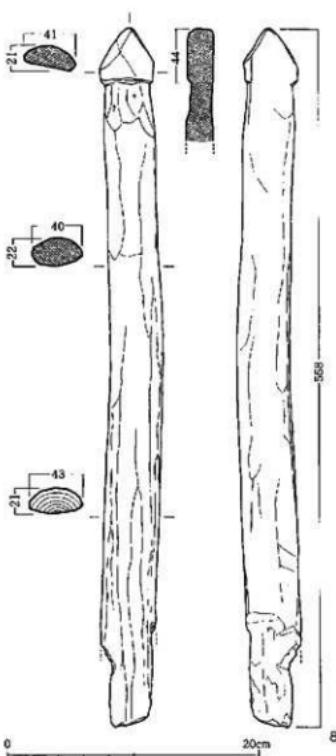


Fig. 6 包含層出土遺物（縮尺1/4）

めははっきりしない。身部に平坦面があるので棒の機能を考えたいが、横棒にしては少々珍しい形状を呈している。別の用途を考えるべきであろうか。5はナスピ形木製品の頭部である。端部は段をもって絞形し片面は平坦に、もう一方は面取りを施しやや丸味をもって仕上げる。カシの柾目材を使用。6は容器に塗られたと考えられる漆塗模である。漆塗模面と胎の一部が残存しており、文様は黒漆地塗りの上に1mm前後の4本の横線（朱漆）を施し、下方は8本の横線に列点文を加える。列点文は横線を引いたあとに入れさらに朱漆で文様を描いた後、縱方向に黒漆で細線を入れる。残存長4.8cmで、朱漆は橙色に近い。7は木鐵である。全長8.6cm、最大径1.3cmで、体部に4箇所シャープに削り込まれた逆刺がある。

Fig. 6-8は残存長55.8cm、半截した棒材を削り込み、先端を尖らした木製品である。断面はカマボコ状を呈し、ケズリ痕がよく残る。下半部は折損してはっきりしない。現状では用途が推定できないが祭祀具の可能性もある。

包含層等の遺物 (Fig. 5~6)

各遺構から出土した木製品以外に、遺構確認時や包含層から出土した木製品がある。

包含層は7層（褐色～黄白色砂、20~30cm）の下に広がる灰黒色粘質土（10層）である。7層の砂層との境に後期後半代の遺物を多く含み、一部には古墳時代初頭の上器も含まれていた。木製品の多くは弥生後期後半代に属するものであろう。

1は掘棒状あるいは筒状の木製品である。全長36.0cmで、柄と身の部分に分かれしており、柄から緩やかに広がり身に移行する。最大幅3.1cm、厚さ1.4cmで、先端部は窄まりながら尖り薄く仕上げられている。柄は1.5cm前後の角棒状を呈し、柄の端部は摩耗のため整形されているのか欠損しているのか判断がつかない。全体的に腐食が著しい。2は鍬である。半分に折損しており、さらに刃部も欠失している。残存長20.5cm、方形の柄孔の長さは7.0cmを測る。最大厚は1.2cm、下端部は腐食で薄くなっている。折損してはっきりしないが肩の張りが少ないので平鍬ではなかろうか。3はカシの柾目材で上端部がきれいに加工されている。農具類の柄の端部であろうか。4は残存長17.6cm、棒状の柄部と球形の身部から成る。柄は面取り加工される。身部はほぼ球形に全体を成形した後に、径4.5cmの正円状の平坦面をケズリによって作っている。図示以外は腐食しており、加工痕がはっきりしない。広葉樹の芯持ち材を使用していると思われるがこれも腐食のた

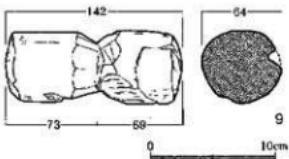


Fig. 7 SD01出土遺物（縮尺1/4）

SD01 (Fig. 7)

調査区中央部を北流する大溝である。幅6.9m、深さ1.46mで延長60mまで確認した。時期は先述したように古代以降のものであろう。遺物としては縄文晩期終末（弥生早期）から弥生後期・古墳前期初頭までのものを含む。Fig. 7-9は木錘である。広葉樹の芯持材を使用し、両端はケズリによって加工しているが腐食が進んでいる。中央部はシャープで規則正しいケズリ込みによって鼓形に仕上げられている。全長14.2cm、径6.4cmを測る。

SK32 (Fig. 8~10)

II区東南隅で検出されたやや楕円形を呈する円形土壙である。布留式土器の新しいタイプに属する壺が出土している。古墳時代の遺構は第4次調査では少ないが、東側に隣接する第5次調査ではまとまった遺構が検出されている。木製品は土壤内に投げ込まれた様な状態で出土し、堅杵、組合せ木器、板材、棒材などがある。

10は堅杵である。全長107.5cmを測り、完全に残存している。握り部は径 2.7×3.2 cmでやや楕円形を呈する。握り部には筋帯ではなく、徐々に径を増しながら抜き部へと移行する。握り部と抜き部との境界の後は明瞭ではないが、実測図の上方に示している方はやや稜線が残る。上方の抜き部径は 8.2×9.9 cm、下方は 8.0×9.4 cmでやや楕円形を呈する。抜き部には樹皮を残したまま加工されており丁寧な作りではない。両端部は共に平坦に近く、あまり使い込まれていない。抜き部の一端には刃物キズが観察される。

11~14はともにセットになる部材と考えられる。出土状況は11の上部に図示した柄穴と12の上部の柄が差し込まれた状態であった。ふたつは直角に接合し、12が下位で、11が上位に位置していた。12の内弯する面は内側を向いていた。これらは指物で作られた腰掛の座板と脚板であろう。11を細かく見ると、残存長56.1cm、幅4.2cm、厚さ1.0cmで非常に薄い作りのものである。柄穴は破損によって規模は分からぬが12の柄から考えると 2.1×2.3 cmを少し超える大きさであったろう。組合せからみると座板と考えざるを得ないが、長すぎるし、かつ細すぎるのである。12は脚板である。残存長18.8cmを測り、現状では柄部分が欠けているので、本来は20cm程度であったとみられる。最大幅は10.8cmを測る。外面は縱横とも丸味を持って平滑に仕上げられている。座板への差込部（柄）は 2.1×2.3 cmで、内面には差込部下に突起部と、裾端から上7.0cmの所に浅い段を設ける。この内側の段の部分が脚板の肩部にあたり、柄穴のところから裾広がりに広

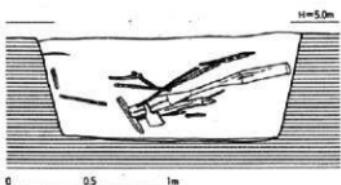
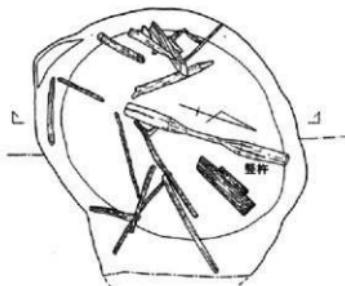


Fig. 8 SK32遺構実測図 (1/30)



Fig. 9 SK32遺物出土状況

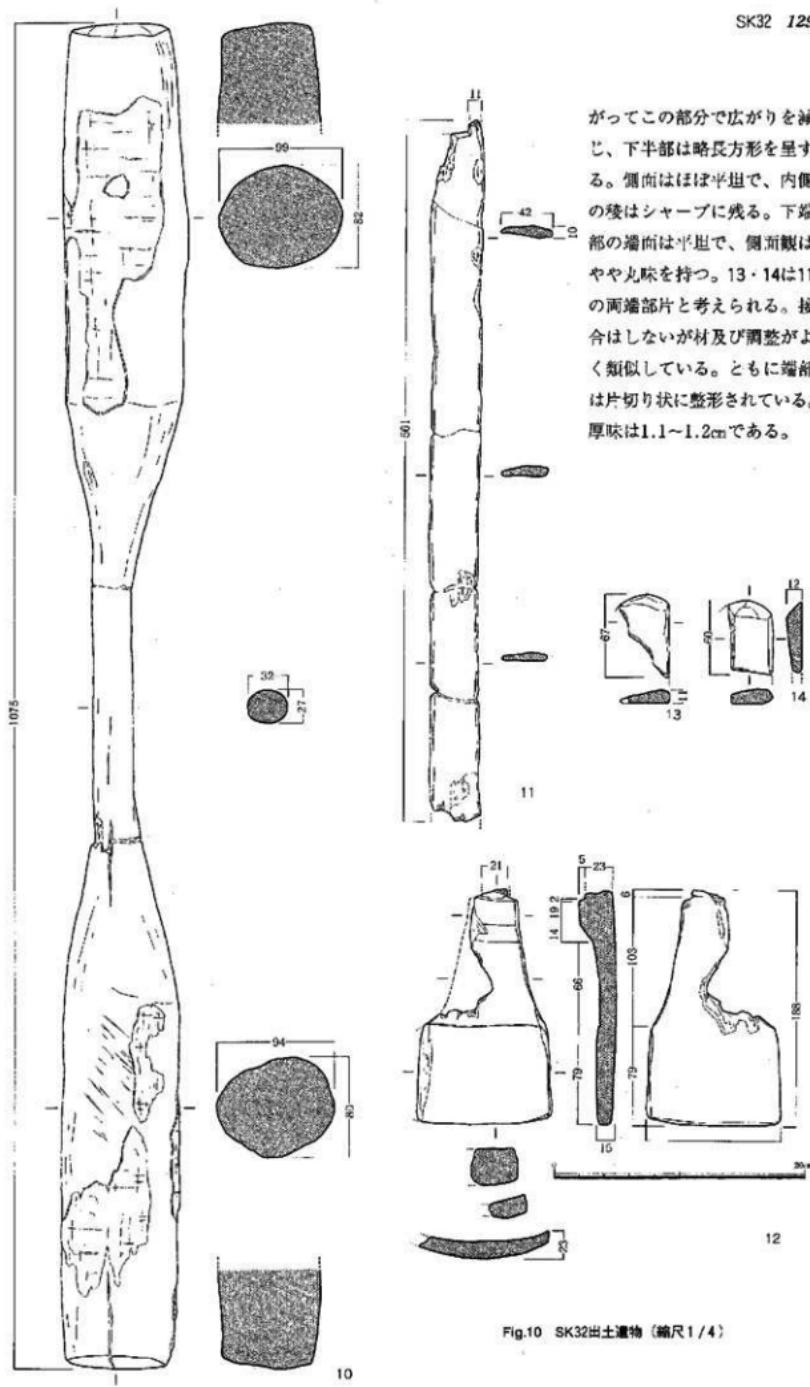


Fig.10 SK32出土遺物 (縮尺1/4)

SC05 (Fig.11~14)

I区中央部に位置する竪穴状の遺構である。略隅丸の方形を呈するように見受けられるが、北側が試掘トレンチT-8に切られ、かつT-8の崩落によって破損しているので全体のプランは判然としない。縄文晩期終末（弥生早期）の自然流路SD03を切って作られている。当初、遺構確認時に長方形のプランを確認したので、竪穴住居址と考えたが、調査の結果、柱穴や炉址などは検出されず、壁の立ち上がりも緩やかな部分があるなど、竪穴住居址とするよりも大型の竪穴状遺構と考えた方が良さそうである。灰色～灰白色砂層に掘り込まれた人為的な遺構であることは間違いないから。竪穴住居址ではないが、ここでは混亂を避けるためそのままSC05という略号を使っておく。

この遺構の土層堆積はほほレンズ状を呈し、各層に木製品や流木などが混入していた。また、SB07やSB64、SB65の柱穴に切られており、それらの建物の柱根や礎板などが数箇所みられた。遺構内から検出された木製品は、組合式机の部材や平鉗、又鉗、建築部材などである。また、マタケ位の竹を半截したものが出土している。腐食が激しくサンプル程度しか取り上げられなかつたが、建築部材などとして使用されていたものであろうか。後世の混入でないことは調査で明らかである。

出土土器は、弥生後期後半の壺・壺・高杯・器台などであった。土層は幾つかに分層できたが土器をみると限り時期差はなさそうである。当然古い遺構を切って作っていたので、夜臼式土器や中期初頭の壺なども出土している。時期的には弥生後期後半に属する大型の土壙と考えておきたい。

15は上層から出土した平鉗である。全長29.7cm、両側縁は欠損しており、刃部の一部も破損している。柄孔長5.6cm、柄孔幅3.2cm、頭部長9.7cm、頭部幅8.4cmを測る。最大厚は頭部付近で1.8cmである。着柄角度は57度となる。全体的に腐食が進み、加工痕ははっきりしない。材にはカシの柾目材が使用されている。

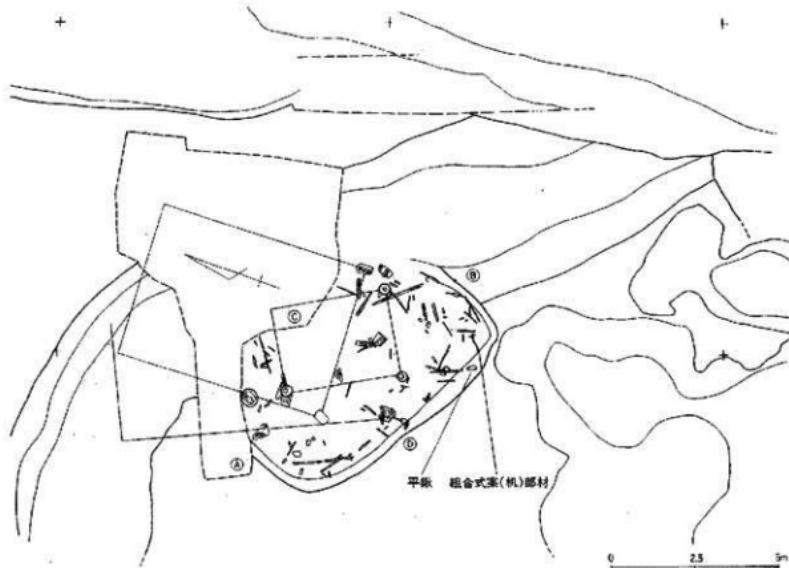


Fig.11 SC05遺構実測図 (1/150)

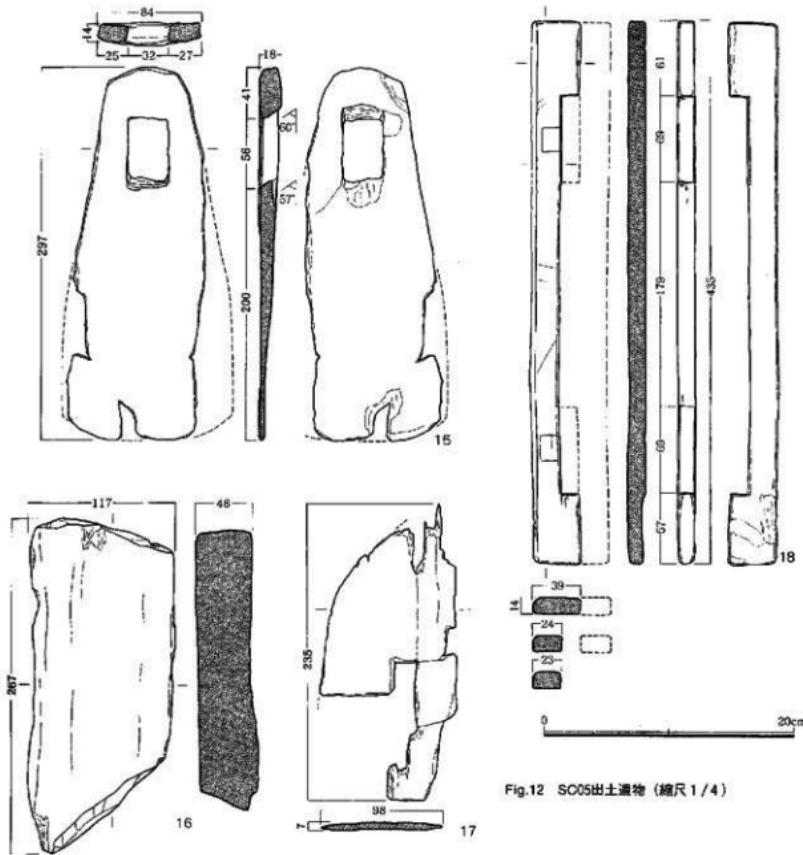
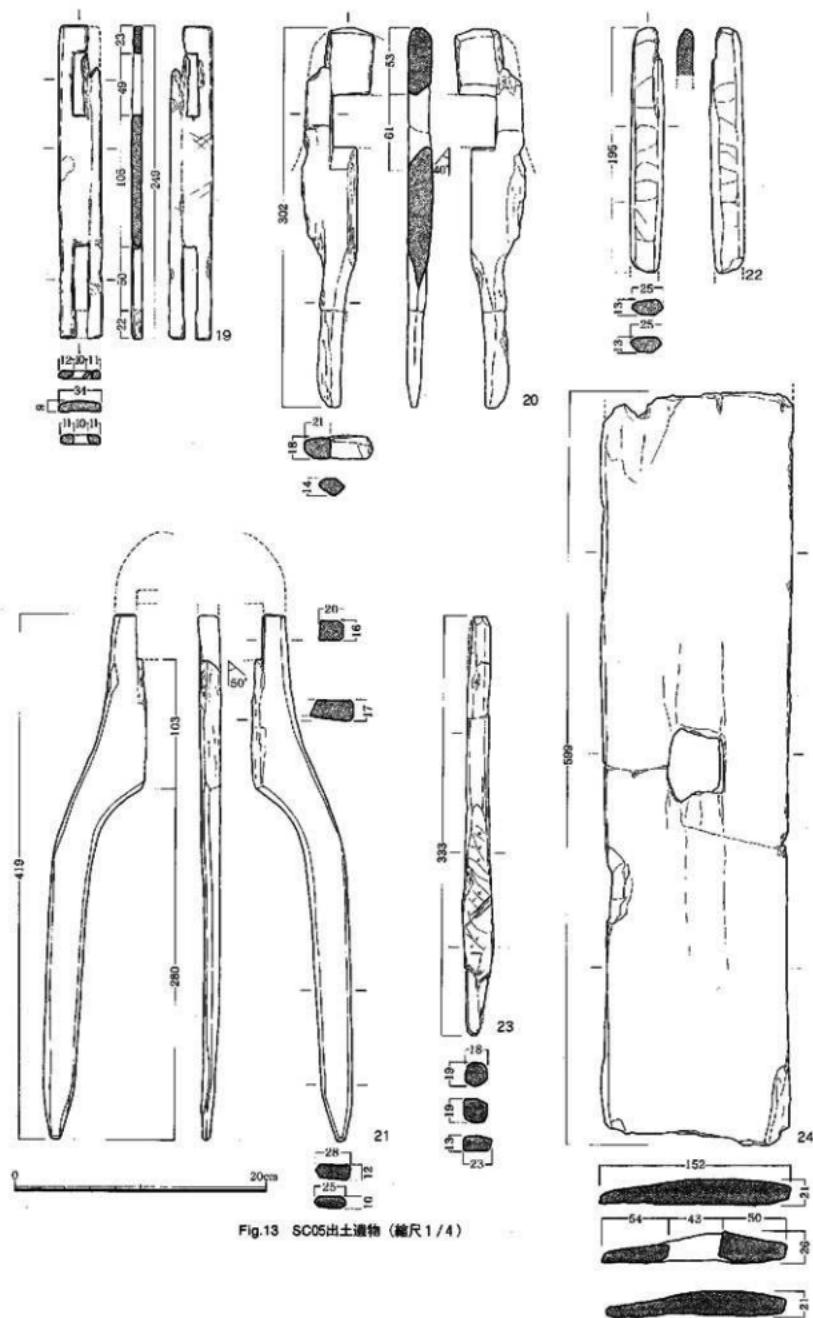


Fig.12 SC05出土遺物 (縮尺1/4)

16は丸太材を半裁し、両端を丁寧にケズリで仕上げた木製品である。端部の加工は主軸に対して斜めになっている。全長26.7cm、幅11.7cm、厚さ4.6cmを測る。柱穴からの出土であったので縫板の一種と考えたが、形状からみて最初から縫板として加工されたのではなく、何かから転用されたのかも知れない。容器の未完成の可能性も残されている。17はスギの柵目が密に通った板材である。雄具類の部材であろう。表面の一部に被熱の痕跡があり、何か別の部材が当たっていたのか一辺が直線的に焼けている。18は組合式机の挟み板である。全長43.5cm、厚さ1.4cmを測り、縱方向に半折している。スギの柵目材を使用し、丁寧に加工が施され、面取り以外は細かな加工痕が観察されない。柵穴は両端2箇所に開けられ、長さはともに6.9cmである。上面には刃物キズが残り、柵穴には直角方向に幅2.0cmの鼻栓の当たり痕が観察される。この挟み板は、机の両端を上下から挟むもので、この板の長さが机の短辺にあたる。雀居遺跡出土の挟み板の中では長い例になる。面取りの位置、鼻栓の



当たり痕、刃物キズの付き方から、この挟み板は机の上面に使用されたものと判断される。

19も机の挟み板である。全長24.9cm、幅3.4cm、厚さ0.9cmを測る。本例が第4次調査で出土した挟み板の最小例である。柄穴は5.0cmと4.9cmを測る。柄穴の一部や角の部分を欠失しているが全体の様子がよく分かる。スギの柾目材を用い、上面には面取り加工を施している。中層出土。20~24

は下層から出土した木製

品である。20は又鋤である。頭部と体部の一部が残っているが全体の形状は分からぬ。頭部の柄孔は整った長方形で、柄孔内側面は摩耗がなく平滑である。着柄角度は40度である。体部は保存状態の関係で又の部分の判断が難しい。残存長20.7cm、最大厚2.0cmを測り、鋤としてはかなり厚味を持っている。残存部分から二又鋤と考えておきたい。21は残存長41.9cmを測る又鋤である。長方形の柄孔の一部が残り、着柄角度は50度である。全体的にシャープに作られ、刃先は外縁が面取り、内側は両側からケズリ込まれて鋭い稜を持つ。刃先は1本しか残っていないが、全体的な形状から三又鋤と考えられる。復元される全体の刃幅は若干裾広がりとなる。22は扁平な棒状の加工品で、全体的にケズリ加工されている。上端部及び側面はともに尖らせるように削っている。下端部は欠損している。残存長19.5cm、幅2.5cm、厚さ1.3cmを測る。折れた又鋤の刃を何かに再加工したようにも見えるが用途は分からぬ。23は鎌柄の再加工品と考えられる棒状の木製品である。体部の中ほどから先端にかけてケズリを施し、平たく仕上げている。ケズリ込んだ部分に鎌の刃を装着した痕跡が残っている。全長

33.3cm、柄部の径1.9cmを測る。転用された用途は分からぬ。24は建築部材と思われる板状の木製品である。残存長59.9cm、幅15.2cm、厚さ2.1cmを測る。中央部に約4.3×4.3~5.0cmの方形孔を穿つ。孔の内側はケズリが施される。上端は欠損しているとみられ、側縁の凹みはケズリによるものか単なるキズか判別がつかない。

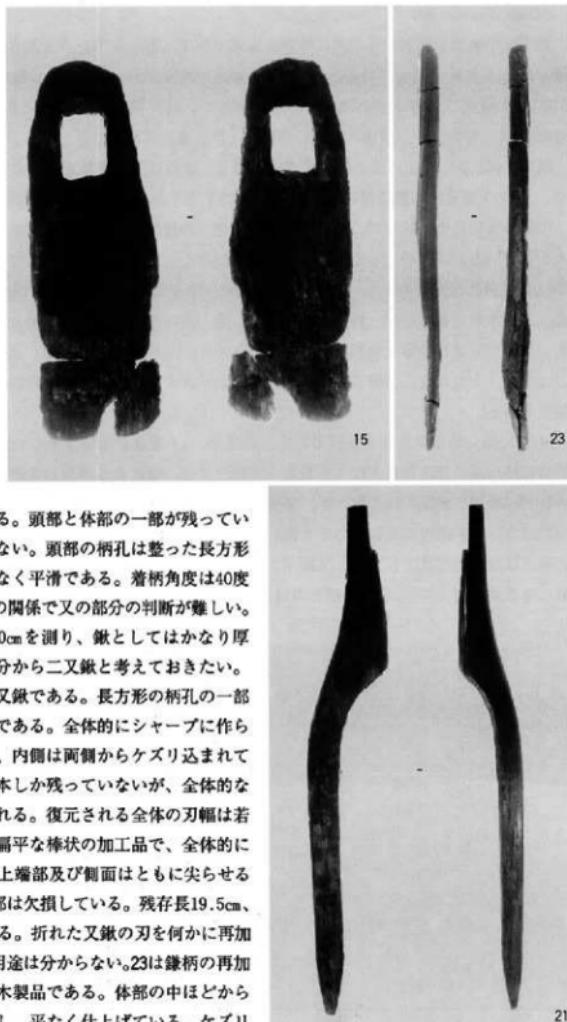


Fig.14 SC05出土遺物

SD02 (Fig15~80)

調査区中央部を南東から北西に伸びる大溝である。第5次調査の成果も含めて、集落を取り囲む環濠であることが判明している。SD02は調査区東南部においてSD03と重複しており、調査時はII区SD03の上層及び上層下で処理した。したがって、前回報告したようにII区SD03上層及び上層下はSD02と読み替える。調査区中央部西側をI区、東南部側をII区とする。

溝は、幅3.0~5.0m、深さ0.6~0.8mを測り、断面は逆台形状を呈する。人為的に掘り込まれた溝で、SB50大型建物の横は溝幅が狭くなり、杭を打ち込んで横木を渡し垣状の施設を設けている。

I区の木製品出土状況は、大型建物の横に垣状の施設があることなどから、この部分にまとまって出土している。流れが淀んだような状態で、流木などと共に溜ったものであろう。南側にいくに従つて出土木製品が少くなり、溝自体がSD01に大きく切られている。I区出土の主な木製品は、鉢・籠などの木製農具、横榙、堅杵、槽、容器、盤、高杯、ネズミ返し、組合式机の部材、編籠などである。供伴する土器は弥生後期後半が主体を占めている。木製品の時期もほぼ同時期と考えて差しつかえなかろう。ただし、上層には古式土師器を若干含んでいるので、時期的には下るもののが存在する可能性もある。

SD01に切られた東南部がII区である。II区SD03上層及び上層下とした部分がこれに当たる。溝と直角に径10cm前後の枝材がびっしり並んで検出され、付近から多量の木製品が出土している。自然災害などの特別な理由によるものか、廃絶時に一括投棄されたのか分からぬ。木製品の出土状況に規則性はないが、組合式机はそのまま潰れた状態で、鉢も身と柄が組み合わさったまま出土している。上層下は後期後半で、平鉢・又鉢・エブリなどの農具・横榙・斧柄などの工具、木甲、組合式机、盤（倒置式案）、剣物の鉢・漆塗りの筒形容器蓋、堅杵、建築部材などがある。



Fig.15 SD02遺物出土状況（北から）

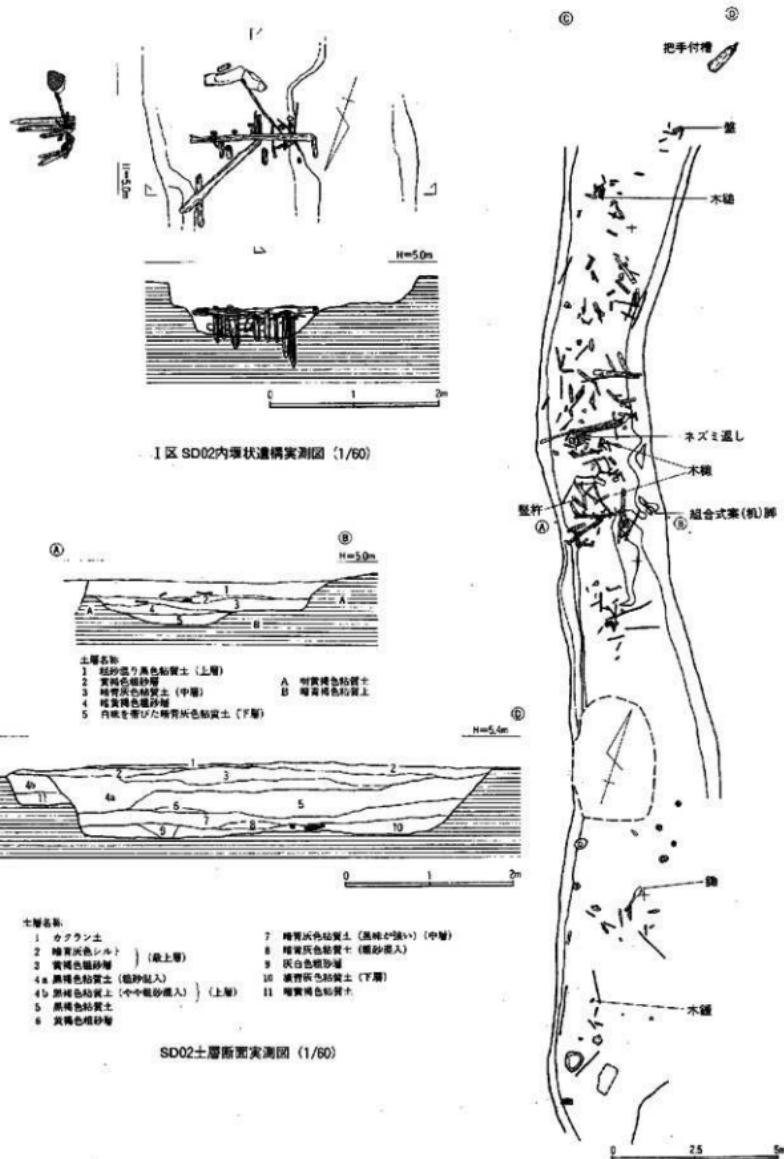


Fig.16 SD02遺構実測図

Fig.18は、短柄平鎌のセットである。出土時は完全な形で組み合はさっていた。25の身は肩部が張り、先端部がやや窄まる形態をとる。全長28.5cm、幅12.2cm、最大厚1.2cmである。身は土圧で部分的に変形しているが、保存状態は良好である。柄孔は4.7×3.6cmである。柄角度は40度を測る。柄孔と柄の組合せは、上下方向にはぴったり、横方向は柄の幅が小さく1cm強の隙間ができる。発掘当初から隙間が存在していた。何か別材で固定したか、上下を楔でしっかりと固定して使用したものであろう。26は柄の先端部に挟み込まれた楔である。幅2.1cm、長さ4.6cmで、薄い方が柄の握り部を向けて差し込まれていた。さらにこの楔の下には直角方向、つまり柄



Fig.17 SD02遺物出土状況

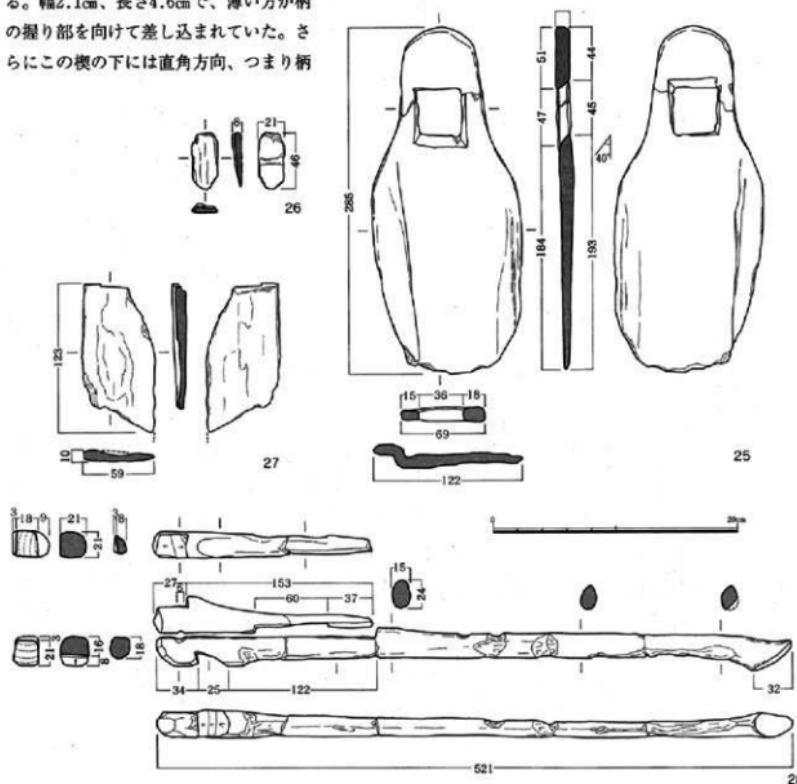


Fig.18 SD02出土遺物（縮尺1/4）

の軸に対して直角方向に1cm弱の丸棒状の栓が差し込まれていた。楔に残る横方向の圧痕は栓と接していた部分である。柄先端部にも栓を差し込む彫り込みがみられる。27はセットで取り上げた板材である。泥除けになるかと考えたが、材の形状から泥除の可能性は低いとみられる。28は泥除着装型短柄平鍬の柄である。全長52.1cmで、先端部18.0cmが鍬身及び泥除の着装部となる。柄の握り部は梢円形を呈し、先端部側からやや径を減じながら柄尻へと移行する。柄尻は下方に弯曲し、径を増しながら梢円形の端面を形成する。握り部は部分的な破損や腐食がみられる。柄先端部は鍬身及び楔が装着されたまま出土したので風化が少なく残りが良い。柄頭は肥厚して作られ、鍬身装着用の脱角の切り込みを入れる。また、端部は丸く面取り状に加工する。上面には栓を挟む窪みを入れる。鍬の組合せ具は全長18.0cmを測り、柄頭とぴったり合う。これも組み合わさった状態で出土したので風化が少なく残りが良い。下端面は平坦で角の稜もシャープである。柄頭と対応する位置に栓を挟む窪みを入れ、長さ6.0cmの泥除装着用の窓を作り出している。先端部は山形にケズリ整形を施し、鍬身装着用の欠き込みを入れる。鍬止めの段から泥除装着部にかけては、曲線を描きながら丁寧に整形されている。



Fig.19 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

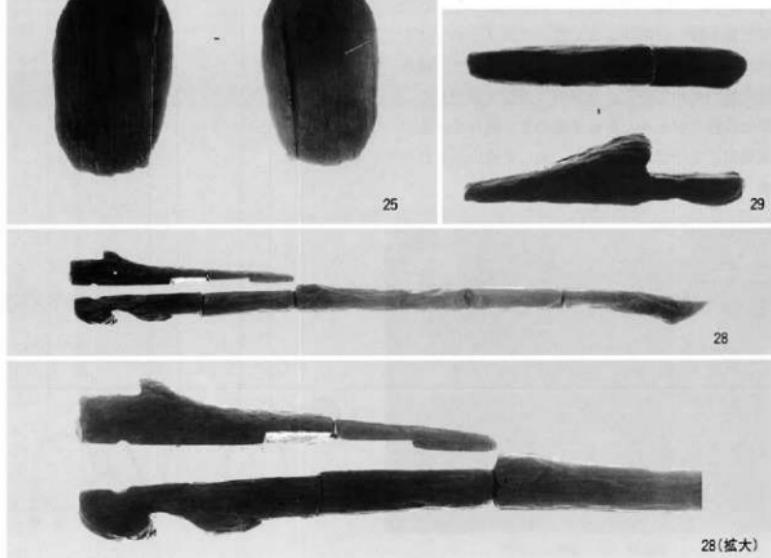


Fig.20 SD02出土遺物

泥除こそ検出されなかったが、他の部材は全部揃っており、短柄平鋸の構造が詳細に判明したことは重要である。

29は鍔の組合せ具である。全長13.5cmで、先端部をやや尖らす。全体にケズリ調整が施され銀柄と組み合わさる面にやや不明瞭であるが、小さい栓を使用したと思しき痕跡が認められる。

30は泥除装着型の銀柄である。全長90.5cm、組合せ具装着部の長さ27.1cmを測る。柄頭はややカーブをもって広がり、銀身装着のための切り込みを鋭角に入れる。切り込みの縁辺部はやや摩耗しているが、切り込み部は平坦で平滑に仕上げられている。組合せ具装着面も非常に平滑で、先端部には楔の当たっていた可能性を示すキズや摩耗らしきものが観察される。先端部の断面は略方形を示し、一辺が3cm前後になる。銀身装着部から柄部へ移行する部分は、もともと材に枝があったのかやや膨らみ、握り部はほぼ径を変えずに柄尻に向う。握り部の径は2.3~2.4cmで、柄尻で径を増し、屈曲して端部に至る。端部は長径6.1cm、短径4.9cmの楕円形を呈し、平滑に仕上げられた平坦面を持つ。形状もよく整っており、非常に丁寧に作られたことが窺える。材は広葉樹で芯抜き材が用いられている。全体的に残存状態が良く、平滑に仕上げられた面は平滑のまま残っている。未使用とまでは言えないが、大して使い込まれた感じには見えない状況を示している。



Fig.21 SD02遺物出土状況

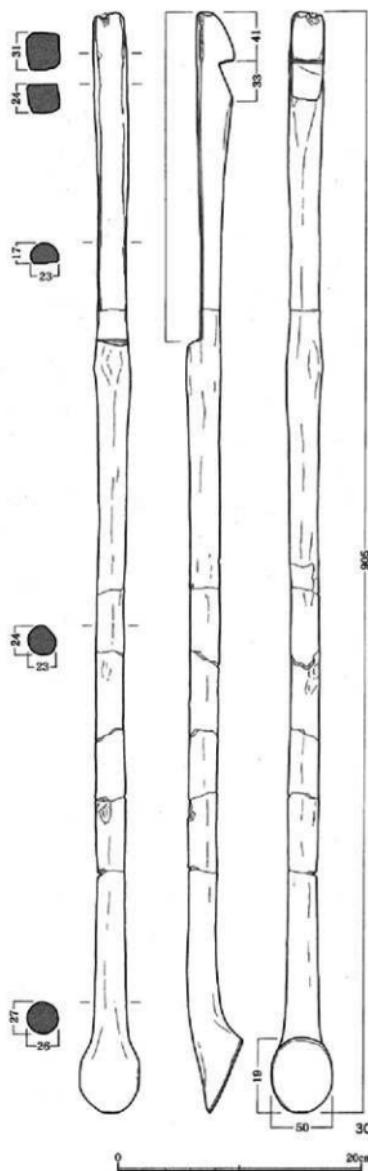


Fig.22 SD02出土遺物（縮尺1/4）

31～33は、上層及び下層出土の平鉗である。

31は残存長26.0cm、最大幅6.9cm、厚さ1.0～1.2cmを測る。側縁はややカーブをもって整形されている。側縁以外は全て破損しており全体の形状は掴めないが、カシの柾目材を用い、側縁の形狀が平鉗に類似することから平鉗と判断した。

32は全長37.2cmで、縱方向に半折している。頭部から緩やかにカーブを持って広がり、ナデ肩を呈して刃部へ移行する。刃部はやや窄まっている。最大厚は頭部で0.9cmを測り、刃部へ向かうに従つて徐々に薄くなっている。全体的に薄く什上げられた平鉗である。頭部の調整は面取りが施され、頭部から肩部にかけては平坦な側面を持ち後線が残る。肩から刃部にかけては薄くなって丸味を持っていて。柄孔は大きく開けられ、縱方向の長さは7.7cmもある。頭部側の断面は、両面より傾斜し中央で尖る形状になっているが、本来の傾きは判然としない。身の部分に1cm程の孔があるが、これは破損によるものである。材にはカシの柾目材が用いられている。

33も縱方向に半折した平鉗である。全長36.1cm、最大厚1.2cmを測る。全体の形状は、頭部から徐々に広がり、ナデ肩の肩部からさらに直線的に広がって刃部に移行する。裾広がりの形狀を呈し、刃部は隅角がやや丸くなるが、ほぼ直線的に伸びている。また、刃部には不明瞭ながら後線が認められる。側縁の調整はケズリによって行われ、平坦面が残る。柄孔の長さは縱方向で5.9cm、柄孔のケズリは残っているがその角度は保存パックの影響を少なからず受けているとみられ、確定しがたい。全体的に残りの良い鉗である。カシの柾目材を使用して丁寧に作られている。

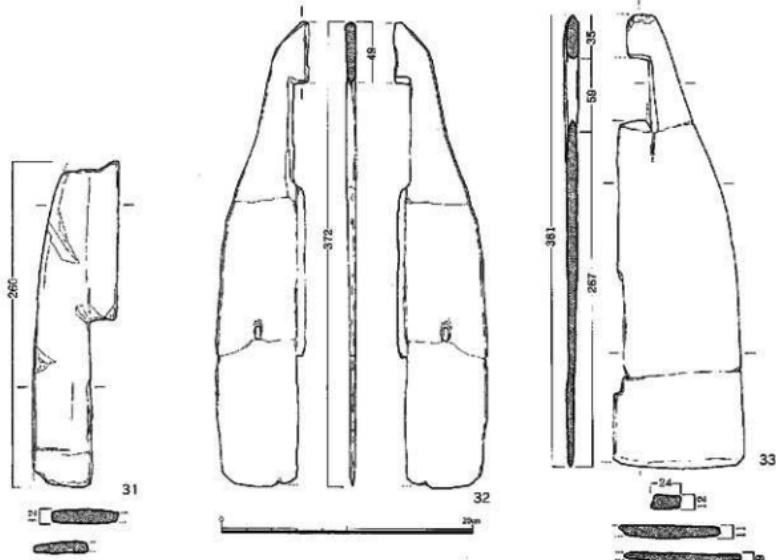


Fig.23 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

34~37もⅠ区及びⅡ区から出土した平鍬である。

34は全長29.8cm、幅8.7cm、最大厚1.4cmを測り、身幅の狭い平鋸である。柄孔の一部と刃部を欠失するが、全体の様子がよく分かる資料である。形状は相対的に大きめの頭部から、ほぼ肩部を形成せず緩やかに広がり、体部中央から幅を減じ、丸味を持って刃部に至る。刃部は一部欠損しているので、本来はもう少し長かったと思われる。また、縦断面図で刃部の厚さが急に減じているのは保存パックによる影響である。柄孔は5.8×3.3cmの長方形で、柄孔周囲の歪みは変形によるものであろう。着柄角度は40度である。頭部の周縁は面取り状にケズリ加工されている。材はカシの柾目材が用いられている。

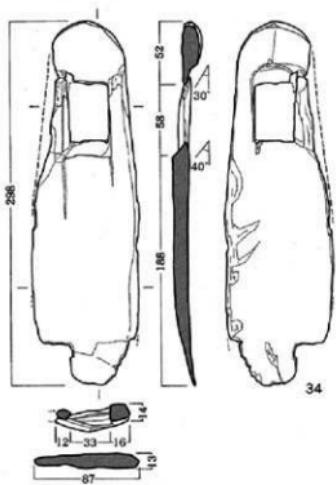


Fig.24 SD02遺物出土狀況

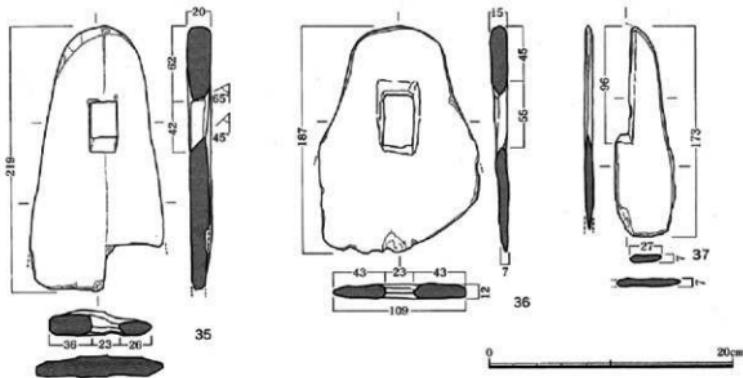


Fig.25 SD02出土遺物（縮尺1/4）

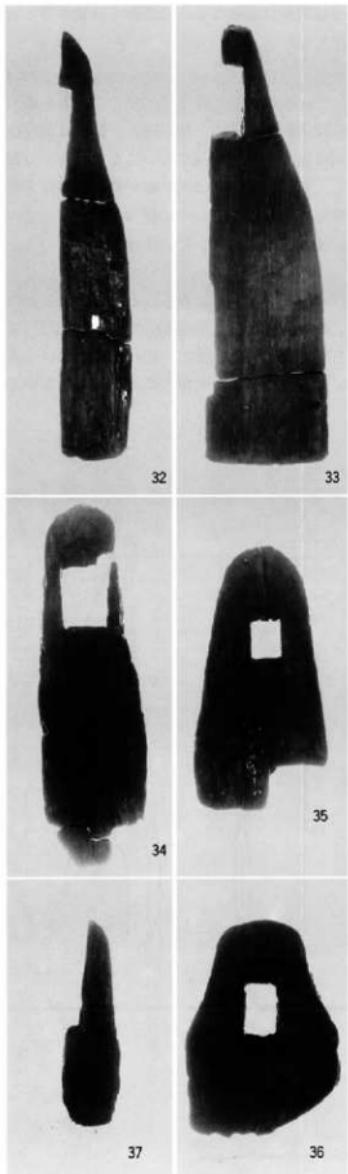


Fig.26 SD02出土遺物

35は刃部を欠失した平鉗である。残存長は21.9cm、残存幅11.2cm、最大厚2.0cmを測る。やや細身を呈し、比較的厚みのある作りになる。柄孔下端部から上の頭部長は10.4cm、柄孔付近の幅は8.5cmである。柄孔は小ぶりであるが、しっかり残存している。縦4.1cm、幅2.3cmの長方形で、着柄角度は45度である。柄孔が小さいため、頭部が鈍重に感じられる。全体の形状は、頭部の先端を丸く加工し、側面はケズリによって整形されている。頭部から体部にかけては緩やかに幅を広げ、不明瞭な肩部を形成し、さらに幅を増して刃部に至ると考えられる。刃部は欠失しているので、幅や長さは不明、全体に厚みがあるので身は長くなるかも知れない。木取りは柾目で、材にはカシが用いられている。

36は、34・35と異なり身幅の広い平鉗である。下層から出土したもので、残存長18.7cm、残存幅13.1cm、最大厚1.5cmを測る。肩部以下は、身の一部と刃部を欠失する。柄孔下端部から上の頭部長は10.0cmである。柄孔は長さ4.4cm、幅2.3cmを測り、34同様小さめである。柄孔周囲は腐食しているため、上下の断面はく字形の形状を呈するが、本来のものかどうか判断しがたい。保存のためパックしていたので少なからずそれの影響を受けていると思われる。したがって、正確な着柄角度は不明である。柄孔内の調整は両方向からケズリで行なわれている。頭部及び肩部もケズリで仕上げられている。頭部から肩部への移行部分は大きく広がり、体部は破損しているものの明瞭な肩部を形成するものと考えられる。柄孔が小さいため全体的に平べったい感じを受けるが、肩部と柄孔の位置から又鉗ではなく平鉗と判断される。

37は部分的にしか残存していないが、長方形の柄孔の一部と、頭部から肩部にかけての側縁が残っていることから平鉗の一部と考えられる。肩部はナデ肩で明瞭な段を有しない。残存長17.3cm、厚さは0.7cmで全体に摩耗が進んでいる。柄孔の長辺も摩耗のため範囲がはっきりしない。

以上、SD02出土の平鉗は、長さに対して身幅が広く、肩部が明瞭なものと、薄い作りでナデ肩となり、身が長くなるタイプ、それに肩部が不明瞭で身

幅が広がらない狭鋸タイプなどの形態が存在する。それらは特徴によってさらに細かく分類することが可能である。柄も長柄と短柄があり、構造的によく類似している。

Fig.27~30は二又鋸とみられる木製品である。

38は残存長47.0cm、厚さ1.3cmを測り、縦方向に半折している。頭部上端部は欠失しているため、全長は分からぬが、優に50cmを越えるであろう。頭部には方形の柄孔の一部が残る。柄孔は前後面から斜めに削り出され、く字形の縦断面を持つ。柄孔の幅は復元すれば4cmぐらいにならうか。身部の形状は、頭部から緩やかに広がりナデ肩の肩部に移行し、肩部以下はほぼ同じ幅で長めの刃部を形成する。幅は6cm前後である。身全体の断面は頭部側が最も厚く先端部にいくに従って薄くなっている。鋸身の叉状に切れ込みを入れた部分は両面から斜めに強く削り込まれ、鋭い稜線を持っている。材には良質のカシの柾目材が使用されている。

39は二又鋸の図版に組んでいるが、残存する形状とカシの柾目材であるであることから、二又鋸の身部の半折したものではないかとみられる木製品である。残存長42.9cm、残存幅6.7cm、残存厚2.1cmを測る。断面は上部が厚く、先端部に向かうに従って厚さを減じている。また、切れ込みのはいる内側が厚く整形され、側線は薄く加工されている。全体的に直線的であり、欠損の範囲が明確でないと

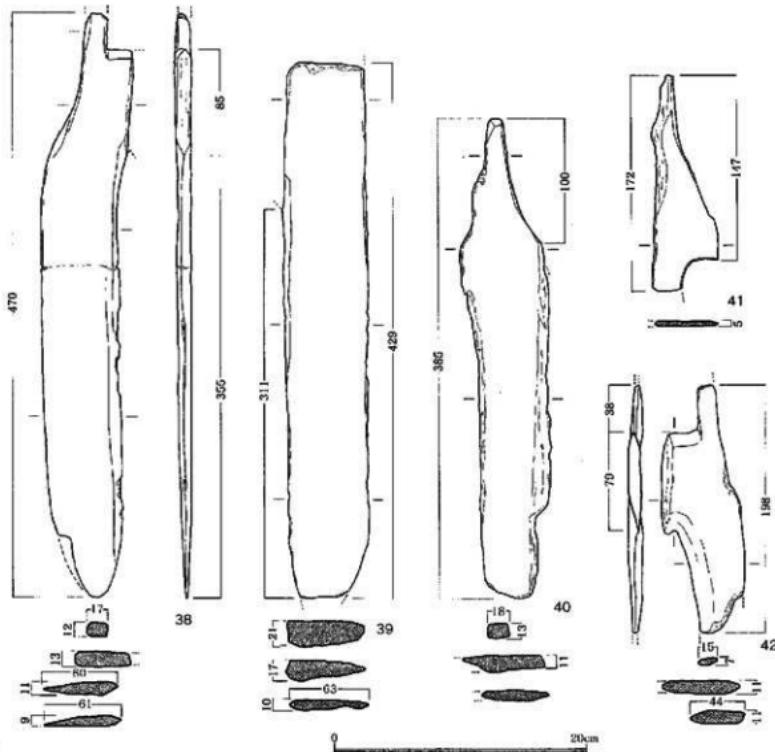


Fig.27 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

ころもあるところから板材の可能性も指摘されている。

40は全体的に欠損部が多くみられる木製品である。カシの柾目材を使用しているので鉤類の可能性を考えている。残存長38.5cm、最大厚1.3cmを測る。頭部から肩部の一部が残り、あとは破損しており全体の詳細は分からない。肩部に移行する部分は内弯気味に強く広がる。

おそらく明瞭な肩部を形成するものであろう。柄孔の推定位置から全形を考えると頭部から肩部までが短く、刃部が長くなりややバランスの悪い鉤になろうか。二又になるかどうかは不明である。

41はナスピ形曲柄鉤（または又鉤）の軸部笠形の部分とみられる破片である。残存長17.2cm、厚さ0.5cmで、幾分腐食しているとみても薄い作りである。直柄又鉤とするには、柄孔とすべき部分が0.5cm前後しかなく角度が付けられない。材にはカシの柾目材を使用。

42は二又鉤の柄孔から肩部にかけての破片である。上部に方形柄孔の一部が残り、側縁はナデ肩を呈する。また、又鉤の切り込み部が残り、刃部内側は両面からケズリによる加工が施され稜線を持つ。残存長19.8cm、厚さ1.1cmを測る。広葉樹の柾目材が素材として使用されている。



Fig.28 SD02遺物出土状況

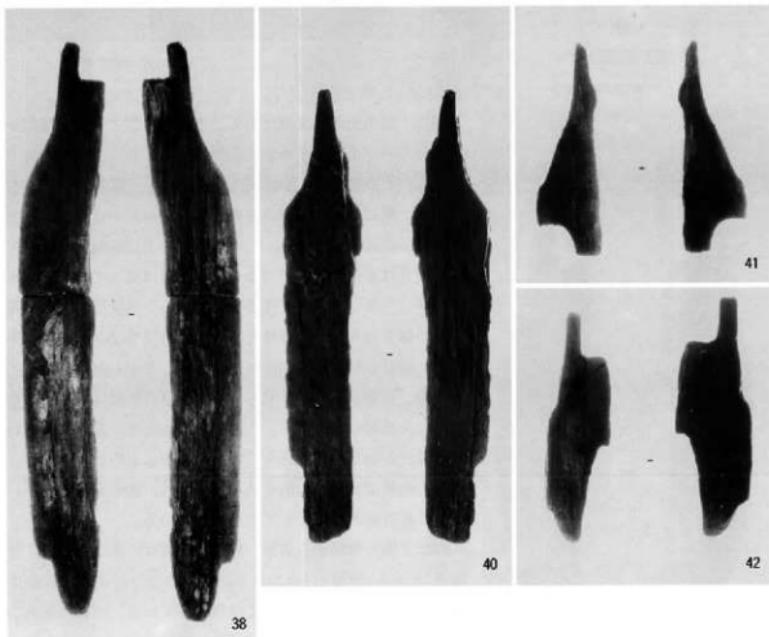


Fig.29 SD02出土遺物

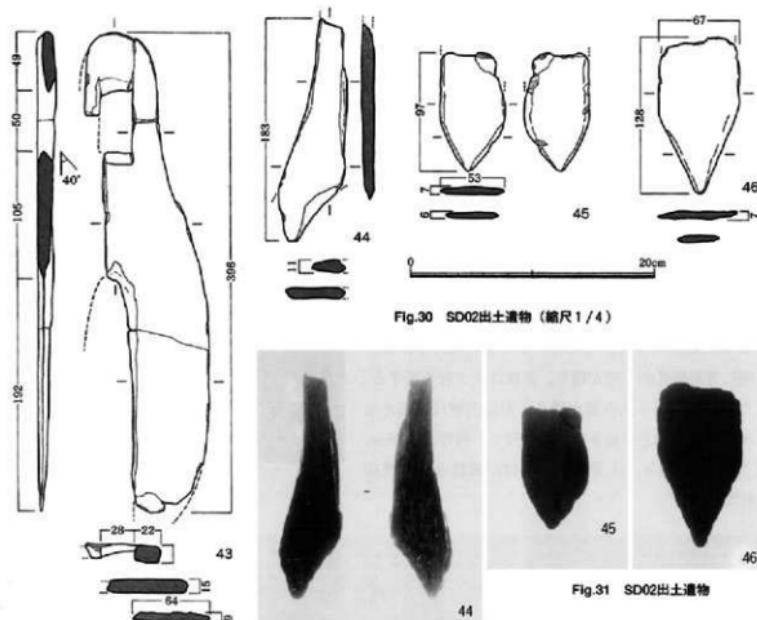


Fig.30 SD02出土遺物（縮尺1/4）

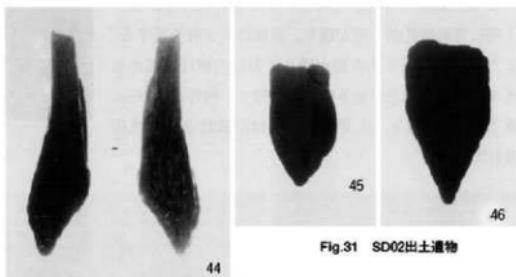
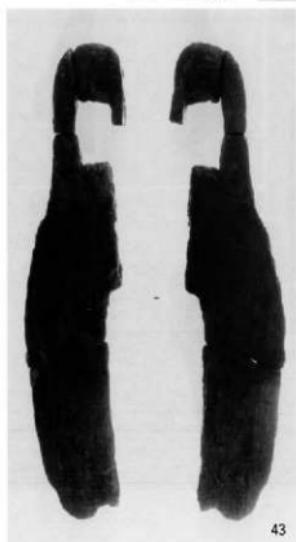


Fig.31 SD02出土遺物



43は下層出土の二叉歛である。身の半分弱と刃部先端部及び柄孔の一部を欠失するが、全体の様子が良く分かる資料である。残存長39.6cm、最大厚1.5cmを測る。頭部付近は左右方向に土圧による変形がみられる。柄孔は5.0×2.8cmで、上辺の一部は欠損している。したがって、上辺縦断面に示している傾きは本来のものではない。下辺部は残っており、表面の傾きはケズリによって作出されている。角度は40度。柄孔裏面の傾きはケズリではなく、保存の押圧でできた丸みであろう。頭部から肩部に向かっては弯曲しながら丸みをもって広がり、明瞭な肩部を形成しない。刃部の外縁はやや丸みを持って先端部へ移行する。先端部は欠失しているので全体の長さは分からぬが、さらに数cmは伸びるものとみられる。刃部の内側は両面から削り込みが施され、稜を有している。カシの柾目材が素材として使用されている。

44は又歛の頭部から肩部へ移行する部分の破片である。残存長18.3cm、厚さ1.1cmである。柄孔の部分は破損で確認できないが、下端部の刃部加工は残存している。内側は両面から削られ稜を持つ。刃部の形状及び刃幅から三叉歛であるこ



Fig.32 SD02遺物出土状況

とが想定される。

45・46はともに先端部を尖らした部材である。45は残存長9.7cm、幅5.3cm、厚さ0.7cmを測る。カシ材を使用し、形状、厚味等から二又鋤の刃部ではなかろうか。上部は折損している。下方4cmの部分には両面から削り込まれた刃が作られ、比較的シャープな後が残されている。先端部は若干腐食しているのみで、刃こぼれもない。あまり使い込まれたものではないよう目に見受けられる。46もよく似た形状を呈している。上端は欠損しており、残存長12.8cm、幅6.6cm、厚さ0.7cmを測る。先端部は尖り、明瞭なケズリ痕はないが、両面から薄くなる刃部を持つ。やや形状に不安はあるが、二又鋤の刃部ではないかと推測する。

47～50は鋤の頭部片である。

47は残存長8.4cm、残存幅9.0cm、最大厚1.4cmを測る。頭部は丸く整形され、面取り加工が施される。柄孔の途中で折損しているため、柄孔の長さは分からぬが、幅は3.5cmである。柄孔の縦断面ではく字形に近いように見えるが、本来の形か腐食などによるものかははつきりしない。着柄角度は41度と見られる。頭部が丸く整形されていること、頭部から柄孔中位で大きく広がることなどから鋤の頭部ではないかと考えられる。

48は柄孔中位で折れ、かつ半折している鋤頭部である。残存長7.1cm、厚さ1.9cmで比較的厚味をもつてている。大きく破損しているので長方形柄孔の規模は分からぬが、断面は斜めに加工されている。頭部から肩部へ移行する部分も破損しているのではつきり言えないが、あまり強く広がるようには見えない。厚味のあるカシの柾目材とあわせて考えると又鋤の頭部と推測される。

49も48とよく似た形状を呈している。柄孔のやや上位で折損している。残存長6.1cm、厚さ1.8cmを測り、比較的厚味を持っている。側縁部は破損していて調整は分からぬが、頭部はやや尖ったようによく作られている。残存幅は5.7cmで、その大部分を方形の柄孔で占め、体部の幅は細くなっている。外縁の広がりもあり大きくならないとみられる。厚味のあるカシの柾目材、外縁下方への広がりが少ない形状などから、これも48同様又鋤の頭部ではないかと想定される。

50は広葉樹の柾目材で、鋤の頭端部から柄孔にかけての部分と思われる。残存長5.3cm、厚さ1.4cmを測り、下端が柄孔の上辺部に当たる。ただし、直角に近い角度になっているので、着柄角度が直角に近いのは本来の形状とは言い難い。残存部が少ないので平鋤か又鋤か判断がつかない。

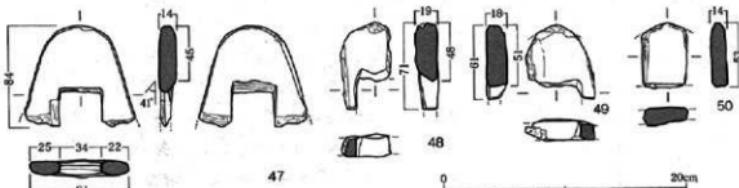


Fig.33 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

Fig.35・36は三又鍼もしくは四又鍼の類である。

51は三叉歛である。半折しておおり、頭部の大部分と刃部の半分から先を失している。残存長30.1cm、残存幅8.0cm、最大厚1.6cmを測る。比較的の残りは良いが、加工痕は見えない。柄孔は長方形であったとみられるが、柄穴の長側辺は破損面と腐食のため境界がはっきりしない。また、柄孔横の亀裂の為、

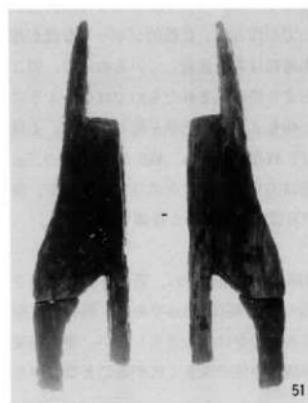


Fig.34 SD02出土遺物

頭部がやや内側に傾く。着柄角度は40度である。側縁は頭部から徐々に幅を増し、途中でやや角度を変えながら大きく広がり、ナデ屑の肩部へと移行する。刃部は両側から削り込んで作られたと考えられ、側縁が尖がりシャープな稜線が残る。素材にはカシの柾目材が用いられている。

52も三又鋸である。頭部の半分、体部の約3分の2を欠失する。頭部は比較的細長く作られ、頭端部はあまり丸味をもたず、むしろ平坦に仕上げられている。全長39.5cm、厚さ1.5cmを測る。柄孔の大きさは、短辺は破損で不明ながら、長辺は6.5cmである。柄の挿入角度はおよそ43度とみられる。側線の形状は、頭部から内弯気味に大きく広がり、明瞭な肩部を形成する。刃部は1本しか残っていないが、長さ18.5cmである。体部の長さの割には刃部の長さが短いので、使い減りしたものであろうか。刃部内側は両側から加工されている。全体的に腐食が進んでおり、細かく折損している。ケズリ痕なども見られない。

53は、残存長52.3cm、最大厚1.6cmを測る。縦に大き

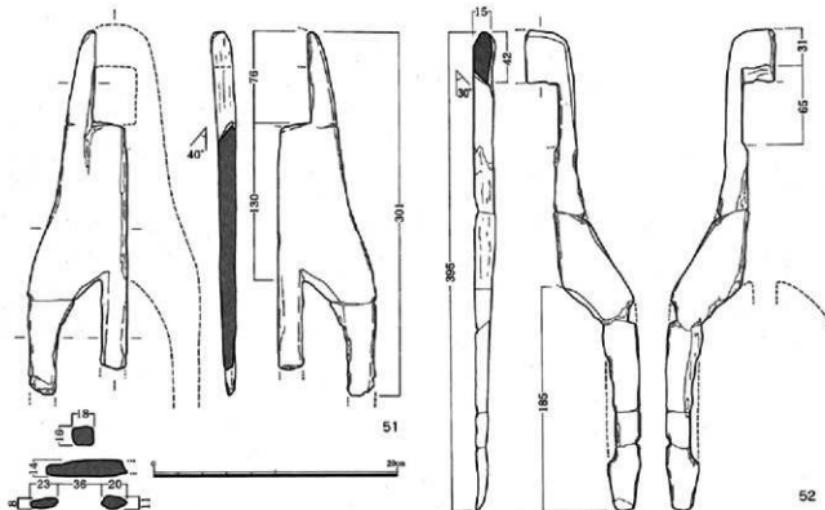


Fig.35 SD02出土遺物（縮尺1/4）

く割れており、約3分の1程度が残存している。柄孔の一部は残っているが、孔側面の腐食のため孔長辺の範囲は確定できなかった。頭部はやや直線的に形成され、下部にいくに従って徐々に広がり、大きく張らない明瞭な肩部へ移行する。柄孔から又部までは比較的短く、細長い長脚の刃部となる。刃部は両面からケズりで作られ、端部近くは腐食、摩耗のため稜線が不明確になっている。柄孔の傾斜角度は31度。傾斜面が長く、傾斜は片方のみとなっている。肩の張りが小さく、柄孔から又部まで短いことなどから二又と考えられなくもないが、刃部幅が細いことから、とりあえず三又鋏と考えておきたい。

54は53と同様肩部の広がりが少なく、直線的で長い刃部を有する又鋸の一部分である。残存長40.0cm、厚さ1.4cmを測る。刃部の内側には両面から削り加工が施され、稜が強く残る。質のあまり良くない板材を使用して制作された感がある。全体的な形状から三又鋸になるものと考えられる。

55はナデ肩ではあるが肩部が張り、刃部の大きさから見て三又鉤と推測される。残存長26.1cm、厚さ1.1cmを測る。柄孔の痕跡は破損のため確認できない。刃部内側は両面から削り込まれ、明瞭な稜線が残る。カシの坯目材を使用し、作りは良好である。

56は三叉鍔の肩から刃部にかけての部分と思われる。残存

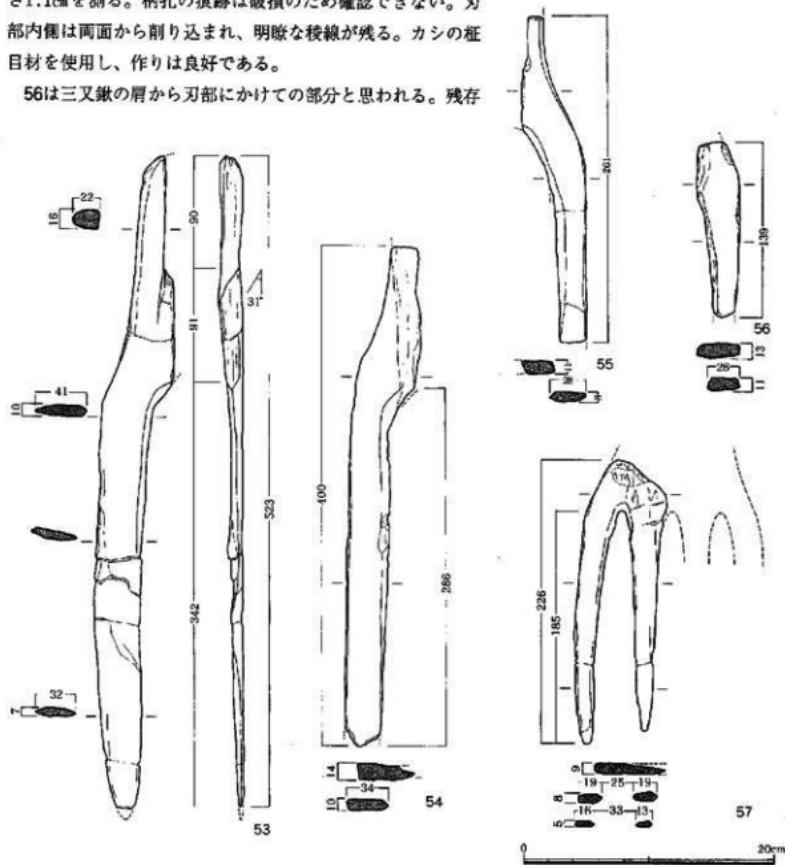


Fig.36 SD02出土遺物（縮尺1/4）

長13.9cm、最大厚1.3cmを測る。肩の張りはあまり強くはない。刃部の内側は両面から加工されている。また、素材にはカシの柾目材が使用されている。

57は又鋸の刃部である。刃部の大きさからみて4本以上の刃があったと推定される。残存長22.6cm、厚さ0.9cmを測る。刃部の長さは18.5cmである。刃部内側は加工による稜線が認められる。全体に腐食が進んでいるので、断面図は本来の形状とはやや異なっている。



Fig.37 SD02出土遺物

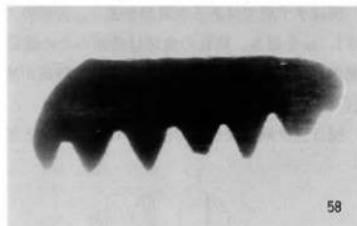
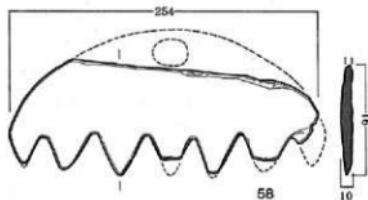


Fig.38 SD02出土遺物

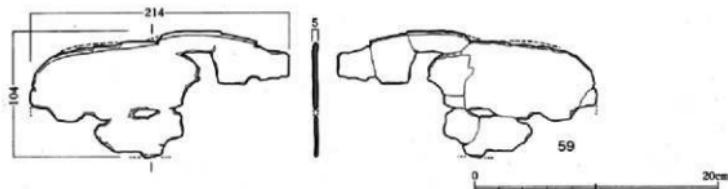


Fig.39 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

58は、上層の下部から出土したサラエである。柄孔のある上部3分の1程度の部分と刃部3箇所を欠失する。残存幅25.4cm、残存高9.6cm、厚さ1.0cmを測る。周縁のカーブから復元すると幅27cm、高さ12cm程度になるものと推定される。上縁は円弧を描き、刃部には7本の刃が作り出されている。刃先の端部を結んでいくと刃部もやや円弧を描いている。使用によってできたものなのか、初めから円弧を持つ素材から作り出されたものなのか判然としない。最大刃長3.4cm、最大刃幅4.4cmを測る。刃はひとつづつ外縁から切り込みを入れて作出されているものと考えられる。刃部が少し円弧を描いているにもかかわらず、刃の深さはほぼ一定である。両サイドの刃幅が若干小さくなっている。柄孔部は欠失しているので形状や大きさなどは分からない。材にはカシの柾目材が使用されている。類似した資料には、近くの那珂君体遺跡や那珂久平遺跡などから出土したものがある。

59は残存幅21.4cm、高さ10.4cm、厚さ0.5cmを測る。広葉樹の柾目材を用いているところから農具ではないかと思われる。劣化して破損しているが、上縁に梢円形に近いラインを残す。形状からみてエブリカあるいは泥除ではないかと推測される。現時点では薄い作りになっているが本来のものか腐食によるものかは分からない。

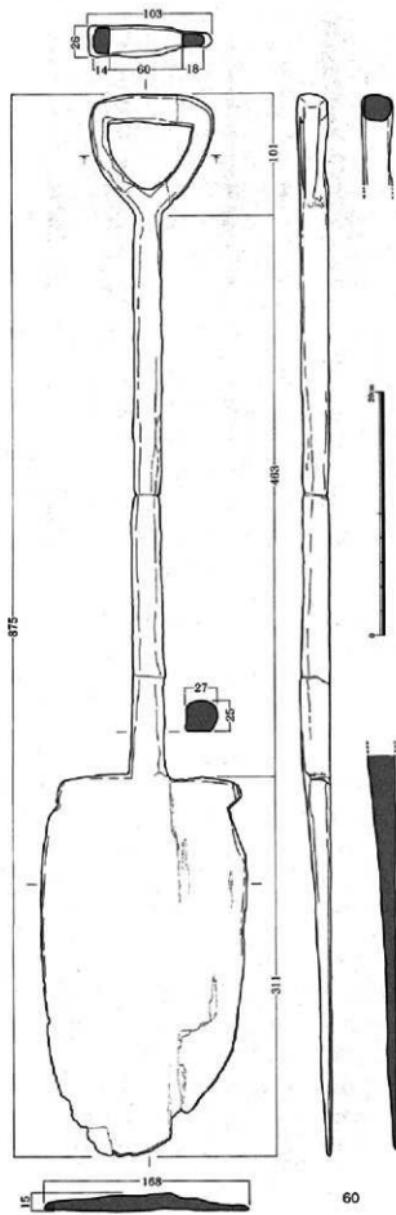


Fig.40 SD02遺物出土状況

60は一本の長柄鋤である。溝底面に横たえられた様な状態で出土した。全長87.5cmである。把手は現代のスコップと同じような形態を呈し、略三角形の窓を開ける。幅10.3cm、高さ10.1cm、最大厚2.6cmを測る。把手の一方は腐食と劣化によって薄くなっている。柄は略円形で径2.5~2.7cmである。本来よりもやや径が小さくなっていると考えられる。鋤身の部分は柄の軸と同じ方向にまっすぐ取り付き、直角に肩部が広がる。身の長さは31.1cm、幅16.8cm、厚さは中央部やや上で1.5cmを測る。身の厚さは柄との接合部が最も厚く、先端部にいくに従って薄くなっている。断面では、側縁部が薄く、中央部が厚くなっている。肩部には三角形の切り込みを入れるが、片方は破損していて、切り込まれた先端の痕跡だけが残っている。この鋤は出土した時点で既に腐食が進んでおり、身の先端が非常に薄くなっていた。しかし、ほぼ完形に近い状態で残っており資料的価値は高いと言えよう。

Fig.42は豊作の類である。

61はほぼ完形の豊作である。全長101.3cm、上端部の掘き部端をやや破損している。上部掘き部径は 5.2×6.3 cmで、やや楕円形を呈し、最大径は中位にある。中央部の掘り部最小径は 2.9×3.3 cmである。下部の掘き部は徐々に径を増し、先端が最も大きくなるが裏面は破

◀ Fig.41 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

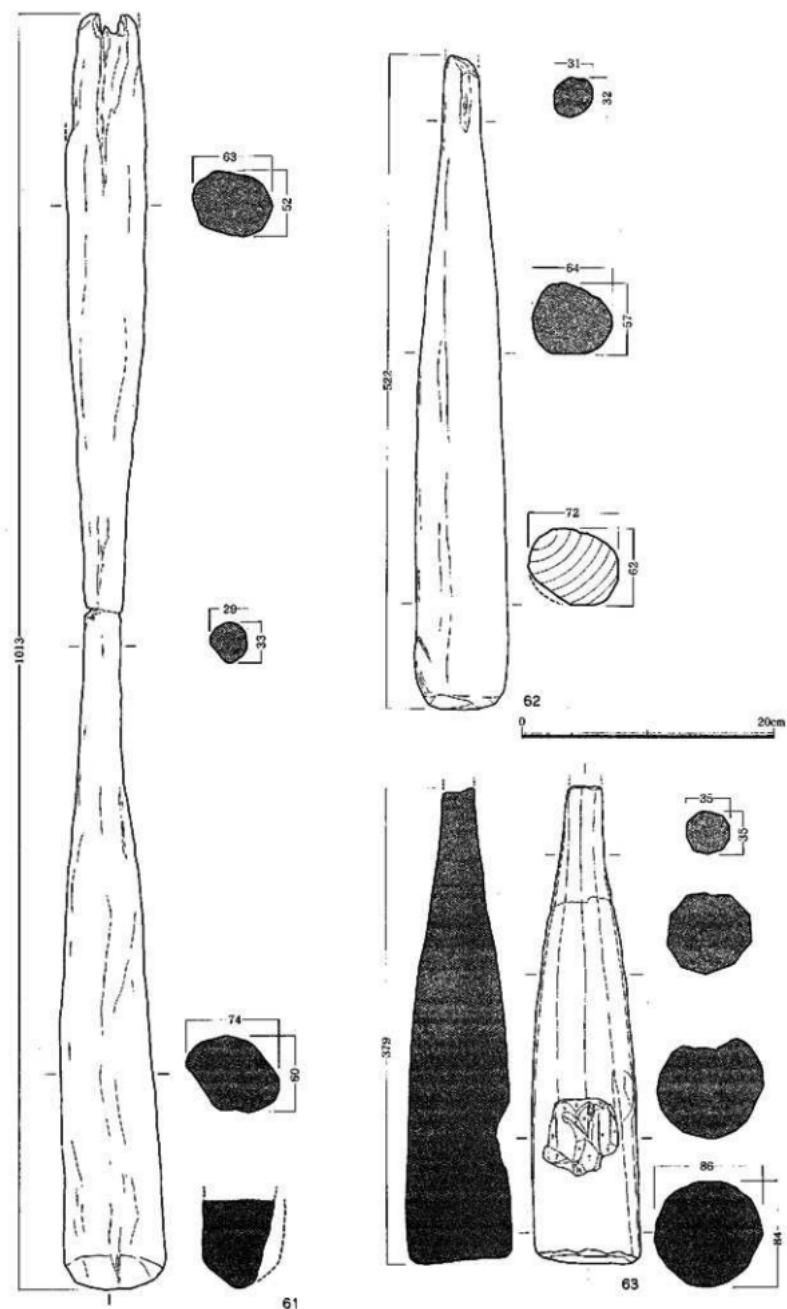


Fig.42 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

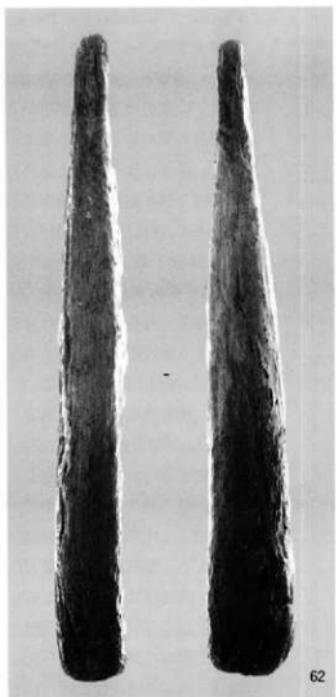
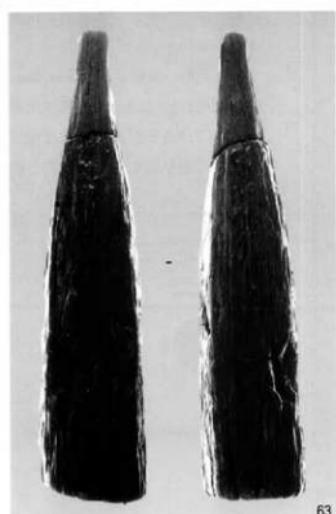


Fig.43 SD02遺物出土状況

損している。先端部から17.0cm握り部に寄った抜き部中位の径は $6.0 \times 7.4\text{cm}$ であり、やや変形している。一度乾燥して全体が縮んだように見受けられるが、変形はその時のものであろうか。抜き部と握り部の境界は不明瞭である。端部は摩耗して丸味を帯び、擦りつぶしに使用されてことが窺える。芯持ち材を使用している。

62は横に半折した堅杵である。残存長 52.2cm で復元すれば 1m を超える長さになる。握り部径 $3.1 \times 3.2\text{cm}$ 、抜き部内側径 $5.7 \times 6.4\text{cm}$ 、抜き部先端径 $6.2 \times 7.2\text{cm}$ を測る。形状は握り部から徐々に径を増し、抜き部はほぼ円柱状になる。61と同様握り部と抜き部との境は不明瞭である。芯抜きの削材が素材として使われ、樹種は広葉樹である。先端部は使用によって丸味を帯びている。一度乾燥したのか、表面のひび割れが目立つ。形状もやや歪んでいる。

63も横に半折した堅杵である。残存長 37.9cm 、握り部を欠損しているので、本来は長い堅杵であったと考えられる。握り部の最小径 $2.8 \times 3.0\text{cm}$ 、抜き部最大径 $8.4 \times 8.6\text{cm}$ を測る。形状は握り部から徐々に径を増し、明瞭な境界を持たずに抜き部に移行する。握り部の径に比して抜き部の径は比較的太い。先端部はやや歪んでいる。広葉樹の芯持ち材を使用し、全体的に整形時の面取り加工がそのまま残っている。完成品とは言い難い製品である。側面の一部に加工あるいは使用痕と思われる窪みがあるところから、製作途中で折れ、横樋に転用された可能性も棄てきれない。ただし、重量がありすぎるか。



◀ Fig.44 SD02出土遺物（縮尺1/4）

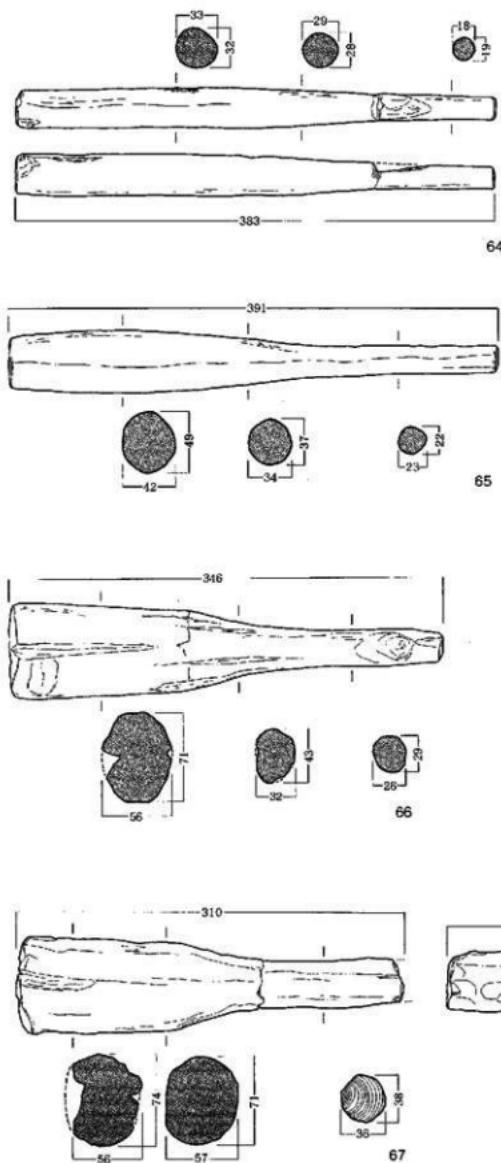


Fig.45-47は横柾の一群である。

64は全長38.3cm、握り部径1.8×1.9cm、柾部中央部径3.2×3.3cmを測る。広葉樹の芯持材が用いられた細身の柾である。握り部はやや短く、徐々に径を増して柾部となる。握り部と柾部との境界は不明瞭である。柾部側面の一部(端部から柾部下端まで17.0cmの範囲)は形が歪み平坦面が出来ている。繰り返し打ち付けられた使用痕か。握り部の端面及び柾部の端面は平坦に仕上げられている。

65は、細身完形の横柾である。全長39.1cm、握り部径2.2×2.3cm、柾部中央部径4.2×4.9cmを測る。

形状は同径のやや長めの握り部があり、徐々に径を増しながら柾部へ移行する。柾部中央部に最大径があり、先端部はやや細くなる。握り部と柾部との境界は不明瞭である。広葉樹の割材が用いられ、両端面はほぼ平坦に仕上げられている。摩滅が著しく加工痕ははつきりしない。

66も完形の横柾で、全長34.6cm、握り部径2.6×2.9cm、柾部中央部径5.6×7.1cmを測る。断面は全体的に梢円形を呈する。握り部と柾

Fig.45 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

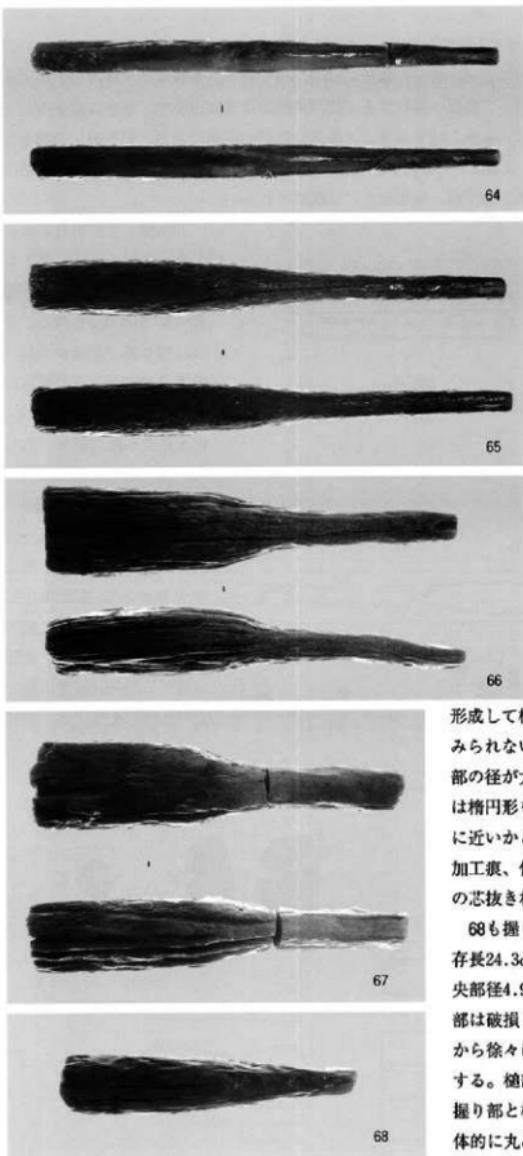


Fig.46 SD02出土遺物

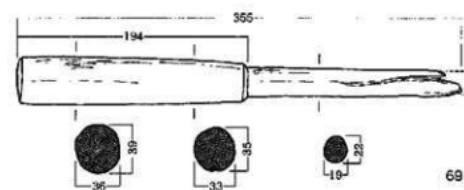
部との境には、不明瞭ながら棱線がつく。握り部の端部近くには節がある。形状は、握り部から徐々に径を増し、不明瞭な傾斜変換線（稜）を形成しながら植部に移行する。植部はさらに緩やかに径を増し先端部に至る。したがって、最大径は先端部に存在する。先端面は腐食のため表面状態が良くないが、丸味なく平坦であったことが見て取れる。広葉樹の芯持ち材が素材として使われている。

67は握り部の一部を失くす横櫛である。残存長31.0cm、握り部径3.6×3.8cm、植部先端径5.6×7.4cmを測る。握り部はほぼ円形で比較的太く、欠損部も含めて考えると植部に比べて相対的に長い。形状はほぼ同径の握り部から徐々に径を増し、不明瞭な肩部を形成して植部に至る。境には明確な棱線はみられない。植部は殆ど同径で僅かに先端部の径が大きいといった程度である。断面は梢円形を呈する。先端部は平坦なタイプに近いかと思われる。全体的に腐食のため加工痕、使用痕等は観察できない。広葉樹の芯抜き材が素材として用いられている。

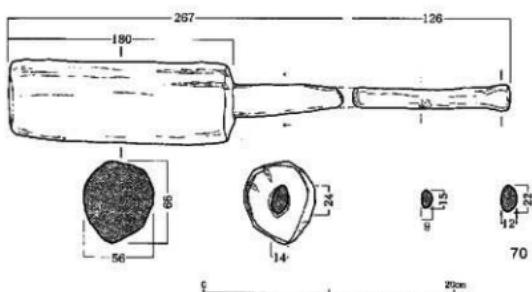
68も握り部の一部を失くす横櫛である。残存長24.3cm、握り部径2.6×2.8cm、植部中央部径4.9×5.0cmを測る。植部先端部の一部は破損している所がある。形状は握り部から徐々に径を増し、そのまま植部に移行する。植部の径は同径で先端部まで続く。握り部と植部との境界は不明瞭である。全体的に丸みの強い断面形を呈し、表面には調整のケズリ痕が残る。素材には広葉樹の

芯持材が使用されている。

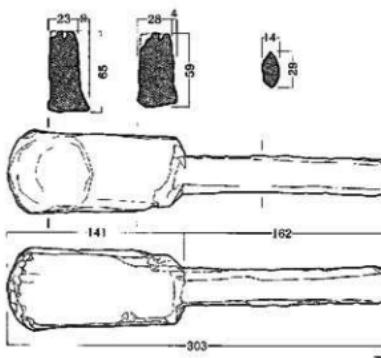
69は握り部と槌部との境に段を有する横槌である。握り部の端部は欠失する。残存長35.5cm、槌部の長さは19.4cmを測る。握り部径1.9×2.2cm、槌部先端径3.6×3.9cmである。形状はやや梢円形を呈する握り部が長く続き、明瞭な段を持って槌部へ移行する。槌部の断面はほぼ円形で、僅かに幅を増しながら中央部を形成し、先端部はほんの少し径を減する。端部は比較的平坦である。握り部は端部を欠失しているので本来はもっと長くなるとみられる。全体的に細身で長いタイプの横槌である。広葉樹の割材が素材として使用されている。加工痕、使用痕などは観察されない。



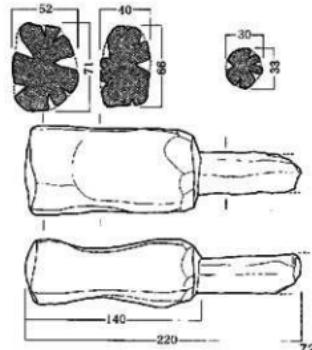
69



70



71



72

70は握り部が折れて接合しないが同一個体と考えられる。全長39.3+ α cm、槌部の長さ18.0cmを測る。形状は握り部が細身かつ長い特徴を残すが、その細さは腐食によるものと思われる。出土時から既に細身であった。握り部の断面は梢円形で、中央部は0.9×1.5cm、端部は幅広に作り出し1.2×2.2cmである。握り部は中央部から槌部に向うに従って幅を増し、最大幅が2.4cmになる。槌部中央部は断面5.6×6.6cmで円形に近い梢円形を呈する。槌部

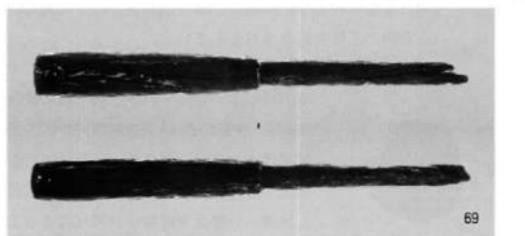
Fig.47 SD02出土遺物（縮尺1/4）

の大きさは手前も先端部もあまり変わらない。端面は平坦に近い。材は広葉樹の芯抜き材が使用されている。

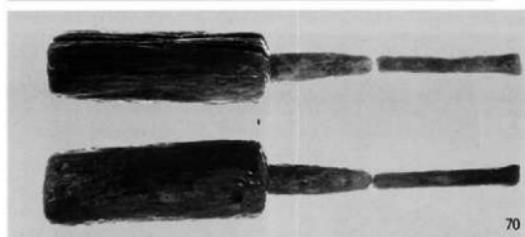
71はこれまでと異なった植部を持つ横柾である。完形品で、全長30.3cm、握り部は扁平で $1.4 \times 2.9\text{cm}$ 、植部先端は $3.2 \times 6.5\text{cm}$ を測る。形状はほぼ同じ幅の握り部が 16.2cm 続き、明瞭な段を有して長さ 14.1cm の植部に移行する。植部は平坦で横断面は長方形を呈する。これについては柾ではなくタタキ板の可能性が指摘されている。幅はほんの僅かではあるが先端部に向うに従って広がっている。特に先端部は急に広がっており、端部は丸く整形されている。植部の先端近くには使用痕と考えられる若干の窪みがある。よく使い込まれた横柾であろう。その他の部分は表面が摩滅しており加工痕などははっきりしない。材には広葉樹の柾目材が使用されている。

72は握り部と植部との境に段を持つタイプである。残存長 22.0cm 、植部長 14.0cm を測る。握り部は径 $3.0 \times 3.3\text{cm}$ でほぼ円形を呈し、植部との境から端部に向かって僅かに径を増している。端部は欠失しているが付近はさらに径を増しており、すべり止め状にふくらむものであろうか。植部は中央部径

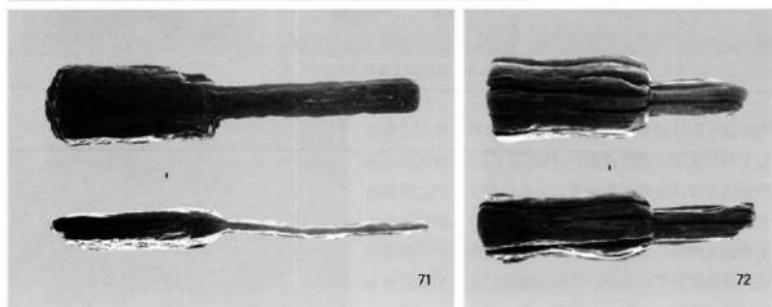
$4.0 \times 6.6\text{cm}$ 、先端部径 $5.2 \times 7.1\text{cm}$ を測る。やや植円形を呈し、先端部側が若干幅広く厚味も大きい。先端面はほぼ平坦に近いが僅かにふくらむ。植部両面には明瞭な使用痕が観察され、両面は顯著に窪む。側縁の一部も平坦面になっているところから、これも使用によってできたものと考えられる。握り部側の段はケズリによって加工されている。全体的に亀裂が著しくその他の加工痕などの詳細は分からぬ。広葉樹の芯持ち材が使われている。



69



70



71

72

Fig.48 SD02出土遺物

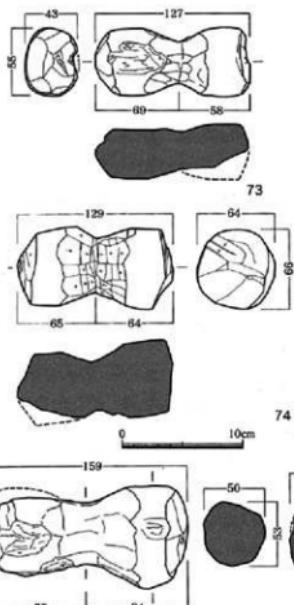


Fig.49 SD02出土遺物（縮尺1/4）

SD02からは木鎌が数点出土している。Fig.49はそれらの木鎌である。径5~8cm前後の棒材を15cm前後に切り落とし、中央部に削り込みを入れたものである。両端部もケズリによって整形されている。

73はやや小ぶりの木鎌である。全長12.7cm、断面は梢円形を呈し4.3×5.5cmを測る。中央部は谷状に両方向からケズリ込み、端部はやや外膨らみに削って鼓形に仕上げる。全体に角が取れ丸味を持つ。広葉樹の芯持ち材が使用されている。

74は全長12.9cm、径6.4×6.6cmで断面はほぼ円形を呈する。下端に欠損した部分が存在する。中央部は谷所に鋭く削り込まれ、両端面も中心に向って削りが加えられる。全体は鼓形で、両端のケズリ面はシャープである。広葉樹の芯持ち材を素材としている。

75はやや大ぶりの木鎌である。全体的に腐食が進んで片方は小さくなっている。加工痕も曖昧である。全長15.9cm、中央部径5.0×5.3cm、体部径8.4×8.4cmを測る。断面は略円形を呈する。広葉樹の芯持ち材で他の木鎌と同様、谷部及び両端はケズリによって加工されている。

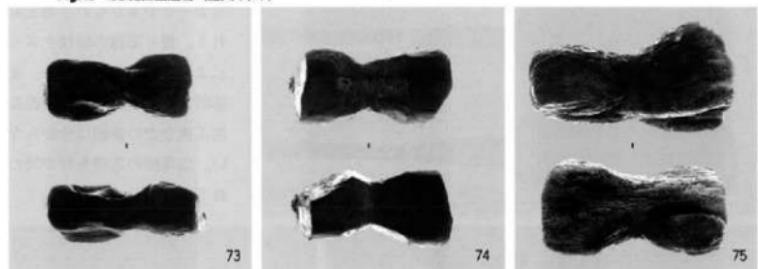


Fig.50 SD02出土遺物（縮尺1/4）

容器類の出土も注目されるものがいくつかある。

Fig.52~76は高壺の脚端部である。全体にひどく腐食しており表面の状態は悪い。外形ラインは、直径37.0cmの正円とはほぼ合致しており、くるいが少ない。精製品であったことが窺える。厚味は全く異なるが第5次出土の高壺脚部とよく類似している。横断面では裾端部は丸身を帯びているが、これは腐食によるものであろう。本来角張っていたと思われる。



Fig.51 SD02遺物出土状況

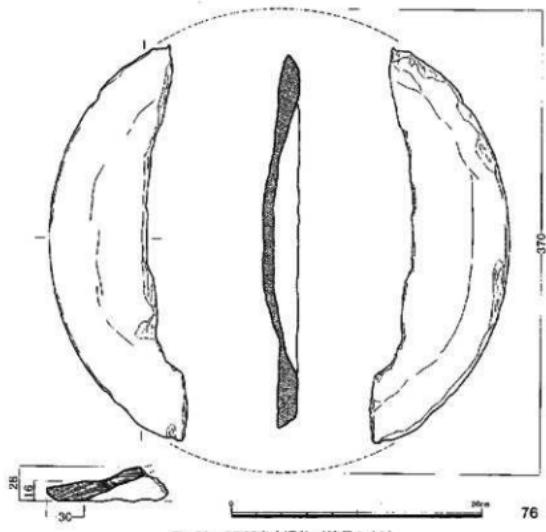


Fig.52 SD02出土遺物（縮尺1/4）

77は椀である。出土時に目を引いた木製品のひとつである。口径17.0cm、推定器高9.0cmを測る。全径の4分の1が残存しており、底部は欠損している。口縁の作りや、調整痕の全く残らない内外表面の仕上げ、器厚の均一さなどから、極めて丁寧な作りが窺える。固化はしていないが、器表面には樹の導管が同心円状に筋となって見事に現れ、一種の文様をなしている様である。口縁端部は水平になるよう非常に丁寧に削られている。口縁端部から下へ7.0cm下がった所で、内面の傾きが若干変わり、器壁が厚くなる。

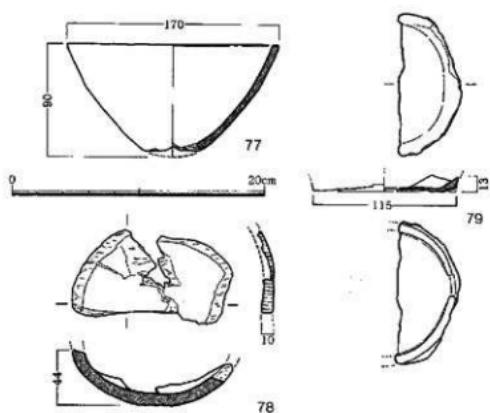


Fig.53 SD02出土遺物（縮尺1/4）

78も瓶り貫きで丁寧に作られた容器である。底部から胴部半ばまでの約2分の1を残存するのみで、外縁は全て欠失しており、本來の口径、高さなどは分からぬ。残部における器厚はほぼ1cm前後で整っている。内外面とも凹凸なく丁寧に仕上げられている。底部には僅かながら平坦部があり、胴部へは稜線なくなだらかに立ち上がる。

79は椀の底部である。残部の底径は11.6cmで、本来はもう少し大きかったとみられる。広葉樹で、器表面の劣化が著しい。この椀は造り出しの高台を持ち、透しが少なくとも1箇所に残存するものとみられる。

容器の中で、椀類と共に注目されるに筒形容器がある。蓋が2点、身が1点出土している。特に蓋は漆塗りで、黒漆に赤漆で文様を描いたものである。

Fig.54-80・81は蓋である。

80は半折しており、さらに端部の一部を欠失する。残存径は7.7cmを測り、復元すれば8cm半位になろうか。断面は外縁から斜めに立ち上り、途中で角度を変えて上面の平坦部へ移行する。いわば笠形の形状をとる蓋である。外面には黒漆が塗られ、外縁部と上面平坦部との境には同心円状に赤漆で文様を描く。内面は白木のままである。

81は80とはほぼ同径同大の笠形の蓋である。径8.6cm、高さ0.9cmを測る。外縁は部分的に欠損しているところがある。内面には径7.3cm、高さ2mmの円形の削り出しが作られ、身と合わせるように工夫されている。極めて精巧な作りになっている。外面には全面に黒漆を塗り、上面平坦部の周縁と平坦面中心部に赤漆で円文を描く。外縁の一部にも赤漆が僅かに残っているので、80と同様外縁にも赤漆で円文が描かれていたと考えられる。内面は段の部分まで黒漆が塗られ、その部分に別材の身の口縁部かとみられる幅2mm程の部材がくっついている。

82は極めて精巧に作られた例物の容器である。口径12.3cm、底径14.0cm、器高11.7cmを測る。器壁は0.5cmで均一に薄く、針葉樹で作られているため細かい木目が通り、見た目が美しい。口縁端部は斜めに面取りし、体部は下半部で緩やかに広がり、段を形成して底部に至る。底部は高台に仕上げ、幅1.0cm前後の透しを4箇所入れるものと想定される。内面のオーバーハングの削り込みは実に見事で、金属器の使用と熟練した工人の存在を想起させるものである。形態的には京都府古殿跡出土例に似ているようであるが大きさが違い、こちらの方がずっと小型である。桶の一種であろうか。

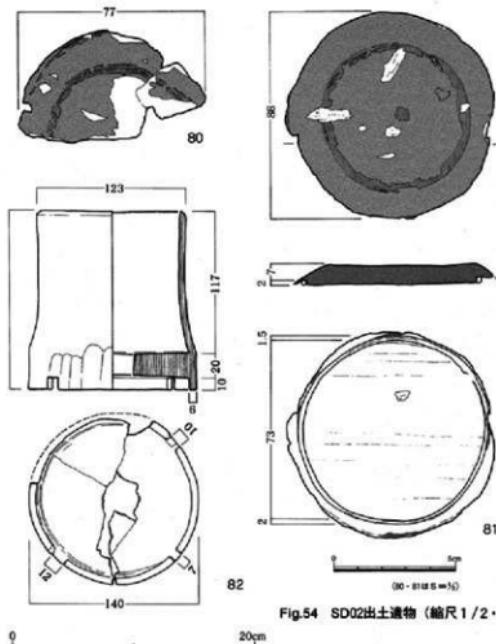


Fig.54 SD02出土遺物(縮尺1/2・1/4)

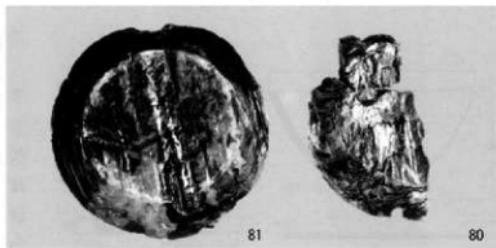


Fig.55 SD02出土遺物

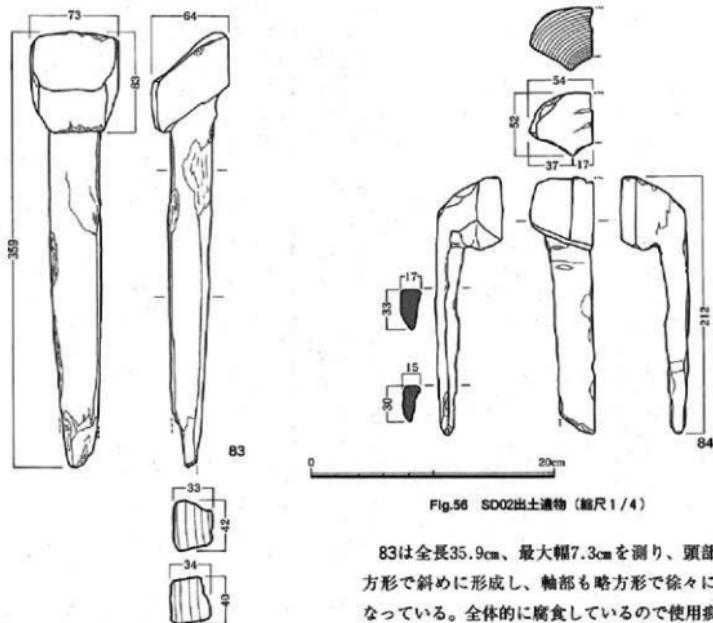
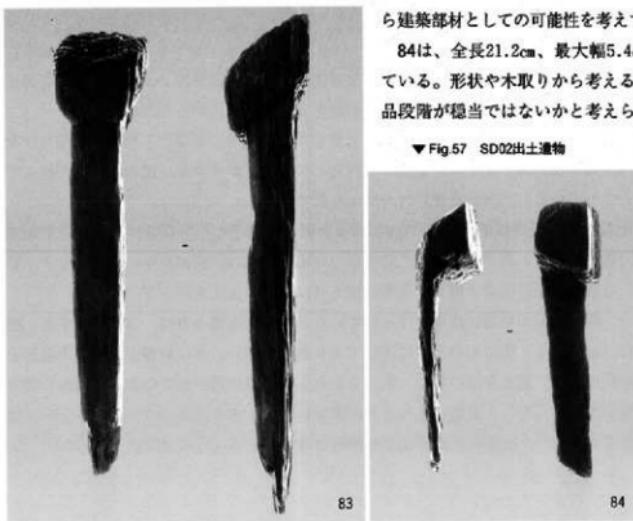


Fig.56 SD02出土遺物（縮尺1/4）

83は全長35.9cm、最大幅7.3cmを測り、頭部は略方形で斜めに形成し、軸部も略方形で徐々に細くなっている。全体的に腐食しているので使用痕や加工痕は観察されない。形態的には農工具に該当するものが見い出せない。重厚に作られているところから建築部材としての可能性を考えておきたい。

84は、全長21.2cm、最大幅5.4cmで、縱に半折している。形状や木取りから考えると、縦拘子の未成品段階が適当ではないかと考えられる。

▼ Fig.57 SD02出土遺物



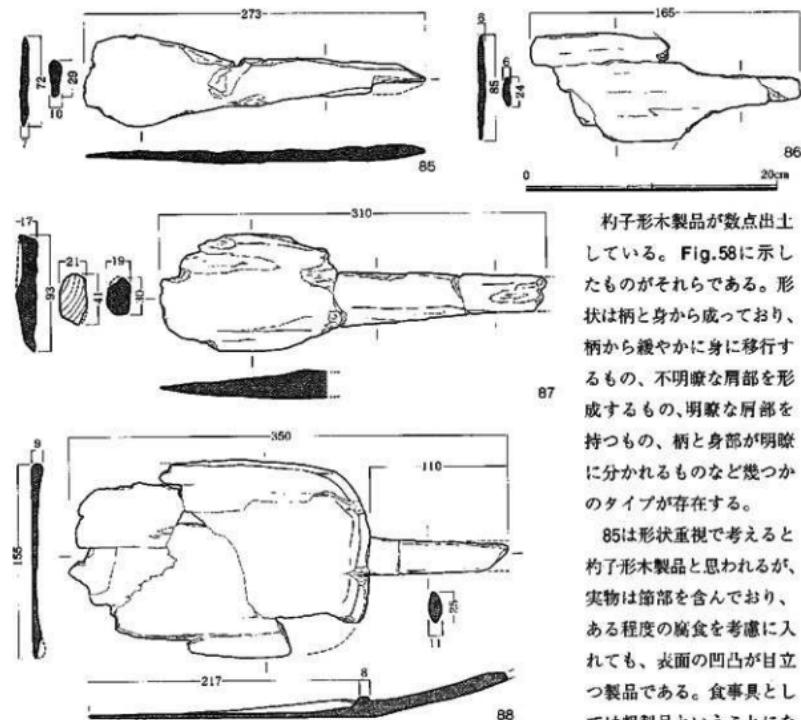


Fig.58 SD02出土遺物（縮尺1/4）

削られているため、中央部を尖らせた形に整形していた可能性がある。全長27.3cm、柄部から身部にかけては徐々に薄くなり、先端部は尖る。平面的には柄部から緩やかに広がり身部に至る。

86は、杓子形木製品の柄部から肩部にかけての形状を残しているように見受けられる。柄部及び身先端部を欠失し、残存長は16.5cmしかない。柄部から内弯して急に広がり身部に至る。腐食が進んでいるため断面は薄くなっている。広葉樹の柾目材が用いられている。

87は、柄の先端を欠失する。残存長31.0cm、身幅9.3cmを測る。杓子としては全体的に肉厚で頑丈な作りである。特に柄部は太さ、厚さとともに農工具並みである。形状は、柄が徐々に太くなりナデ肩の身部に移行する。身部の表面はほぼ平坦で、裏面は縱方向に若干の丸味を持っている。

88は丁寧な作りで、柄と身部が明瞭に作り分けられている。柄の先端部と身の一部を欠失する。残存長35.0cm、身幅15.5cmを測る。柄はやや上方に伸びており扁平で細い。身は柄側を深く、先端部を浅く削り込んで作られている。柄と身部の境に、低いながらも一段縁が残されている。形状から漁具のアカ取りの可能性がある。ただし、側面の立ち上りが非常に低く、水を搔き出すには適さない。別の用途も考慮する必要があろう。土圧のため本来より厚味は減じているように見受けられる。

杓子形木製品が数点出土している。Fig.58に示したものがそれらである。形状は柄と身から成っており、柄から緩やかに身に移行するもの、不明瞭な肩部を形成するもの、明瞭な肩部を持つもの、柄と身部が明瞭に分かれるものなど幾つかのタイプが存在する。

85は形状重視で考えると杓子形木製品と思われるが、実物は節部を含んでおり、ある程度の腐食を考慮に入れても、表面の凹凸が目立つ製品である。食事具としては粗製品ということになろうか。柄先端部は斜めに

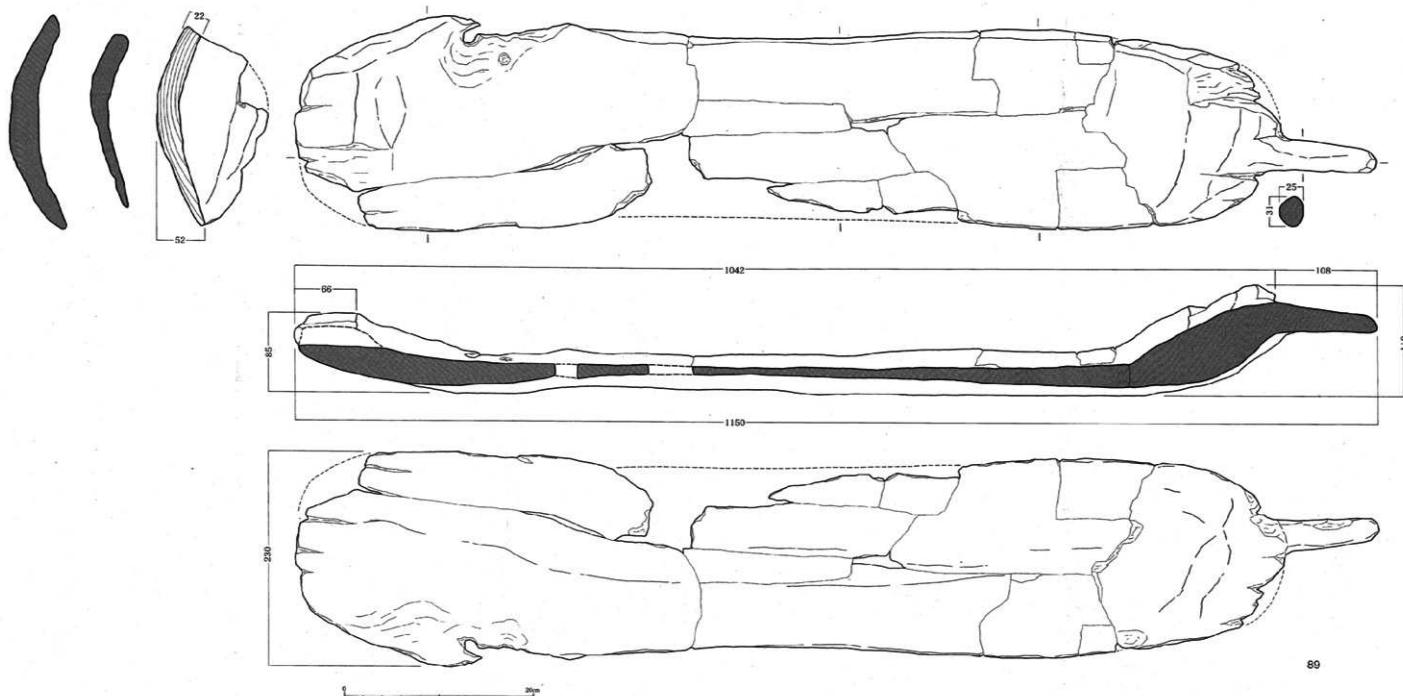


Fig.59 SD02出土遺物（縮尺1/4）



Fig.60 SD02遺物出土状況

89は上層から仰向で出土した。全長115cmの大型の槽である。広葉樹の板目材で節部も残存することから、丸木を割り貫いて作っていることが分かる。短辺中央に一本の把手が付く。器壁は厚く、重厚な印象を受ける。ケズリ痕は腐食のため見えない。容器の深さは把手側の短辺では10cmを越すが、平均4~5cmと深い。側面と底面を分ける明確な後線はなく、丸木のカーブを活かした形状である。土圧などによる変形もあるようだが、それを考慮に入れたとしても整った形態とは言い難い。把手の付き方もバランスが悪い。

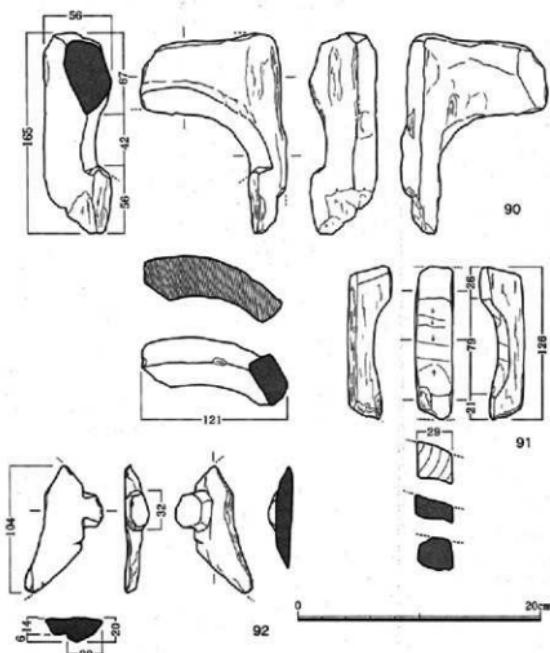


Fig.61 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

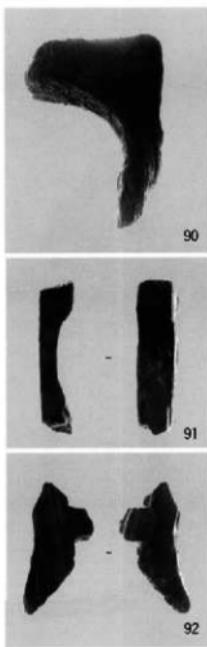


Fig.62 SD02出土遺物

Fig.61に示した木製品は、現時点では器種が明確に同定できない類である。加工はそれぞれに認められるので、何らかの製品であったか、あるいはその一部であったものであろう。

90はやや弯曲した断面を持っているところから、木甲の作りかけが破損したものではないかと考えていたが、そうではなさそうである。残存長16.5cm、幅12.1cmを測る。図の上面及び左側面は破損しており、下端部も突出部以下が破損している。正面の弯曲した削り面は凹凸がなくきれいである。全体的に粗く加工されたままになっているが、弯曲した断面を持っている所などから容器類の破片であろうか。

91は、現状では幅3cmの棒状の一側面中央に削り込みがある。しかし、削り込みがある面の両側面は欠損面で、その削り込みがどのように左右に伸びていくか不明である。容器類の破片であろうか。削り込み部のケズリは両端より中央部へ向い、ケズリの面はシャープで、かつ凹凸が少ない。

92は、長さ10.4cmの破損品であるため原形が分からず、したがって用途も不明な製品である。木取りが板目であるため農工具よりも容器や雑具などの可能性が高い。把手付の盤や皿などであろうか。片面が水平であることから蓋も考えられるか。また、突起のない平滑な面が全面欠損していると考えて、盤の脚から側面立ち上りの部分ではないかとの指摘もある。いずれにせよ類例が増加すれば、用途の推定も可能であろう。したがって、図を示しておくことはあながち無駄ではないと考えられる。

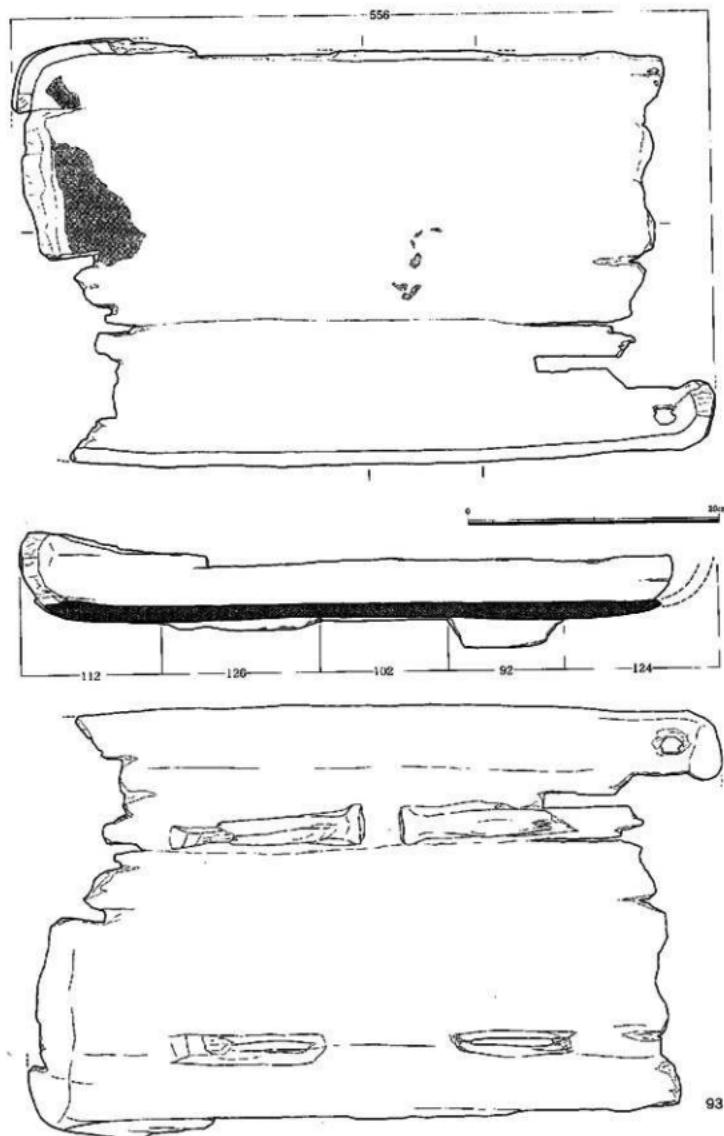


Fig.63 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

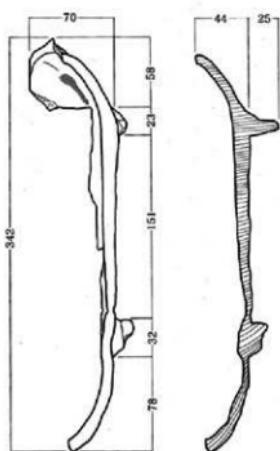


Fig.64 SD02遺物出土状況

93は脚付きの盤または橋である。前報告（『雀居遺跡2』）で刎貫式案としたものである。全長55.6cm、幅34.2cmで200年輪を越えるスギ材を丁寧に刎り貫いた優品である。出土時

には内面に水銀朱が多量に塗られていた。仰向けに出土し、脚は上を向いていた。4箇所の脚部のうち2箇所はシンプルな台形状、2箇所は途中に段を有する形状で、各々生きているように見受けられる。しかしながら脚部の形状が違うということは考えにくいので、おそらく二次的な変形によるものであろう。多量の水銀朱が塗られていたことは、この木製品の重要性を示していると言える。

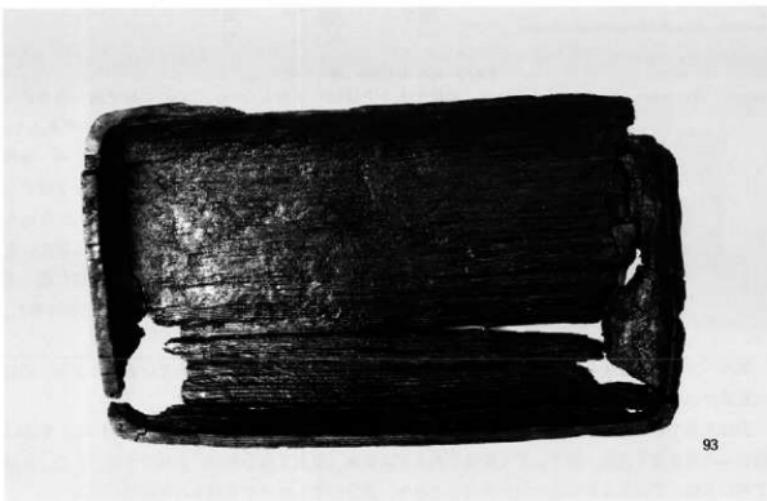


Fig.65 SD02出土遺物

93

生活用具の槽にも見るべきものが出土している。98は全長53.9cm、幅31.9cm、高さ10.0cmを測る形状のよく整った、丁寧な作りの槽である。残念ながら底面が薄かったため、取り上げ時や保管中に細かく割れ、かつ底面にあたる破片は全て劣化が進行してしまい、本来の厚味を残していない。両端には幅5.1～5.5cmの縁を持ち、体部は斜めに削り込まれている。底面は残りのよい破片で断面をみると、緩やかながらも丸くカーブしていたことが分かる。側面は底面から丸味を残して立ち上がり、直線的に伸びる。四隅には菱形か梢円形に近い孔を穿つ。約3.0×1.5cm程度で、孔周囲が腐食しているので正確な

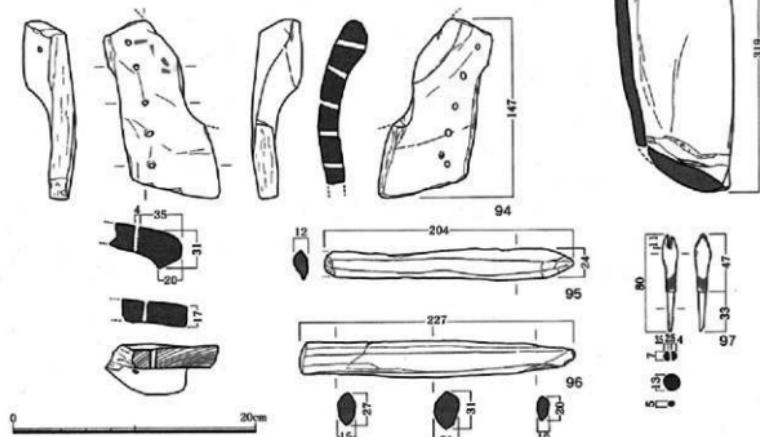


Fig.66 SD02出土遺物（縮尺1/4）

形状や大きさははっきりしない。この孔に紐を通し両方から持つて水を汲み上げたり、運搬などに使用したものであろう。

94は高環の脚部である。第5次調査出土の高環と同一個体ではないかとみられる。側面には透孔の一部が残り丁寧に加工されている。もう一方の側縁には破損部を補修したとみられる補修孔が等間隔に5個並ぶ。孔縁は内外面とも腐食はあるが摩耗ではなく、紐ズレの痕跡は見られない。内面に細い沈線があり、刃物による割付線か。外面上には赤色顔料が付着し、ケズリによる稜線が残る。

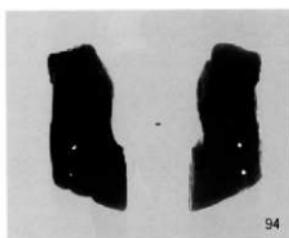


Fig.67 SD02出土遺物

95は一方の端部を尖らせて、かつその縦断面も両面から薄く削られ成形されていることから、剣形木製品ではないかとみられる製品である。残存長20.4cm、一端は折損している。

97は木鉛である。全長8.0cm、身部4.7cm、茎部3.3cmを測り、茎は1段細く作られている。先端は根拠みの溝を切り込み、溝下にごく微量であるが水銀朱（螢光X線分析済）が残存する。また、身部下端にも微小ではあるが赤色の点が散在しており、鉄分の値も高いが水銀朱の可能性も残る。

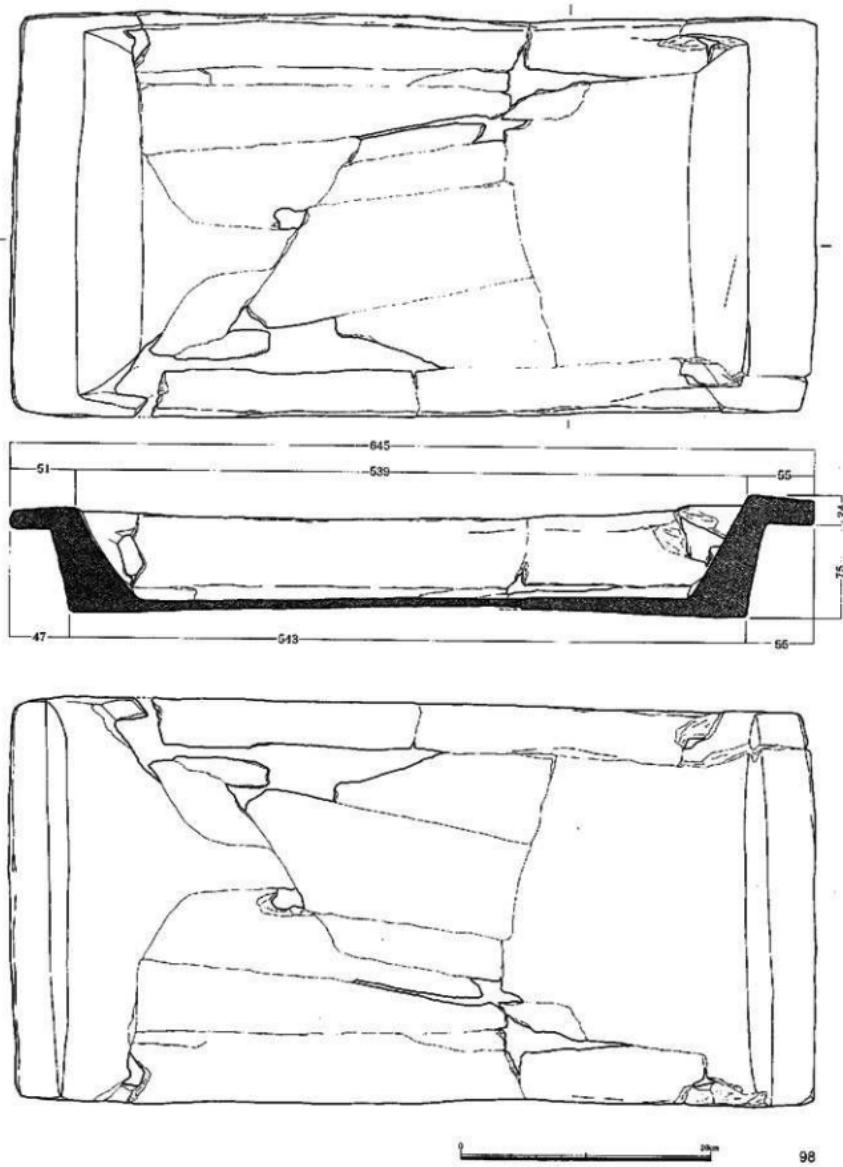


Fig.68 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

北部九州では、弥生後期後半から終末にかけて「指物」で作られたと考えられる組合せの机が出現する。また、机以外にも組合せ木器の部材と見られるものが出土している。これらは弥生時代の伝統的な木器には見られず、新たな木工技術が伝来したことを想起させるものである。雀居遺跡の第4次・5次調査では40点近くの机の部材が出土しており、1遺跡から出土した数としては我が国で最も多くなっている。既に『雀居遺跡2』で一式まとまって出土した机については報告しているので、ここでは残りの机部材について報告しておきたい。なお、これまで案として報告したこともあるが、古くは案も「ツクエ」と訓じているので、机に統一しておきたい。

99は机の大板である。全長59.3cm、幅29.7cm、厚さ1.1cmを測る。両端に脚を差し込む納穴を4箇所開けるが外側が破損している。納穴の長さは6.5cm前後である。表面には刃物キズが多数みられ、列状に集中している所がある。両端部にはヤリガンナで加工したケズリ痕が観察される。裏面では半

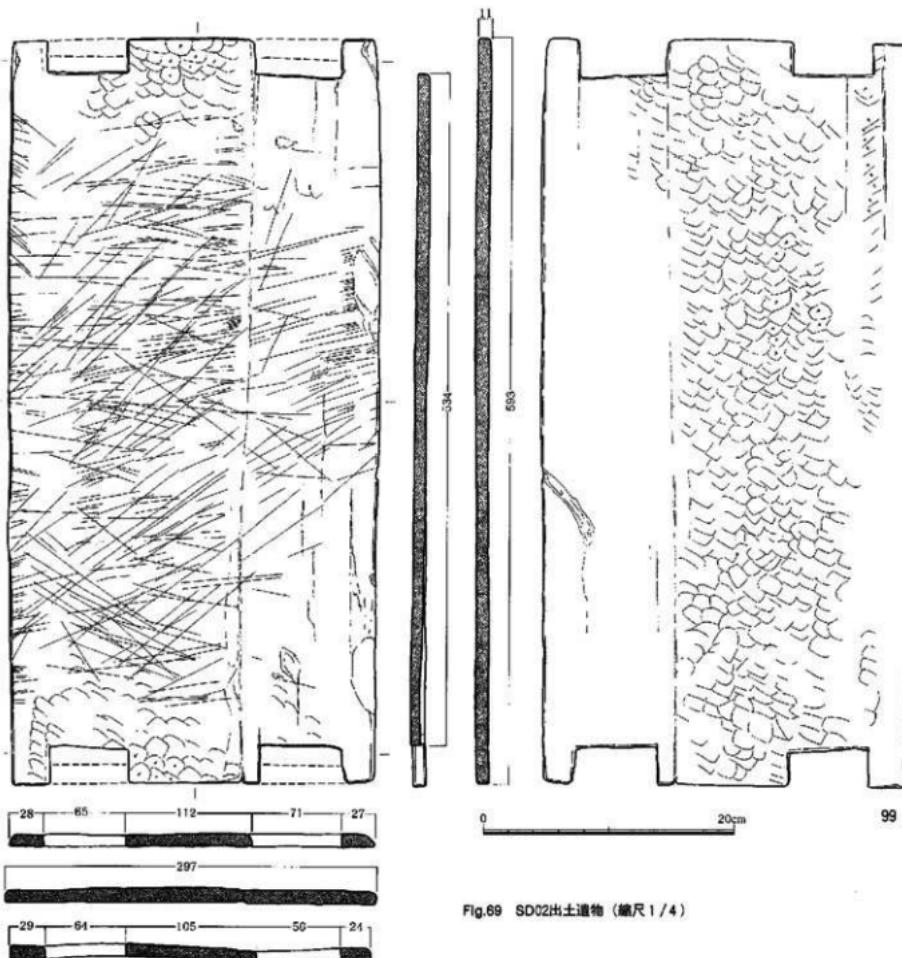


Fig.69 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

折した大きい部材にヤリガンナで削ったケズリ痕がやや明瞭に観察される。ケズリの方向は図の左下から右上方である。右上部分は方向をかえて右から左上に削られている。スギの柾目材を用い、一本作りで200年輪以上あったので年輪年代法で時期の判定を行ったが、偽年輪が多く正確な年代は出なかった。この机は枘穴の大きさから、20~23cm位の高さをもつ脚がセットで組み合わさると考えられる。これらの脚の枘が概ね6.5cm前後に集中するからである。

Fig.71~73は脚の部材である。高さは20cm前後から24cmまで存在する。今回の報告にはないがさらには1cm前後くなるものがある。形状は天板や挟板に挿入する枘部分と半円形の削り込みを入れた体部から成る。枘には鼻栓を差し込むための孔が開けられ、半円形もしくは逆台形、長方形、円形などのタイプが存在する。体部は半円形の削り込みを入れた方が外側に向く。この削り込みも6cm前後から10cm近くになるものまである。枘と体部との境には、肩部を形成し、肩部が両側に明瞭に残るもの、

削り込み側の肩部は明瞭に残り背縁側の段は小さくなるもの、削り込み側のみに段を有するもの、両側ともナデ肩で不明瞭な肩部を持つものなどに分けることができる。さらに、背縁の加工も円弧を描くもの、三角形状に整形するもの、ほとんど直線的になるものなどがある。これらは「指物」で作られているため、細い割付線が観察されるものがある。

これらの部材は、天板や次に報告する挟板と共にスギの柾目材が多く用いられた丁寧に作られている。中には板目材を用いるものもある。

100は、寸のつまつた形状で体部に比較的大きな半円形の削り込みを入れる。雀居遺跡では唯一長方形の鼻栓孔を持つものである。鼻栓孔は 0.9×2.5 cmである。背縁側は段を持たずに体部へ移行する。

101は削り込み側の肩部を欠失する。削り込み部は他と比較してやや小さめである。鼻栓孔はケズリで開けられ、刃物を止めたとみられる削り込みが観察される。全体的に丁寧な作りである。背縁部には不明瞭な段をもっている。

102は鼻栓孔の上縁を欠失する。枘と体部の境と孔の上辺部に割付線を残す。枘には天板や挟板で付いたとみられる横方向の当り痕が観察される。残存状態は良好で、明瞭な肩部を形成する。背縁は



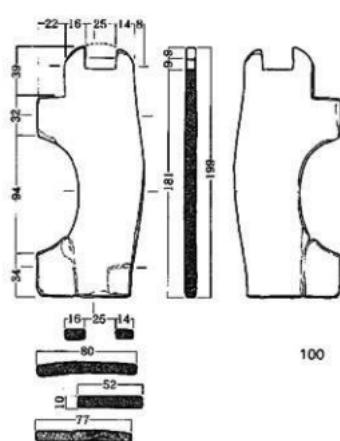
Fig.70 SD02出土遺物

三角形状に直線的に加工されている。最も形の整った脚部のひとつである。

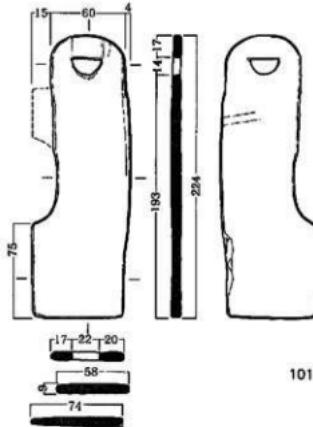
103は全長19.8cmで、やや高さが低い割には柄の幅が6.3cmもある脚部である。鼻栓孔の上辺に割付線が認められる。この割付線は鼻栓孔の上込と頭部位位置を決めるために入れられたものであろう。両側に段を有し、背縁は僅かに膨らむがほぼ直線的に仕上げられている。

104は脚高24.0cmで、報告例では最も背が高い脚部である。鼻栓孔上込と肩部の一部を欠失する。外形は比較的残っているが、全体に腐蝕して加工痕が見えない。脚端部はやや細くなる。

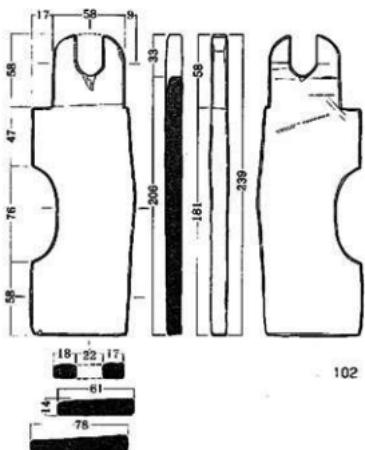
105はやや残りが悪く、亀裂が多数あり、加工痕は全く分からぬ。倒り込み側の肩部を欠失する。



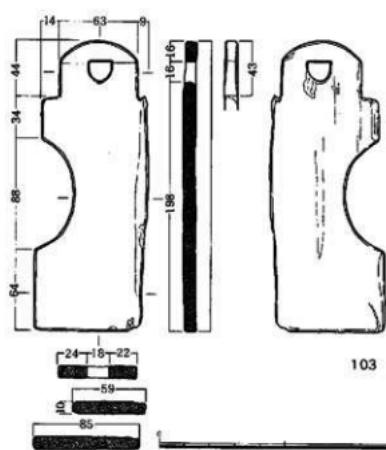
100



101



102



103

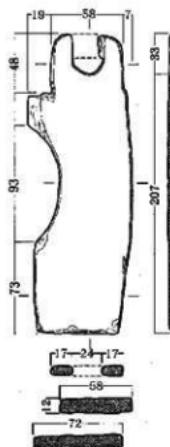
Fig.71 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

下端部はやせて薄くなっているが、全体的に乾燥して縮んでいるように見受けられる。

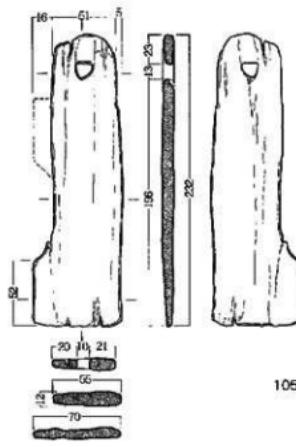
106はかなり腐食し、収縮、変形が著しい脚部である。鼻栓孔の上辺と外縁部を欠失している。全体に細くなっているが、削り込みの形状が半円形ではなくやや細長くなっている。

107は半折しており、肩部や頭部を欠失している。腐食、破損が著しく、加工痕はまったく見えない。全体的に厚味は残っており、本来の作りは良好であったとみられる。

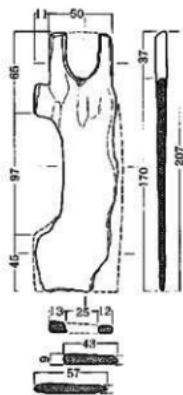
108は、かなり腐食しており変形も見られる。頭部も変形していて鼻栓孔は円形に見えるが、本来は半円形であったと推測される。断面も薄くなっている、本来の形状とは異なるものであろう。



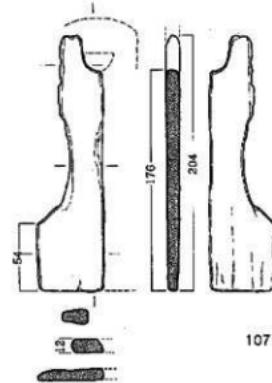
104



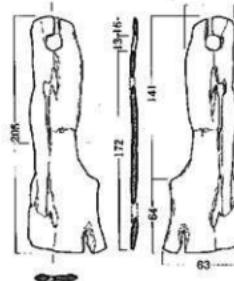
105



106



107



108



Fig.72 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

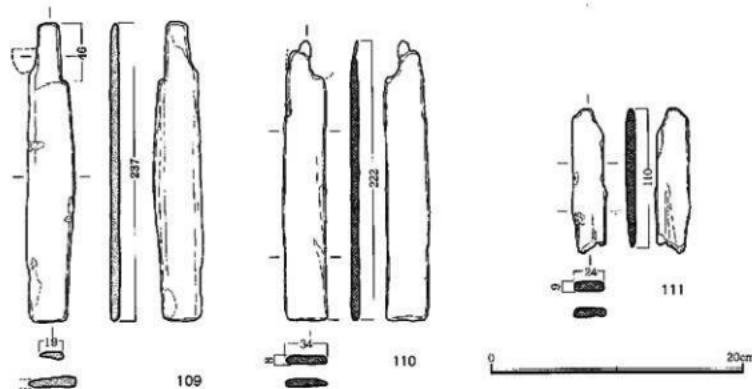


Fig.73 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

Fig.73も脚の破片と考えられる部材である。

109は鼻栓孔と背面側の段を残している脚の一部である。頭部端と下端部は残っているので全長23.7cmは本米の高さであろう。110は僅かに鼻栓孔の一部が確認できるのみで、腐食が著しく、本来残っている部分とそうでない部分の判別が出来ない。111も同様な状態である。ともに針葉樹の柾目材が使用されている。

Fig.74・75は天板を上下から押さえる挟板である。長さは23cm位から45cm位まで、数種類の挟板が出土している。枘穴の位置や大きさは長さによって異なるが、一定の規格が認められる。この挟板の長さが天板の短辺を示すことになる。材にはスギの柾目材が多用されている。

112は、全長44.1cmで、今回報告するものの中では大きい部類に属するものである。木目にそって

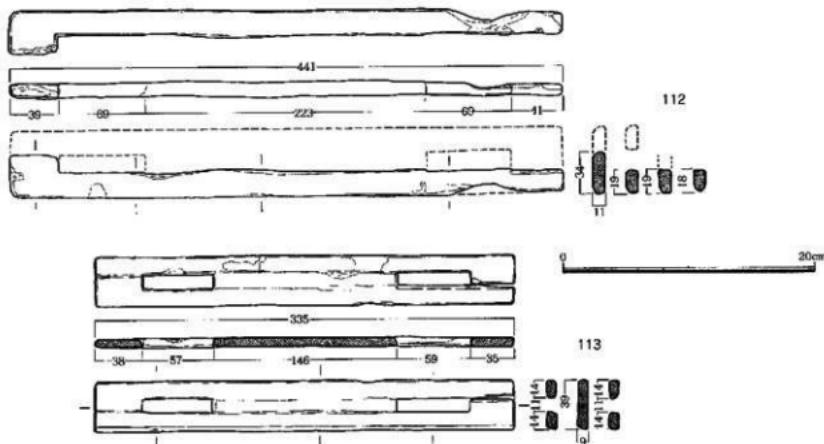


Fig.74 SD02出土遺物 (縮尺1/4)

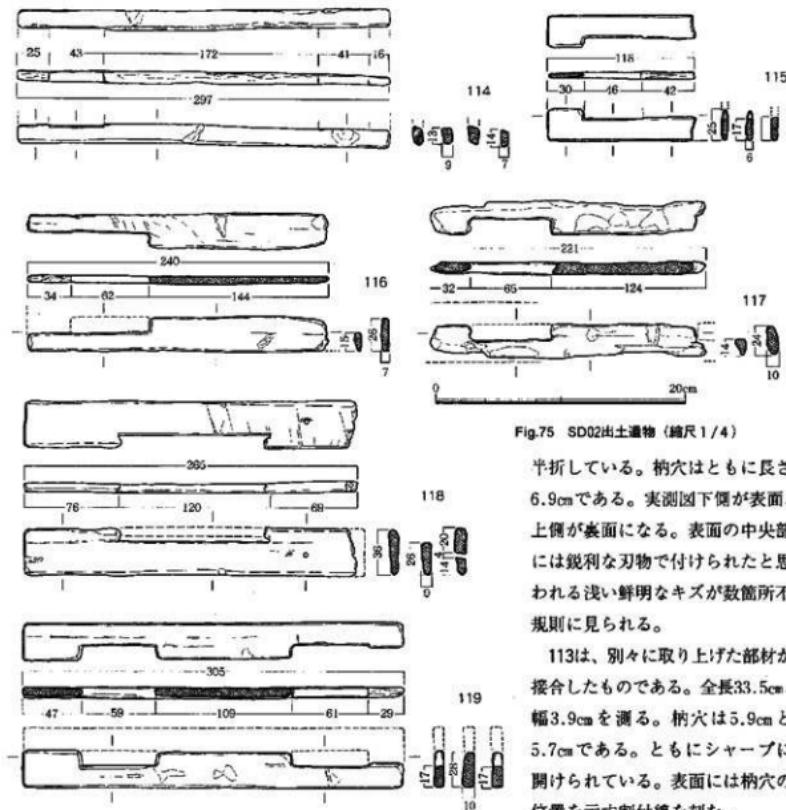


Fig.75 SD02出土遺物（縮尺1/4）

半折している。柄穴はともに長さ6.9cmである。実測図下側が表面、上側が裏面になる。表面の中央部には鋭利な刃物で付けられたと思われる浅い鮮明なキズが数箇所不規則に見られる。

113は、別々に取り上げた部材が接合したものである。全長33.5cm、幅3.9cmを測る。柄穴は5.9cmと5.7cmである。ともにシャープに開けられている。表面には柄穴の位置を示す割付線を刻む。

114は、全長29.7cmを測り、木目にそって半折している。破損部には柄穴に該当すると思われる僅かな抉りが残存している。それによれば柄穴の長さは4.1cmと4.3cmである。出土例では最も短い柄穴である。これに対応する柄を持つ脚は出土していない。最小でも5cmである。さらに小さい柄を持つ脚があるかどうか注意しておきたい。木目の美しいスギの柾目材を用いている。115は挟板端部の破片である。柄穴の長さは4.6cmである。116は縦に半折し、さらに半分に折れて4分の1が残存している。柄穴の部分は破損部の僅かな突出で判断できる。長さは6.2cmである。117は腐食が著しく、角が取れて丸くなっている。全体にかなりやせており、4分の1が残存している。柄穴は6.5cmであり、本来よりもやや大きくなっているとみられる。118は形状から挟板とは別物であろう。一端を欠失しており、全長は分からず。図の下側が表面と考えられ、面取り加工を施す。表面から径4mm程の小孔を裏面側に穿つ。中央部両面には幅5mm程の圧痕が同じ位置に観察される。裏面には刃物キズがみられる。机とは違う別の組合せ木器であろう。119は全長30.5cmの挟板である。柄穴は6.1cmと5.9cmである。脚の柄及び挟板の柄穴は6cmを中心とするものが多い。

Fig.76・77は用途を明確にし得ない木製品である。

120は残存長55.1cmを測り、もう少し長くなる可能性がある。角棒状に加工されているがケズリ等の痕跡は残っていない。下部にいくに従って細くなっている。先端部は欠損によるものか本来の形状に基づくものか、面が腐食しているので判断がつかない。121は幅1cmの棒状を呈し弓状に緩く弯曲したもので、欠損端部近くに押圧による凹みがある。針葉樹の柾目材が用いられている。122・123は芯持ち材の同一樹種とみられる棒状の木製品である。出土した時は一本であったが、その後折損し、乾燥して細くなつたようである。129と一緒に出土し、129の孔にこの棒状木製品が差し込まれたままで出土した。129は広葉樹の板目材で、残存長20.8cm、梢円形に広がった頭部と 2.2×1.6 cmの孔を持つ。孔は一部潰れているものはほぼ垂直に穿たれている。孔の下部はやや細くなり、再度径を増す。下端部が欠損しているので全形は分からぬが、丁寧な加工が施されている。124は円形状ではあるが、一辺を平坦にした棒材で、片端には斜めの削りを施す。125・126はともに広葉樹の芯抜き材であるが

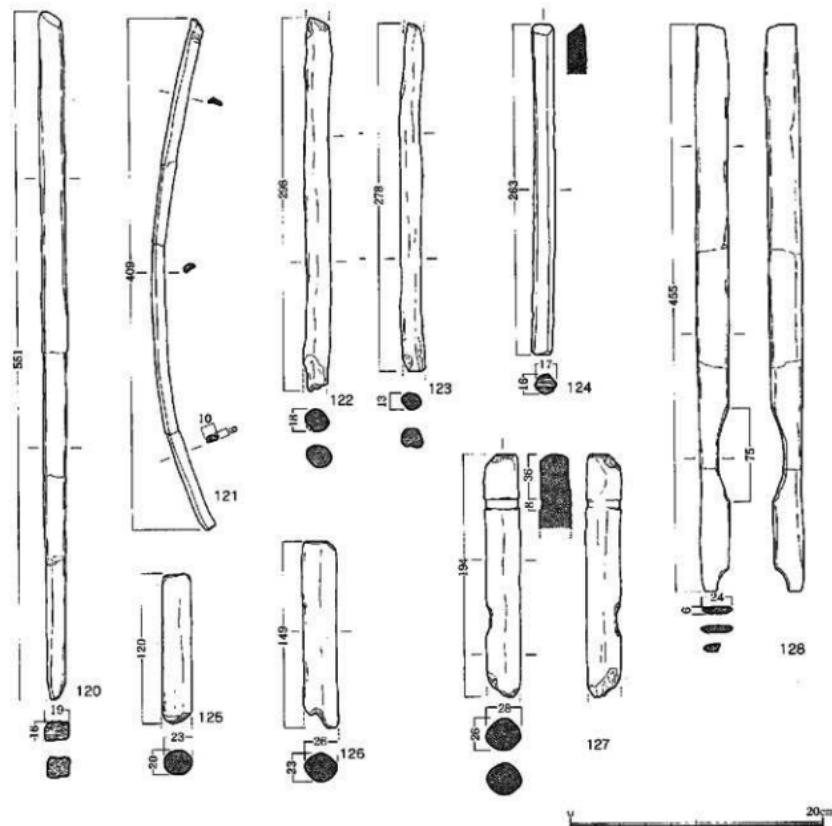


Fig.76 SD02出土遺物（縮尺1/4）

樹種は異なる。2cm前後の径を持ち、断面はほぼ正円になるように丁寧に作られている。農具の柄などであろうか。2点とも上端部の面は平滑で、ケズリで作られた様に見える。127は深さ1mm弱の溝状の切り込みが巡る。鋭利な刃物で切れ目を入れ、幅は8mmである。一周は巡らず4分の3周巡る。溝を持つ方の端部は平坦に作られ、もう一方の端部は欠損している。128は扁平な棒状の製品で一部に浅い抉りを持つ。抉りは緩やかに弧を描く。下端の形状は本来の抉りなのか欠損部なのか判然としない。130は欠損部があるが完形品で、残りがよく加工痕もよく見える。手斧のようなもので端部に向けて徐々に細く削っている。形状から櫻と考えられるが、使用された跡となるような押圧痕、擦痕等は見られない。131は厚さ5~6mmの柾目材で、雑具の部材であろうか。上端部は真っ直ぐに整形され、横断面の側端部は尖っている。片面にのみ無数の刃物痕が観察される。132は建築部材の一種であろうか。一辺約3.5cmの角材に一回り大きな頭部が付く。ケズリにより明瞭な段がつけられている。133は一部のみの残存のため用途は不明であるが、印象的には農具類の柄の端部のように思える。

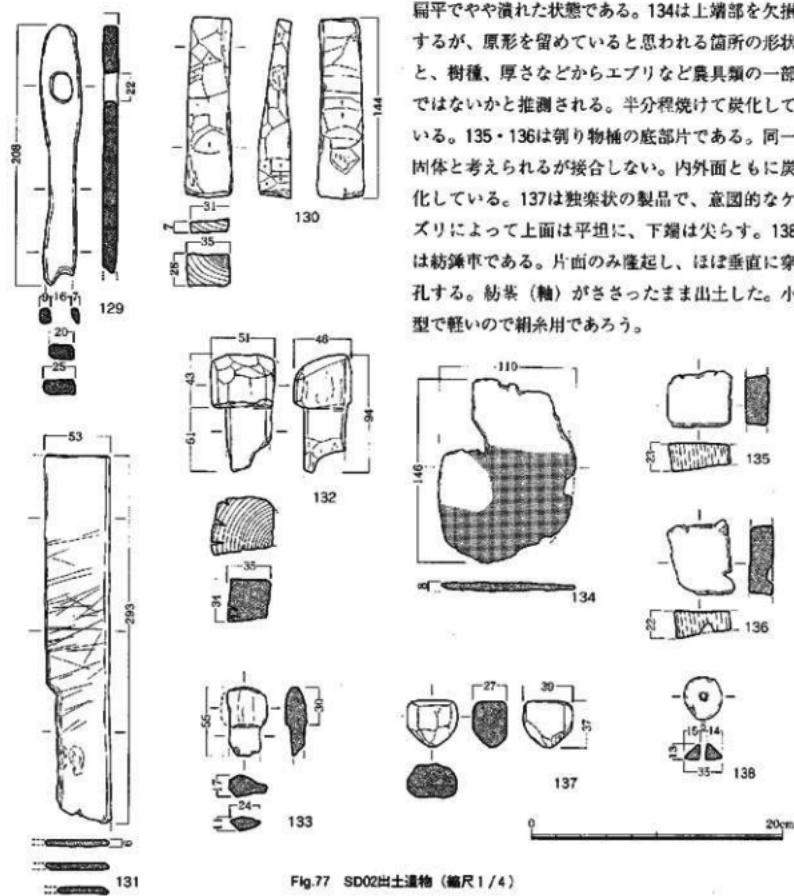
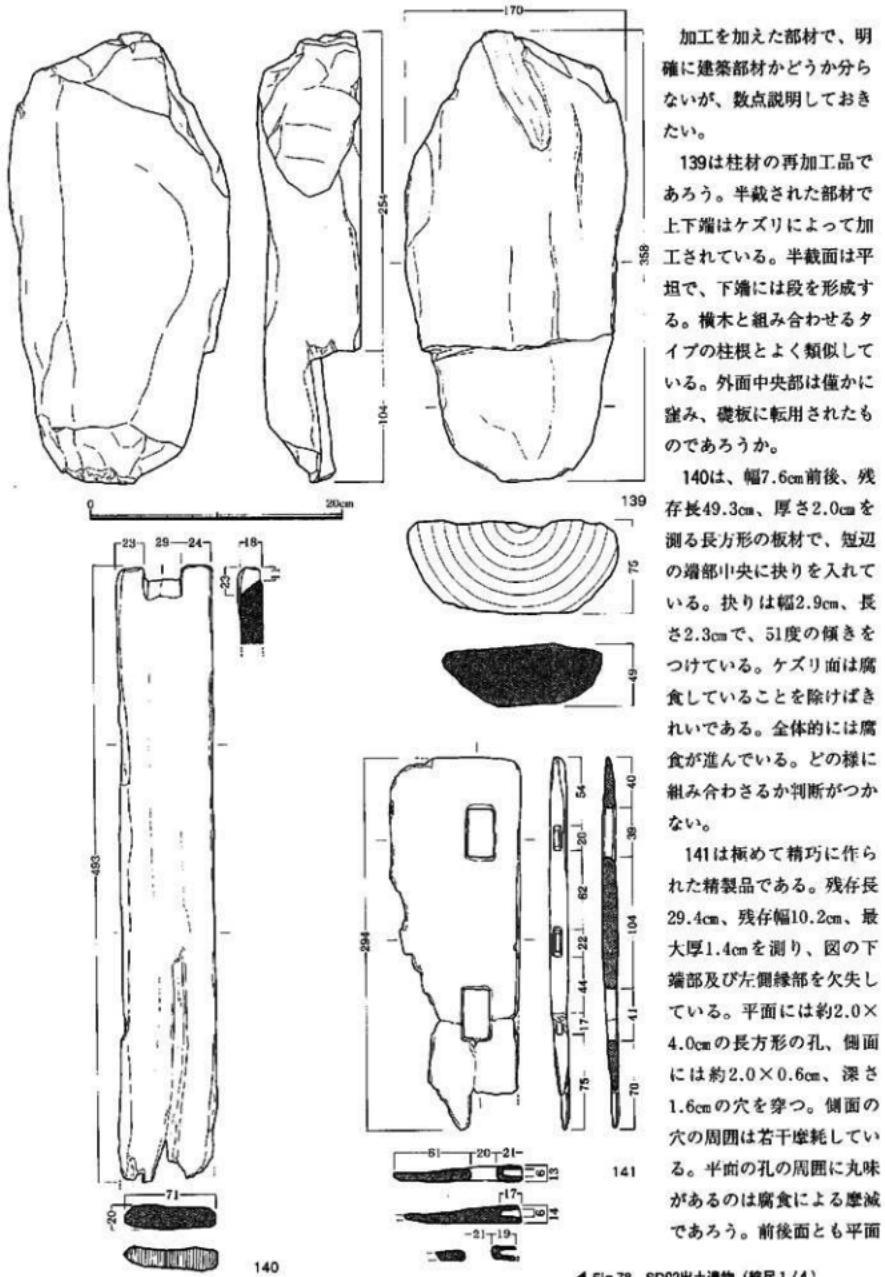


Fig.77 SD02出土遺物 (縮尺1/4)



◀ Fig.78 SD02出土遺物（縮尺1/4）

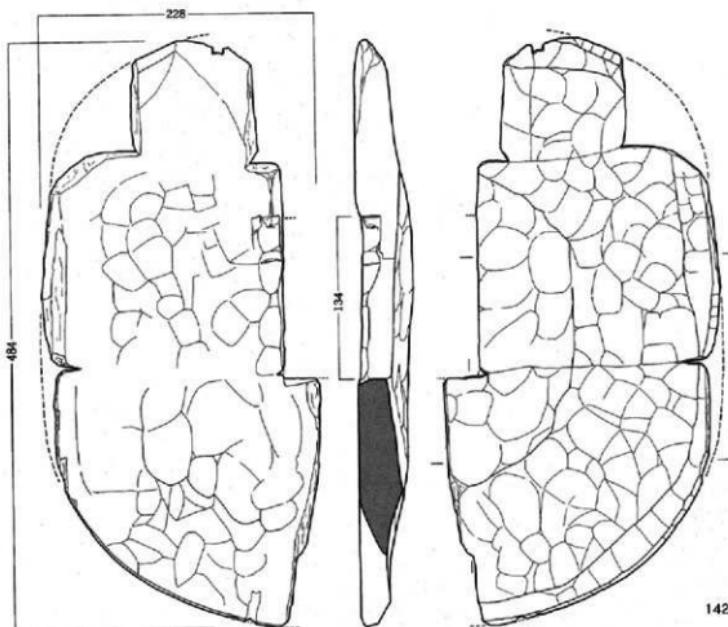


Fig.79 SD02出土遺物（縮尺1/4）

部は平滑である。この木製品の用途は不明であるが、柄穴があるところから別の部材を組み合わせて構成するものであろう。材にはカシの柾目材が使用されている。

142は鼠返しである。最上層から出土したもので、時期幅を古墳時代初頭まで広げて考えておかなければならぬ。残存長48.4cm、方形孔の一辺約9.0cm、厚さ2.3~4.5cmを測る。半折しているが遺存状態は良好で、ケズリ痕がよく残る。上面の方が下面よりも丁寧なケズリを施している。上下面とも中央部がやや瘤むが、下面は上面ほど明瞭な境目は見られない。方形孔の内面には一部分に加工痕がみられる。側縁は強い丸味を持っているが方形基調である。第4次調査では掘立柱建物が、大型建物も含めて26棟分出土しているが、鼠返しの出土は少ない。倉庫建築が少なかったためであろうか。

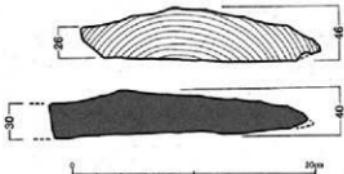


Fig.80 SD02出土遺物出土状況

不定形土壌群

SX04 (Fig.81~83)

I区南側に広がる不定形土壌で、SX08と明確な境界はない。ここでは一定のまとまりとして捉えておきたい。中央部には湧水点があり、多量の水が湧き出す。長さ6m以上、幅5m、深さ1.12mである。夜白式土器から後期後半までの遺物が出土している。上層には後期の遺物が多く、下層は前期が主体となる。南側の狭くなった所には杭を打って横木を渡し堰状の施設を設けている。

143は一本作りの長柄箒である。柄はT字状に整形され、中央部に三角形の透しを設ける。柄の長さは60cmで、断面はほぼ正円を呈する。身は破損しており、ややナデ肩である。身は僅かに弯曲する。



Fig.81 SX04遺物出土状況



Fig.82 SX04遺物出土状況

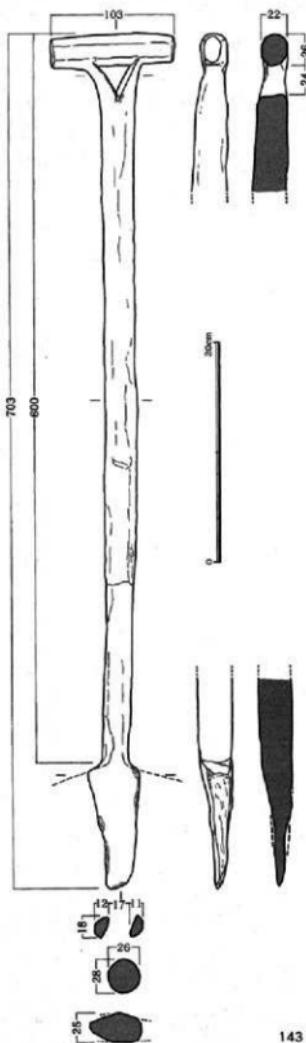


Fig.83 SX04出土遺物 (縮尺1/4)

SX08 (Fig.84~90)

SX04に接して南側に位置する。ほぼ一体化していると考えても差つかえあるまい。長さ9m以上、幅5.5m、深さ1.02mを測り、南側の調査区外へ延びている。三叉鉗・横樋・杓子・台付容器・弓・把頭飾り盤部などの木製品が出土している。弥生前期を主体に後期までの遺物が出土している。木製品の出土状況は多数の流木などに混じて散乱したような状態であった。



Fig.84 SX04遺物出土状況

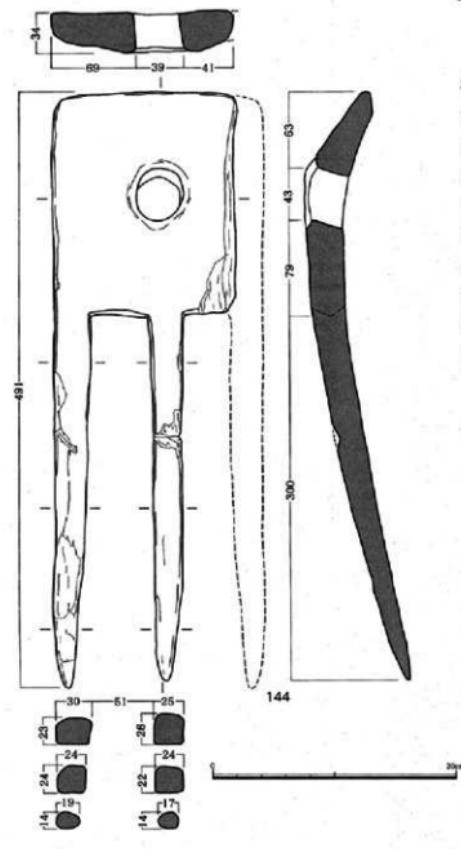
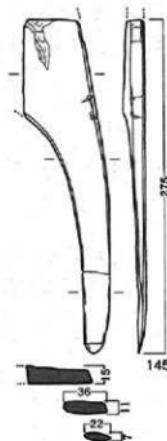


Fig.85 SX08出土遺物 (縮尺1/4)

144は三叉鉗である。底に密着したような状況で出土した。体部の一部と刃を一本欠失するが、残存状態はきわめて良好である。全長49.1cmで、刃部の残りもよく端部の刃こぼれなどもない。体部は方形を呈し、やや内弯する。柄孔は円形で、もともと柄孔部を隆起させて作られている。刃部は長さ30cmを測り、やや内弯しながら長く伸びる。刃部断面は略方形を呈し、外面にはやや丸味を持ち、内面は平坦面を持つ。又部の切り込みは方形に整えられ、両側から山形に削り込んで中央部を



尖らせている。柄孔周囲はほとんど摩耗が見られず、あまり使い込まれた様子が窺えない。時期的には弥生前期から中期の初めに属するものであろう。

145は、形状から三叉歛の刃部と考えられるものである。残存長は27.5cmで、頭部が折れている。折損面は木目と直交方向にもかかわらずフラットである。外側縁は頭部から緩やかに広がり、肩部が不明瞭である。最大厚は1.5cmで身の中央部が厚くなる。刃部はやや内湾しながら下方へ伸びる。

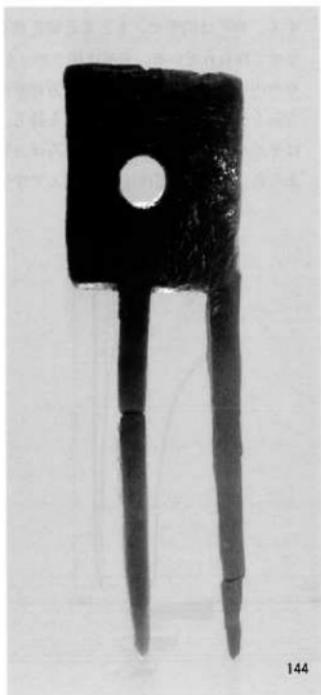
146～148は横柾である。146は下層出土で、全長37.1cm、握り部長17.1cm、柾部長20.0cmを測る。握り部はほぼ同じ径を持ち、柾部はケズリで整える。柾部との境は徐々に径を増し、稜を形成して柾部に至る。柾部は先端に向かって僅かに太くなっている。柾部には部分的な欠損が見られる。

147も下層出土で、握り部の先端を欠失する。握り部から柾部にかけては緩やかに径を増し、境を形成せず柾部に至る。柾部には両面ともに凹みがあり、片側が深い。凹みの中には数条の刃物痕が残る。使用によって付いたものであろう。柾部の先端は比較的平坦である。断面形は握り部、柾部ともに橢円形を呈する。

148は上層から出土したものである。完形品で全長37.4cmを測る。握り部端から徐々に径を増し柾部に至るが、どこから柾部に移行するのかは全く分からぬ。現代のスリコギの様な形状を呈している。両端部はケズリによって整えられている。体部にも僅かではあるがケズリ痕が残っている。断面

はほぼ正円形に近い。全体的にケズリ痕が残っていることからも、あまり使い込まれたものではないことが推測される。

SX08からは握り部と柾部との境に明瞭な段を持つ横柾は出土していない。146・147が時期的に古いものであるかどうか判断し難い。



144



145

Fig. 86 SX08出土遺物

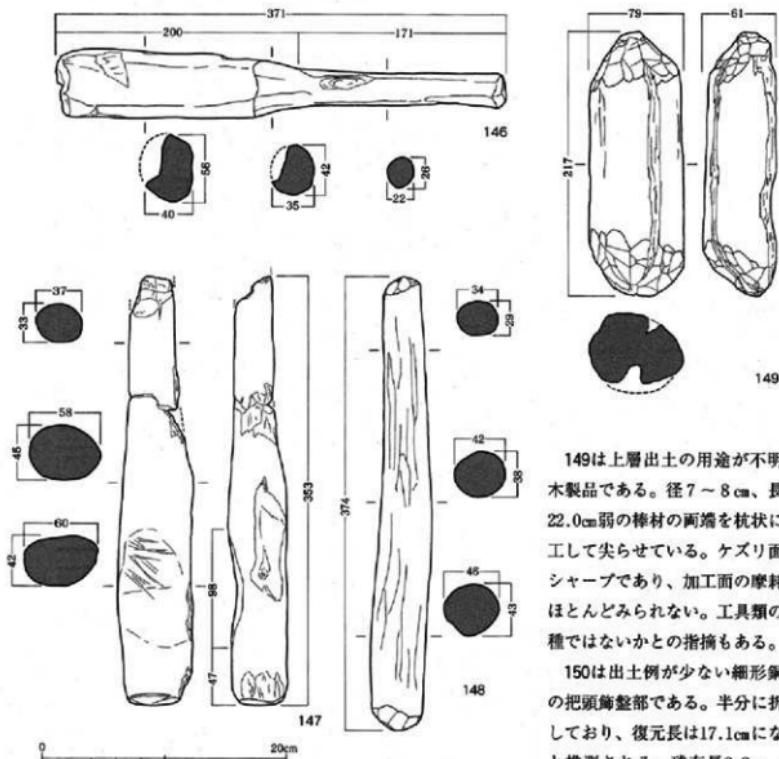


Fig.87 SX08出土遺物（縮尺1/4）

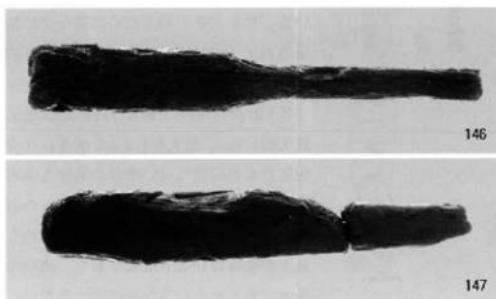
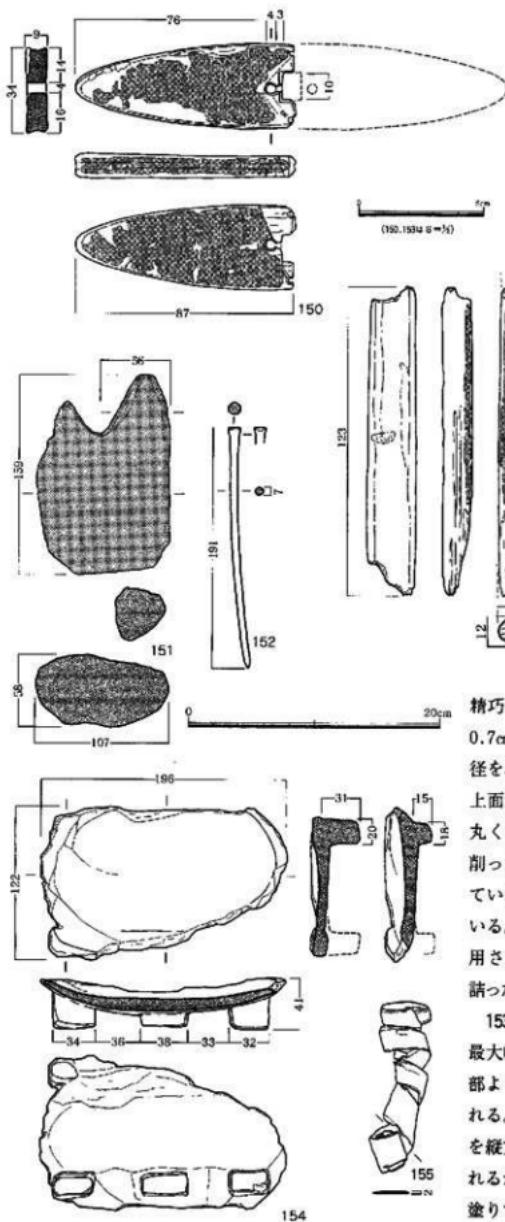


Fig.88 SX08出土遺物

149は上層出土の用途が不明な木製品である。径7~8cm、長さ22.0cm弱の棒材の両端を杭状に加工して尖らせてある。ケズリ面はシャープであり、加工面の摩耗はほとんどみられない。工具類の一種ではないかとの指摘もある。

150は出土例が少ない細形銅劍の把頭飾整部である。半分に折損しており、復元長は17.1cmになると推測される。残存長8.8cm、最大幅3.35cmを測る。厚さは先端部がやや厚く0.95cm、中央部は0.8cmで、周縁部が1mm程度く作られている。また、側縁は半円状に全周窪ませている。中央部には幅1.1cmの方形孔が開けられ、長軸側に径4.0mmの孔が1個、短軸側両側に径2.5mmの孔が2個開けられている。これらの孔は銅劍の柄に装着し、把頭飾を緊締するためのものであろう。極めて精巧に作られている。全面は赤漆を厚く塗るが、剥落している部分が多く見られる。



赤漆を塗る前に黒漆の下塗りが観察される。木取は分からぬが、材質はサカキと分析されている。実際の銅劍に盤部が付けられていたことが明らかとなった貴重な例である。近くの例では、西区橋渡塙丘墓出土77号壺棺墓の副葬品として細形銅劍と一緒に出土した十字形把頭飾の下部に腐食した一部分が残っていたものがある。

151は、残存長15.9cmを測り、上端部を切り込んで窪ませている。断面形は5.8×10.7cmの楕円形を呈する。全体的な形状から建築部材ではなかろうか。全面的に炭化している。

152は用途不明の製品である。頭部と先端部を持ち精巧に作られている。全長19.1cm、径は0.7cmで、正円形である。頭部は徐々に径を増しやや太くなっている。現状では上面が平坦になっているが、本来は少し丸くなっていた。樹種同定のため少し削ったためである。先端部は先を尖らしている。全体にツルツルに仕上げられている。髪などをとめるための簪などに使用されたものであろうか。非常に目的詰ったヒノキが素材として用いられている。

153は弓の一部分である。残存長12.2cm、最大幅1.9cm、最大厚1.2cmを測る。中央部よりも先端側に近い部分の破片とみられる。扁平な作りで、片面に幅4mmの溝を縦方向に切る。漆は片面のみに認められるが全体はかなり痛んでおり、両面漆塗りであったかどうか判別ができない。

Fig.89 SX08出土遺物（縮尺1/2・1/4）

溝を切った方が手前側と考えられるので、本来は全面に塗ってあったと考えられる。樹種同定の結果、ヤマグワの柾目材が用いられていると判明している。赤塗の色はややすくすんで茶褐色を呈している。

154は、脚付の容器であろう。破損部から想定するところ6脚になるとみられる。周縁は殆ど破損しているが、口縁部の一部が残存している可能性がある。口縁端部は幅0.7cmの水平で平坦な面を持つとみられる。体部は口縁下から緩やかに弯曲しながら窪み、浅い皿状の容器が想定できる。残存長19.6cm、残存幅12.2cm、現状での高さ4.1cmを測る。

155は桜の皮である。全長約61.0cm、幅1.4~3.1cm、厚さ0.2cmである。輻み籠などを縫じたりするための用材として準備されていたものであろう。

156は杓子形木製品である。柄の端部と身の下半を失する。かなり重厚な作りの杓子である。柄から身に移行する部分にかけて片面が面取りされる。身部は若干窪むと思われる。身部が小片に割れており、またその接合もあまいため、本来の形状を忠実に復元することは不可能である。全体的な作りが重厚なところから櫛状木製品の可能性も残されている。

SX11 (Fig.91~94)

SX04の東側に位置する独立した不定形土壌である。東側はSX13と切り合いになる。長さ5m以上、幅2.8m、深さ0.34mを測り、南側の調査区外へ延びている。他の不定形土壌に比べて浅く、木製品は南側に流木などと共にまとまって出土している。遺物は、又鍬・平鍬・杓文字形木製品などと一緒に弥生前期から後期までの土器が出土している。木製品は後期に属するものが多いようである。

157は、形状から二又鍬であろう。残存長43.3cmを測り、刃部は下方へまだ伸びる。縱方向に半折しており、さらに刃部の先端部を失する。頭部は側縁の一部を破損するが、全体の形状は推測できる。頭部は、上端部を半円形に整え、側縁は両面から削り込んで山形に仕上げる。厚さは2.0cmで、頭部が最も厚く、身の先端部に向うに従って薄くなっている。柄孔は長方形を呈し、3.3×5.6cm程度になるものとみられる。柄孔の削り角度45度である。基部は頭部から直線的に長く伸び、急に幅を広げて明瞭な肩部に至る。肩部以下は真っ直に、殆ど幅を変えず先端部に向う。頭部から肩部にかけて異状に長く、刃部の側縁が直線的な鍬である。内側は殆ど破損面であるが、刃部下方に稜線らしきものが確認できるので、二又鍬であろう。カシの柾目材が使用されている。

158は平鍬である。全長33.7cmで、縱方向に半折している。頭部は半円形で両面から削り込み、側

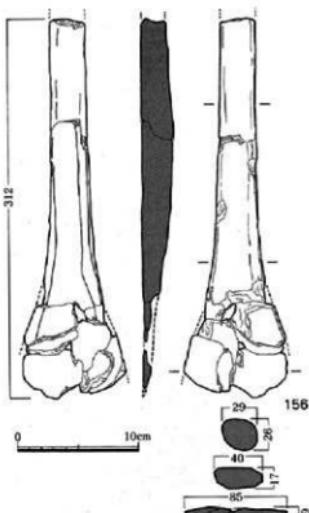


Fig.90 SX08出土遺物 (縮尺1/4)

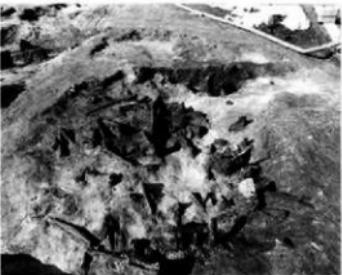


Fig.91 SX11遺物出土状況

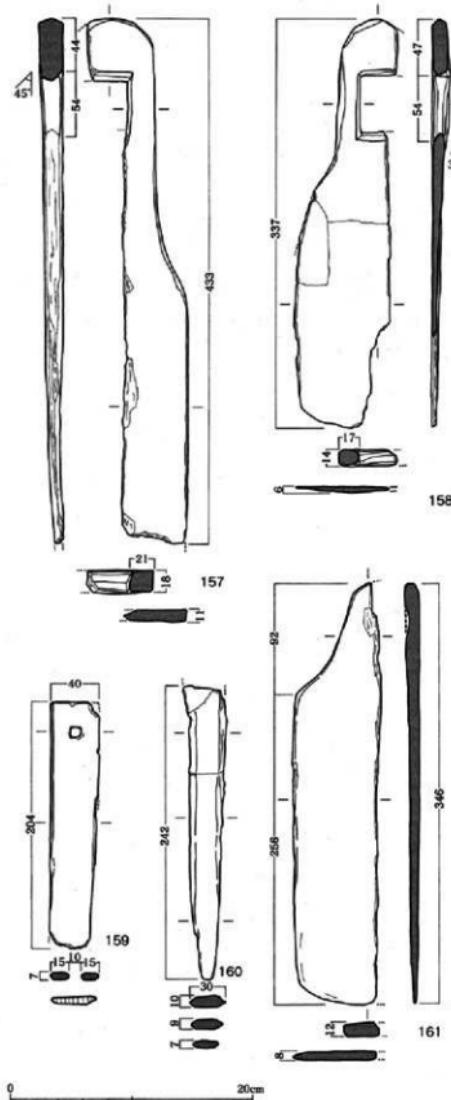


Fig.92 SX11出土遺物（縮尺1/4）

縁は真っ直ぐ伸びる。柄孔は長方形で3.3×6.0cm程度になると推測される。頭部から肩部にかけては急に幅を増し側縁は緩やかなカーブを持って刃部に向う。厚味は頭部で1.4cmを測り、刃部にいくに従って薄くなっている。全体的に幅広で扁平な感じの平鋸である。着柄角度は32度と鋭角になるが、実際には組合せ具などで調整されていたものであろう。カシの柾目材が使用されている。

159は、幅4.0cm、残存長20.4cmを測る扁平な有孔板材である。上部には径1cmの円孔を開ける。針葉樹の柾目材が用いられている。雑具類の一部であろうか。

160は形状から三叉鋸の刃部であろう。残存長24.2cmで、上部の幅は3.0cmである。両側縁は両面から断面山形に削りこまれ稜線を持つ。

161は広葉樹の柾目材を用いた製品である。縱方向に半折しているが、上

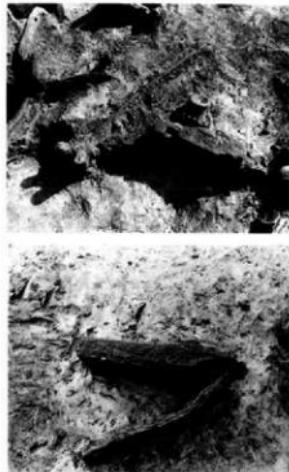


Fig.93 SX11遺物出土状況

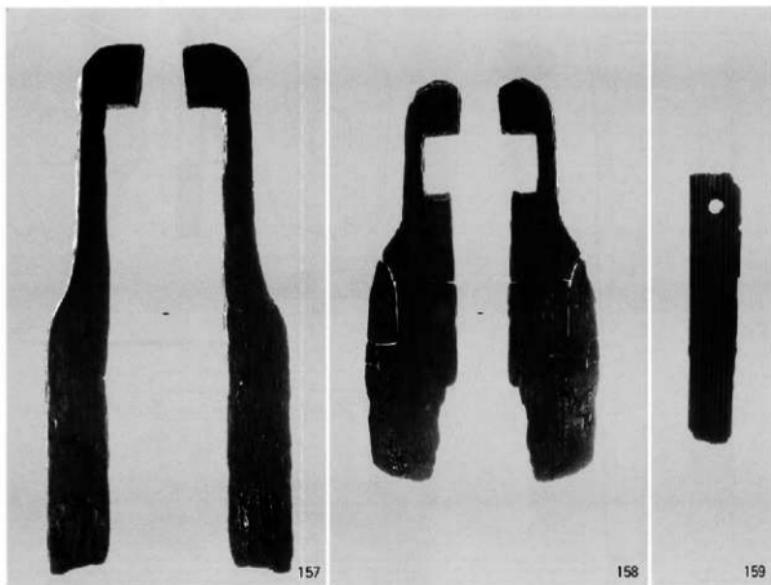


Fig.94 SX11出土遺物

端部の一部と下端部が残る。上端部は丸く整形し、以下は急に幅を広げて、明瞭な肩部を形成する。体部側縁は幅を広げず、そのまま直線的に長く伸びる。断面は上端が最も厚く1.2cmで、下端にいくに従って薄くなっている。全長は34.6cmあるので全体的に扁平な感じを受ける。上部破損面には柄孔の痕跡は見られない。材質や形状から農具であろう。平鋸とするのが最も妥当であると考えられる。しかし、頭部から肩部までの長さと推定柄孔位置、刃部の長さなど平鋸としては全体的なバランスが悪い。

SX12 (Fig.95~103)

I区の南西側に大きく広がる不定形土壙である。土壙はさらに南西側の未調査区へ延びている。SX08との境が不明確である。もともと一連のものであった可能性が大きい。長さ13m以上、幅8m以上、深さ0.86mを測る。中心部には湧水点があり、常時多量の水が湧き出していた。遺物には、鍬・鋤・漆塗り弓、建築部材などの多量の木製品と共に、弥生前期を主体に後期までの土器が出土している。後期の土器は上層からの出土である。また、この遺構からは前期の彩文土器が多く出土している。水場祭祀を想起させるものである。



Fig.95 SX12遺物出土状況

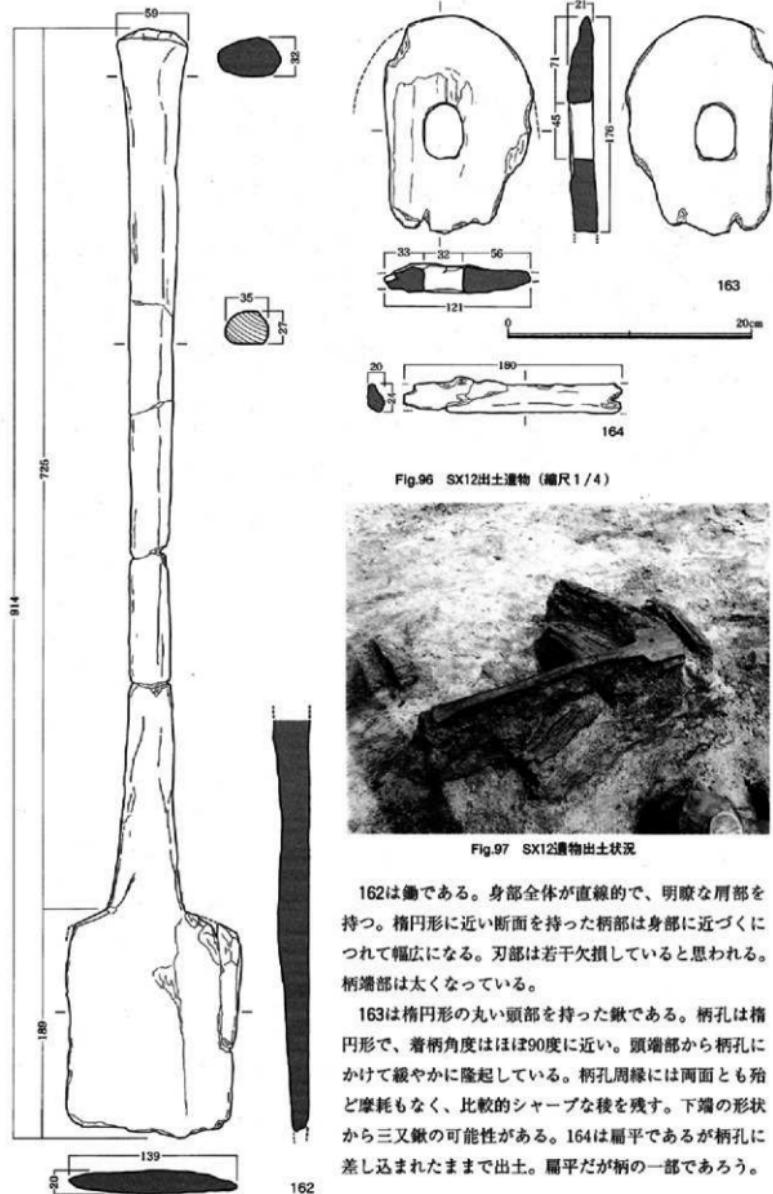


Fig.96 SX12出土遺物 (縮尺1/4)



Fig.97 SX12遺物出土状況

162は鍔である。身部全体が直線的で、明瞭な肩部を持つ。梢円形に近い断面を持った柄部は身部に近づくにつれて幅広になる。刃部は若干欠損していると思われる。柄端部は太くなっている。

163は梢円形の丸い頭部を持った鍔である。柄孔は梢円形で、着柄角度はほぼ90度に近い。頭端部から柄孔にかけて緩やかに隆起している。柄孔周縁には両面とも殆ど摩耗もなく、比較的シャープな稜を残す。下端の形状から三又鍔の可能性がある。164は扁平であるが柄孔に差し込まれたままで出土。扁平だが柄の一部であろう。

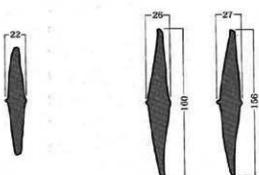


Fig.99 SX08遺物出土状況

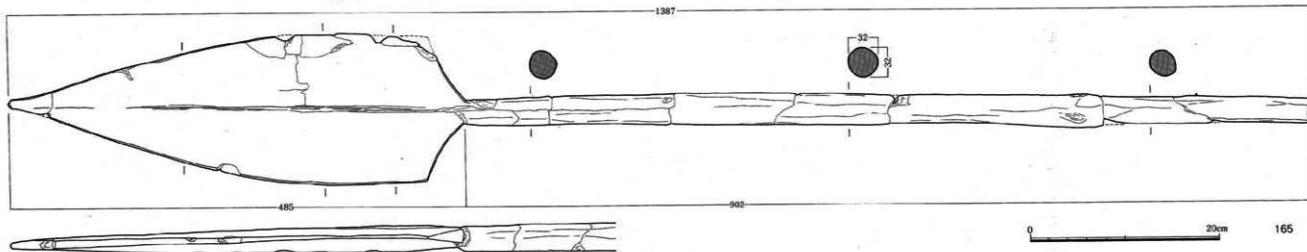


Fig.98 SX08出土遺物 (縮尺1/4)

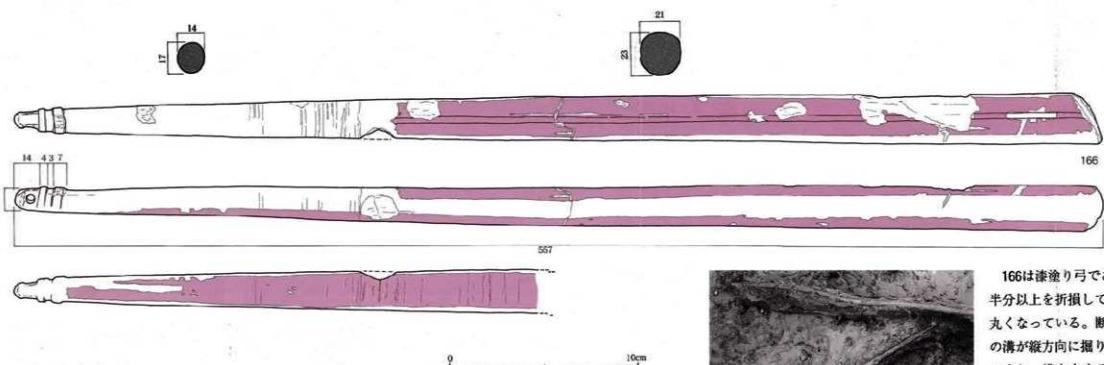


Fig.100 SX12出土遺物 (縮尺1/2)



Fig.101 SX12遺物出土状況

165はSX08出土。柄と考えられる木製品である。土壤底に密着した状態で、かつ完形で出土した。全長138.7cm、柄90.2cm、身48.5cm、最大幅16.0cmを測る。形状がよく整い丁寧に作られている。表裏左右の区別がない作りである。柄の形状は、ほぼ円形で中央部がやや太く作られている。径は3.2cmである。柄先端部はやや細くなり、端部は若干尖らせて終る。身に移行する部分もやや細く整形されている。身部はシャープな肩部を形成し、肩部から先端部にかけては木ノ葉状に尖る。身の中心部には小さな腹起部が走る。また、身の周縁には端面を形成する。

166は塗通り弓である。土壤の底からやや浮いた状態で出土した。半分以上を折損しており、残存長57.7cmである。折損面の角はやや丸くなっている。断面形はやや楕円形を呈する。片面に幅3~4mmの溝が縱方向に掘り込まれているので、表と裏のあることが分かる。つまり、溝を有する面が手前側、すなわち裏側ということになる。この溝は先端部から17.5cm下まで伸びている。弓羽の部分は径1cm前後である。先端部は扁平に仕上げ、その部分に孔を穿つ。羽の部分は二段の隆起部を設け、事実上溝状を呈する。表側の隆起部は摩耗して

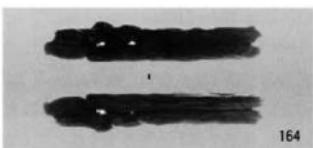
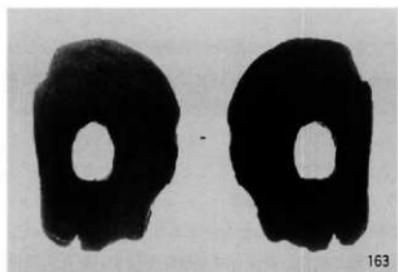


Fig.102 SX12出土遺物

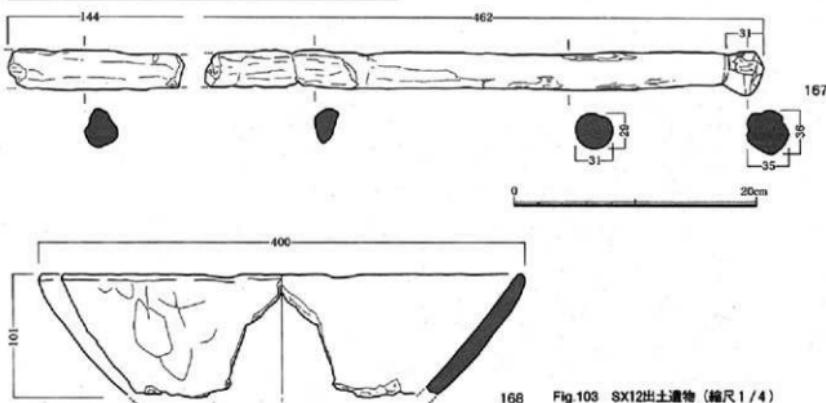


Fig.103 SX12出土遺物 (縮尺1/4)

いるのか段が無い。漆は朱色を呈し、厚く塗られている。表側（前面側）は弓弭の部分まで、裏側は縫溝の終るところまで塗られている。両側縁は幅1.0~1.5cm前後縱方向に塗り残されている。塗り残された部分は黒色を呈している。黒色部分も何か塗られていたものであろう。赤と黒とのコントラストが美しく調和している。また、漆を塗った後に、幅3~4mm位の何かをコイル状に巻いた痕跡が、3.5cm前後の幅で、4箇所ほど当り痕として残っている。組紐か桜の皮などが巻かれていたものであろうか。185の黒漆を塗った弓には実際に幅3~4mmの桜の皮が巻かれていた。頭部の孔にも飾りが付けられたと考えられ、弓全体には漆以外に我々が想像する以上の装飾が施されたとみられる。弓の残存部は径から判断して半分以下なので、少なくとも1m20cmを越える長弓であったことが推測される。

167は農具の柄ではないかとみられる木製品である。2片合わせて残存長は60cmを超える。径約3cmの棒状で、ケズリ加工された頭部を持つ。接合しない2片は、木目の様子からそれ程離れていない部位にある。クヌギの芯持ち材が使われている。

168は下層から出土した、刺り貫きで作られた比較的大型の鉢である。復元口径40.0cm、残存高10.1cm、最大厚1.5cmを測る。径の約4分の1程度の残存部位であるが、ほぼ正円に近い口縁を持っていたことが窺える。器壁の厚さはほぼ均等である。残存状態は良好で、外面の一部以外は加工痕が殆ど残っていない。広葉樹が材として使用されている。

SX13 (Fig.104~119)

SX13の東側で検出された不定形土壌で、SD01に大きく切られ、大部分が調査区外へ伸びているので全体の様子は分からない。長さ4.5m以上、幅2.7m以上、深さ0.34m以上である。土壌内には杭を斜めに密に打ち込み横木を渡す土留状遺構も存在したが、湧水と崩落で細かい調査ができなかった。時期は弥生前期中葉から後半を主体とするものである。その後、T-15下部の遺構はSX13の続きと判明した。したがって、T-15下部として取り上げた遺物はSX13と同一と考えて差しつかえなかろう。それと、II区のSD03中層も同時期で、SX13の続きである可能性がある。

169は三叉鎌である。頭部に対して刃部は比較的短い。使い減りしたものであろう。全長28.7cmで、柄孔の部分は隆起する。前後面とも柄孔周囲の摩耗は殆どなく、シャープな稜線を残す。柄孔内面は

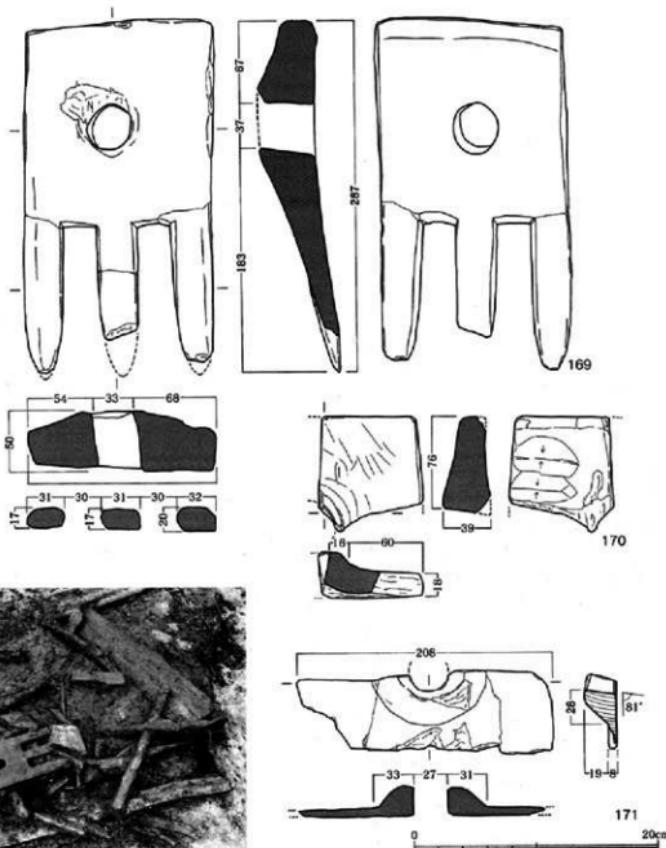
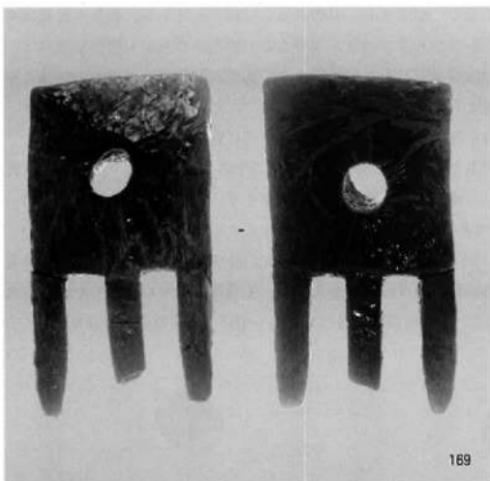


Fig.105 SX13遺物出土状況

Fig.104 SX13出土遺物 (縮尺1/4)



平滑に整形されている。SD03中層出土。

170は三叉鉤の頭部から柄孔にかけての一的部分である。頭端部より柄孔にかけて徐々に隆起する。前後面ともケズリ痕が残る。

171はSD03中層から出土したもので、形状から横鎌ではないかと考えられる。柄孔の角度は81度である。柄孔の周囲は若干摩耗しているが、明瞭な縦線を残す。柄孔の隆起部は段をもって形成され、形状が整っている。

172もSD03中層から出土したもので、カシの柾目材を使用した三叉鉤である。頭部と両側を欠失するが、頭端部と刃部が完全に一本

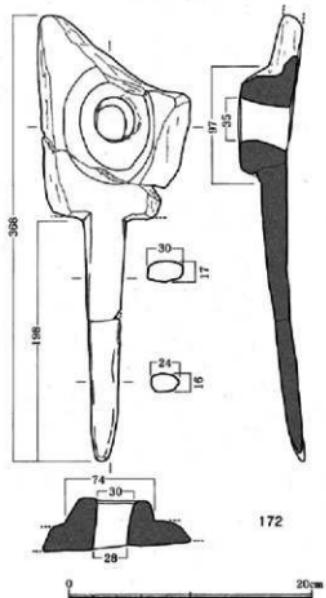
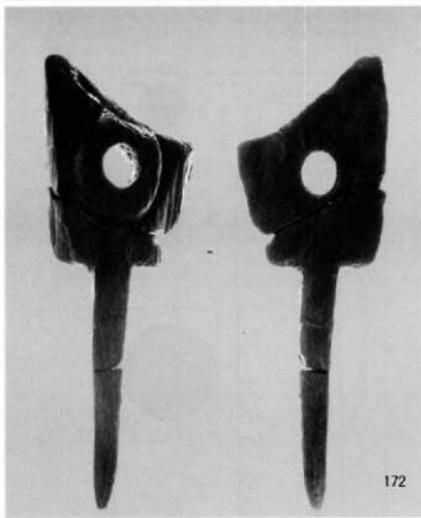


Fig.107 SX13出土遺物（縮尺1/4）

Fig.106 SX13出土遺物（縮尺1/4）

残っているので、全長36.8cmと確定することができる。刃部の長さは19.8cmである。柄孔の隆起はやや梢円形を呈し、右側と左側では高さが異なりアンバランスである。柄孔そのものも梢円形気味で、体部と柄孔の軸が歪んでいる。土圧か腐食変形したものであろう。弥生前期後半の遺構からは柄孔を隆起させ、頭部方形の三叉鉄が多く出土している。

この時期の豊作も出土している。弥生後期のタイプと異なり握り部に節帯を持っている。

173・175はT-15黒色腐食土出土であり、SX13と同じ遺構のものである。173は握り部から抜き部への移行部である。明瞭な稜線を持ち、抜き部側に2条の沈線を巡らす。表面は滑らかで形状も整い、丁寧な作りである。175は節帯の部分である。173のすぐ近くで出土した。調査時に破損してしまい、接合しないが同一個体である。また、同じく174も同一個体である。握り部と抜き部との境には稜をもち、2条の沈線を巡らす。抜き部の形状は僅かに梢円形を呈し、先端部に向うに従ってやや径が太くなっている。比較的丁寧な整形を加え、抜き部端は摩耗して丸みを帯びる。遺存状態は非常に良く、

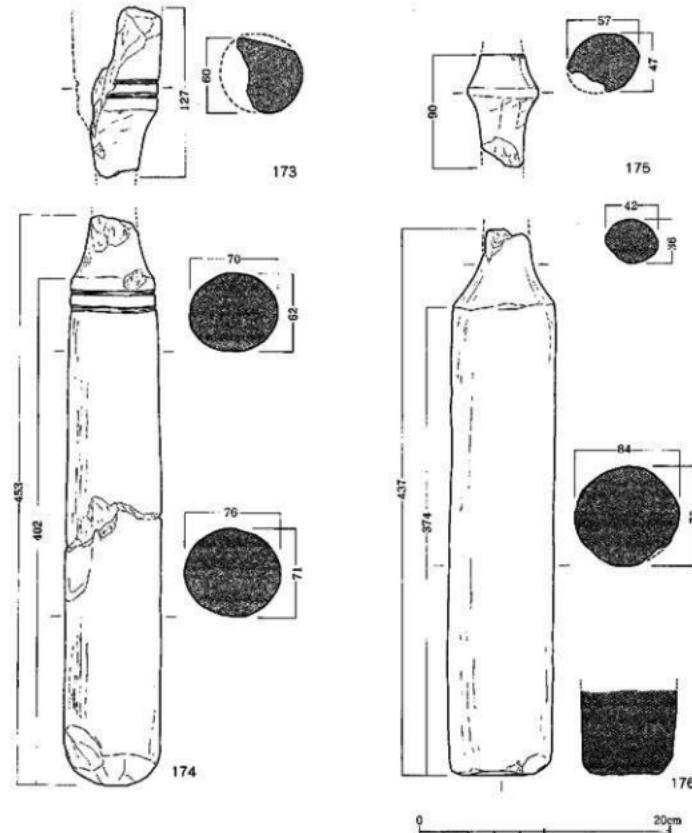


Fig.108 SX13出土遺物（縮尺1/4）

加工痕などは見られない。残存長は45.3cmで、復元すると1m近くになるものと推測される。

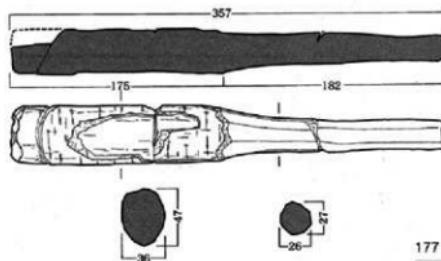
176はSD03中層出土である。残存長43.7cmで、握り部と抜き部との境には明瞭な稜線を持つ。抜き部は径8cm前後で、整った円柱状を呈する。先端部は平坦になっている。

次に、横柵と斧柄について説明しておきたい。

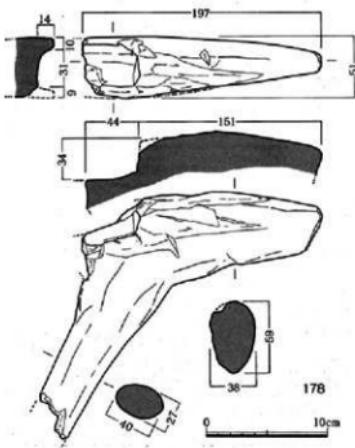
177はSD03中層出土の横柵である。弥生後期のものと基本的な形状は変わらない。全長35.7cm、握り部長18.2cm、柵部長17.5cmを測る。握り部には整形のための削り痕がそのまま残る。柵部との境は明瞭であり、柵部にはそのまま樹皮が残る。中央部は使用によって不整形に樹皮が剥がれている。あまり使い込まれた横柵ではなさそうである。

178はSD03中層出土の斧柄である。木の幹と枝の部分を利用して作られている。柄の大部分と着装部を失する。全体的に重厚な作りになっている。着装部はケズリによってやや丸味をもって彫り留められている。頭部側は緩やかに幅を減じ、台形状に整形する。着装部や側縁部の形状から、柱状片刃石斧の柄と考えられる。

179は、両面に窪みを持つ製品で、SD03中層出土である。全長29.2cm、最大幅13.9cm、最大厚8.9cmを測る。両面とも中央部に窪みをもつ。窪みの内部はケズリ痕ではなく、小さい凹凸の棱線が観察される。何らかの作業に使用された痕跡であろう。



177



178



179

Fig.109 SX13出土遺物 (縮尺1/4)

Fig.110 SX13出土遺物

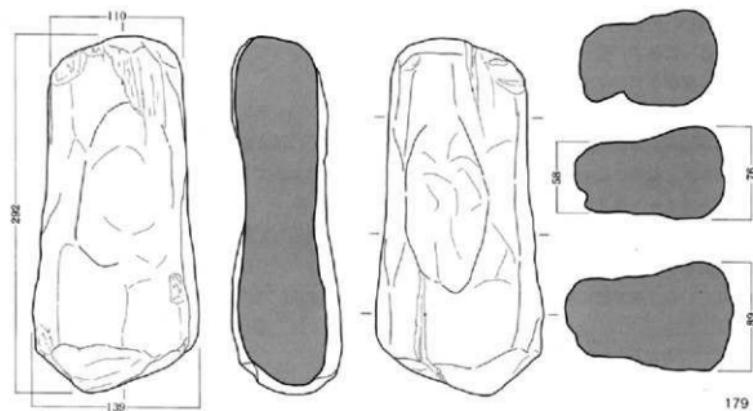


Fig.111 SX13出土遺物

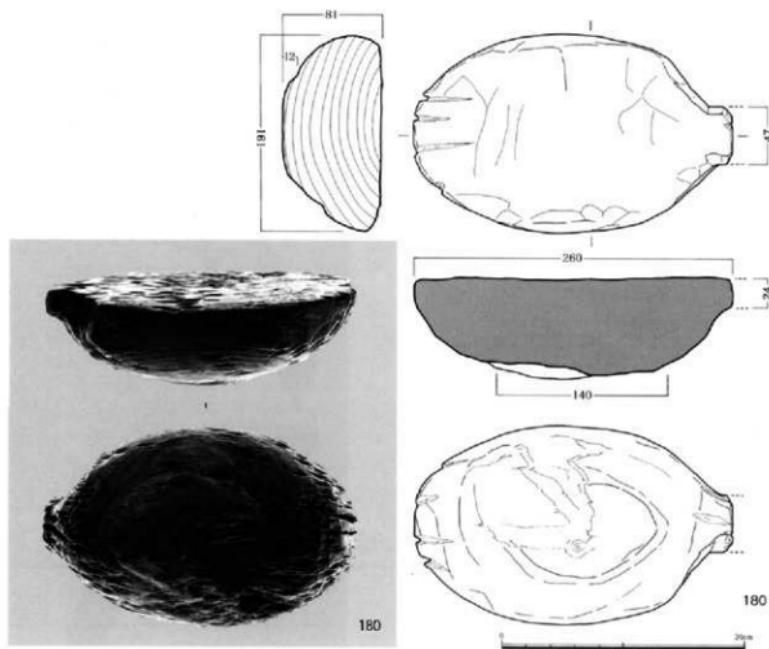


Fig.112 SX13出土遺物（縮尺1/4）

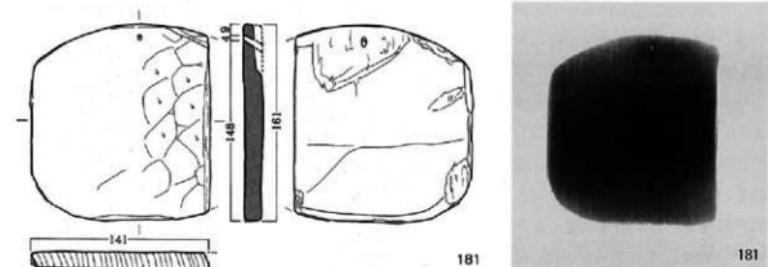


Fig.113 SX13出土遺物



Fig.114 SX13出土遺物（縮尺1/4）

180は容器の未成品である。形状から把手付き槽ではないかと思われる。破損した柄部から、やや直線的な肩部を経て、平面梢円形の身部となる。外形のラインは整っており、上面は平滑に削られる。外面には、底部中央に梢円形状の低い隆起部がある。意図的に作られたと思われるが、まだ隆起部の範囲が平坦に整形されていない。容器製作のプロセスを考える上で貴重である。

181は他の部材と組み合わせて容器等になると推測される。片面には規則的なケズリ痕が明瞭に残り、もう片面には外形に沿って針書きの線が見られる。穿孔は一箇所斜め方向にあく。大きさの割には厚い板材という印象で、側面はほぼ垂直かつ平坦に、丁寧にケズリ整形される。

182は完形品の鉢である。SD03中層下の灰砂層から出土している。横木取りで、木の外側が底面、芯材側が口縁にあたる。器壁の厚さが2.5～最大3.5cmを重厚な作りの鉢である。梢円形に近い半球形の倒り貫きで、内面には成形時のケズリ痕が残る。口縁の高さが最大で3.4cmの差があり、底部の傾きも一定でない。全体的にやや歪んだ形状を呈している。外面は所々にケ

ズリで出来たと思われる平坦面が確認でき、比較的大きな単位で削られたことが窺える。

183は木甲の破片であろう。焼けて炭化している。断面はやや弯曲し外面には区画の縦線と連続山形の沈線を入れる。本来漆塗りであったと見られ表面が縮れている。部位ははっきりしないが精巧な作りである。SD03中層出土として取り上げたが上層下の可能性が高い。

184はSD03中層出土の柾目が美しく通った板状製品である。厚さ5mm前後と薄く、上端に孔を有する。中央の欠損部以外は本来の形状を示していると思われるが、両側に肩部を持つ左右対称の形であったかどうかは分からぬ。雑具類の部材か。

185は黒漆塗りの弓である。SD01下層出土で取り上げたが、下層はSX13の埋土である。残存長16.4cm、径は3.0cm弱である。身の一面に縱溝を彫り込む。この弓の重要なところは、

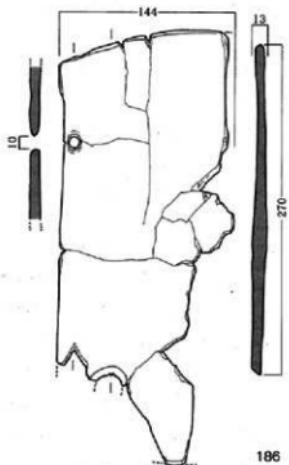
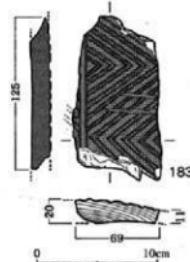


Fig.117 SX13出土遺物 (縮尺1/4-1/2)



▲ Fig.115 SX13出土遺物 (縮尺1/4)

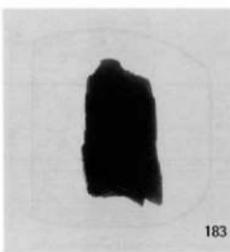
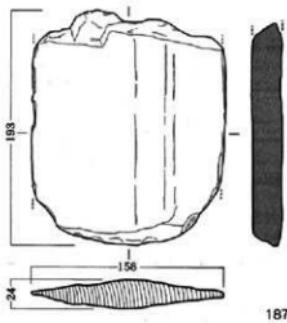
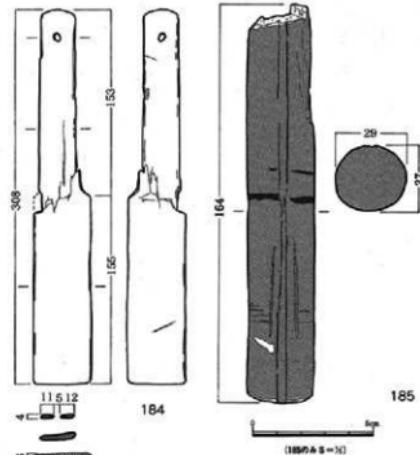


Fig.116 SX13出土遺物



187

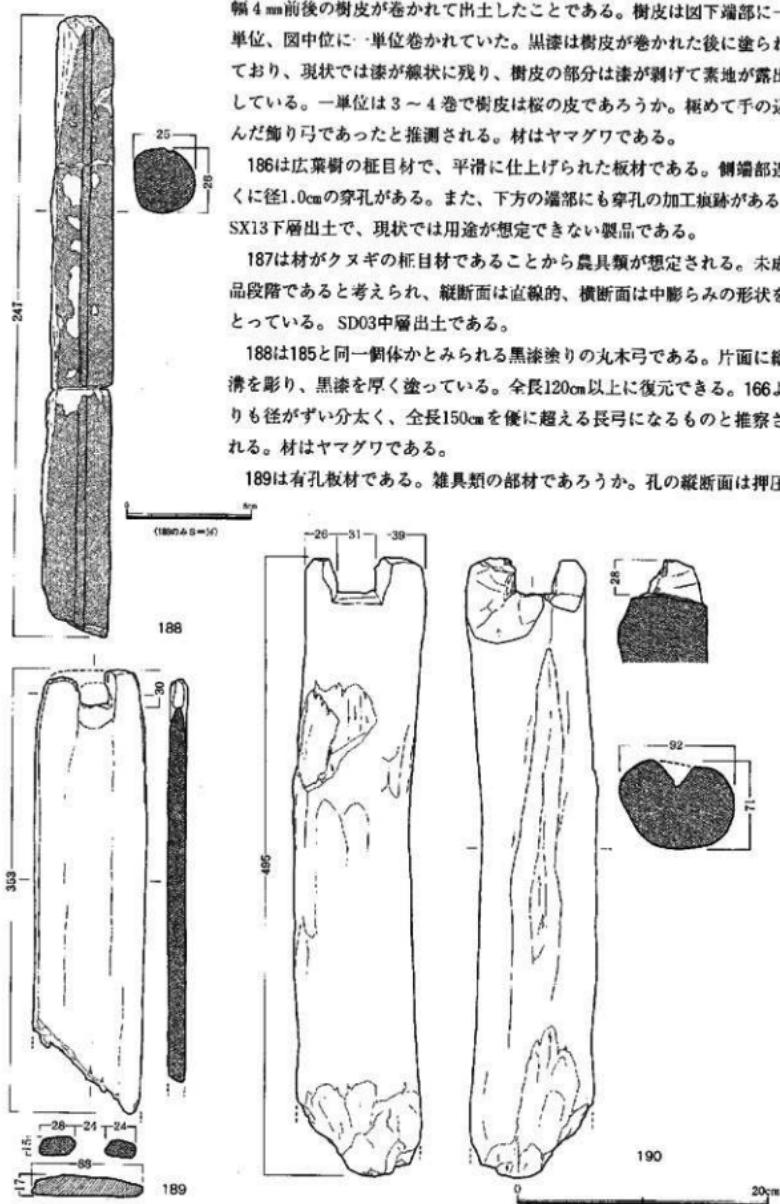


Fig.118 SX13出土遺物 (縮尺1/4・1/2)

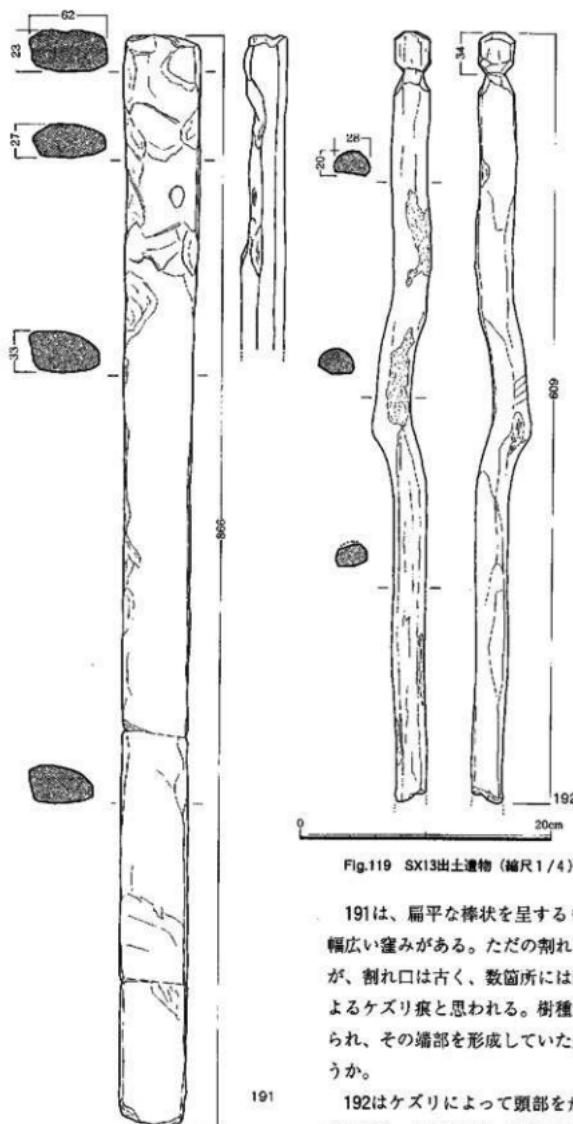


Fig.119 SX13出土遺物（縮尺1/4）

191は、扁平な棒状を呈するもので、上方の端部近くに幅広い窪みがある。ただの割れにより出来た可能性もあるが、割れ口は古く、数箇所には鋭い切れ口もあり、刃物によるケズリ痕と思われる。樹種から農具柄未成品とも考えられ、その端部を形成していた途中段階のものではなかろうか。

192はケズリによって頭部を形成し、身の断面は半円形を呈する。屈曲している部分には筋があり、自然の形状をそのまま残す。平坦部のケズリ痕はよく残り、ケズリ口もシャープである。製品としては雑具類の一品であろうか。

で潰れた感じである。孔を有する端部側面も押圧を受けた感じでやや縮まっている。SX13下層出土で、残存長35.3cmを測る。

190は、端部に方形の抉りを持つ部材である。残存長49.5cmで、抉り部は幅3.1cm、深さ2.8cmである。おそらく建築部材であろう。表面にはケズリ痕が残る。

SD03 (Fig.120~164)

我が国で、稲作開始期の初期木製農具類が最もまとまって出土した溝である。木製農具類以外にも、漆塗りの容器や弓など貴重なものが数多く出土している。

溝は、調査区の南東から北西に向かって伸び、さらに西側に弯曲しながら続いている。最大幅5.5m、深さ0.6mで、断面は皿状に窪む。カーブする部分は外側が深く内側が浅くなっているので、形状から自然流路と考えた方がよさそうである。溝中央部をSD01に大きく切られ、かつ、南東側はSD02と重複していた。SD01で切られた西側をI区、東側をII区として調査を進めた。

木製品は流れ込みの状態で出土し、淀みに溜ったごとく、流木などと共に折り重なって検出された。特にI区C-6を中心とするカーブ手前では夥しい数の木製品が出土している。さらに、西側では溝の深い部分に集中していた。II区では、遺物は出土ごとに記録をとって取り上げたが、出土量はI区と変わらず、北側の集落から流れ込んだような状態で多量に出土している。

出土木製品の種類は、諸手鋤、平鋤2種類、鎌2種類、堅杵、斧柄、エブリ、泥除、槽、諸手鋤の未完成品、素材、エブリの未完成品や素材、漆塗り弓、漆塗り容器把手、建築部材などである。これらは腐食質に富む粘質土の中層下部から下層にかけて出土したものである。上層から中層上部にかけては新しい時期の土器も含むが、中層下部から下層にかけては突帯文系の夜臼式土器単純層となる。深鉢は突帯の刻み目が太く、浅鉢は屈曲の後がシャープで、黒色に強く研磨が加えられるものである。伴出遺物も重要なものが数多く出土しているが、それらについては前報告をご参照頂きたい。出土木製品の組成は、夜臼式土器単純期のものであり、稲作開始期の状況を示す貴重なものである。



Fig.120 SD03遺物出土状況（北東から）

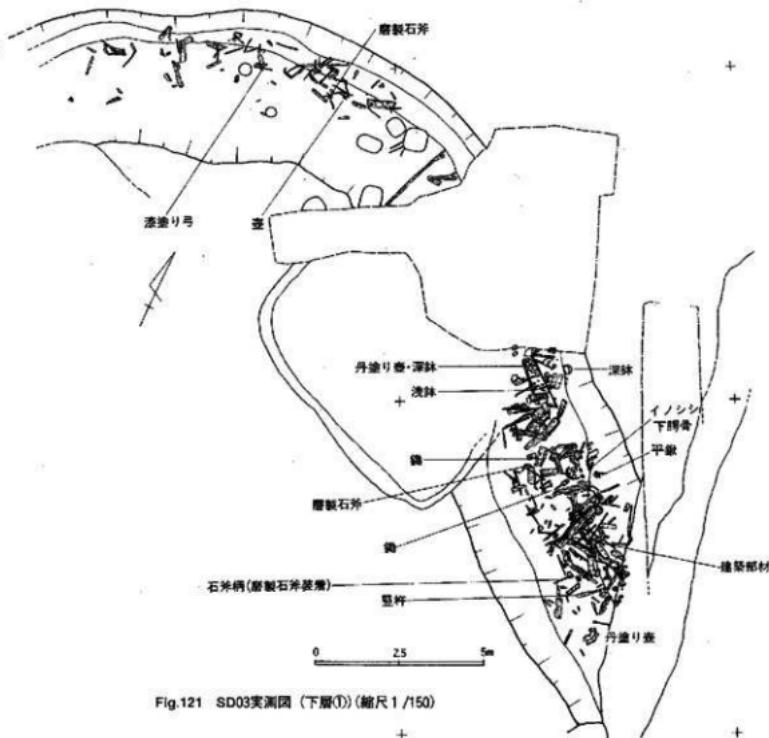


Fig.121 SD03実測図（下層①）(縮尺1/150)

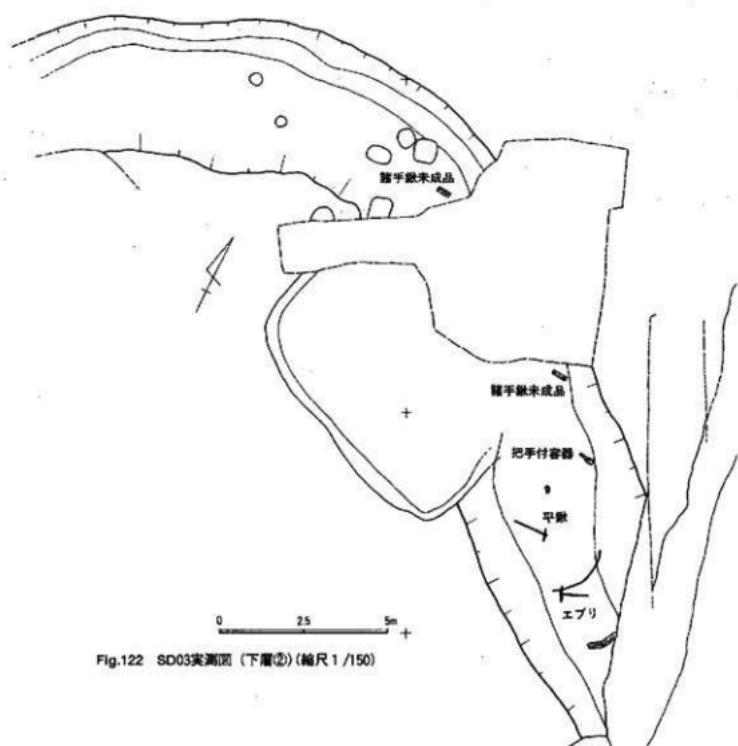


Fig.122 SD03実測図（下層②）(縮尺1/150)

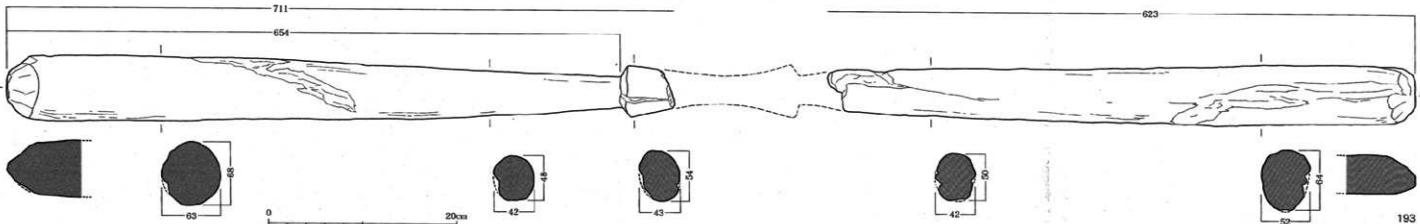


Fig.123 SD03出土遺物 (縮尺1/4)



I区 SD03 (Fig.123~151)

193はI区C-6下層(上)から出土した堅材である。同一個体であるが、欠損部には滋生後期の柱状が立ったままになっていた。残存長は130cmを越え、握り部を足すと150cm以上になると推測される。全長が長く細身である。握り部は一部が残り、抜き部基部より太く整形され、鼓形の筋帯を持つ。抜き部は基部から徐々に径を増して先端部に至る。先端部は両方とも尖り気味で面を形成しやや摩滅している。サカキの芯持材が用いられ、腐食の進んでいない部分は平滑である。先端部の形状から東南アジアの民族例にみられるように、柄とセットになる可能性がある。

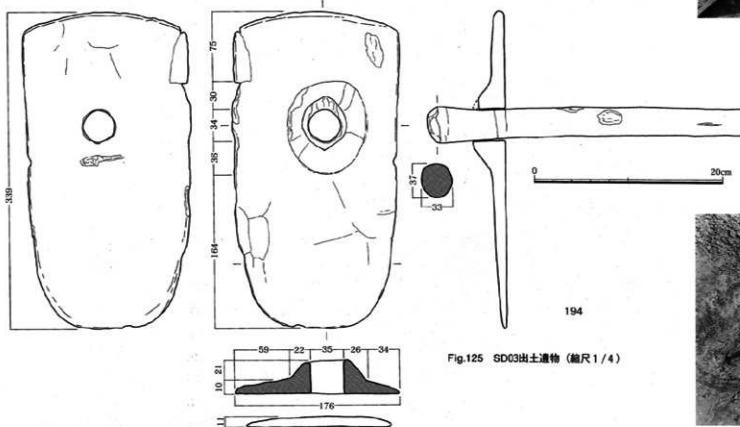


Fig.125 SD03出土遺物 (縮尺1/4)



Fig.126 SD03出土遺物 (縮尺1/4)

194は平鉛の身と柄である。溝底の砂層に食い込んだ状態で出土した。身の長さは33.9cm、頭部幅17.7cmを測る。柄孔の部分は隆起させ、径3.5cmの孔を穿つ。孔の位置は若干片側にズレている。柄と身は直角に着く。身幅は頭部が最も広く、諸手釦の再加工品ではない。もともと平鉛として製作されたものであろう。柄は全長89.1cmを測り、中央部の径は2.6×2.9cmである。柄尻から先端近くまでほぼ同径で、先端部は径を増し3.3×3.7cmになる。柄から身が抜けない様に工夫している。先端部は柄尻とともに丸味をもって加工する。身、柄にとともにクヌギの胚木材が用いられている。

平歛には、194のように幅広で柄が直角に着くタイプと、いわば狭鉗と呼べるような身幅が狭く、身と柄が角度をもって着くタイプの2種類が確認されている。

195は残存長18.0cm、幅11.0cmを測る。柄孔は身より段をもって隆起するが、腐食していることもあり、隆起の高さは本来のものではないだろう。隆起部は縦に長い梢円形を呈する。身の内面は平坦に仕上げられている。着柄角度は現状の残りからみれば58度前後である。クスギの柾目材が用いられている。

196は下層（上）から出土した農具の一部とみられる木製品である。長さ30cm強、推定幅40cm程度になるとみられる。厚さは中央付近で約5mm、外縁に近づくにつれて厚味を増し、1cm弱となる。やや笠形に弯曲しており、中央と外縁では約2cm程の高さの違いがある。形状から判断して泥除と推定される。一般的に泥除の場合は、木目は横方向に通っているようだが、これは縦方向である。数箇所に穿孔が見られるが、中心付近とやや右上部にある小さめの二つの孔は、草木の根などで開いた孔の可能性が高い。中心位置と上端部の二つの孔は補修孔であろうか。側端近くの一孔は、その位置から考えて、補修孔というよりも鍔本体との着脱に関係したものであろう。腐食のため、孔周囲の紐ズレなどの痕跡は確認できない。用材はクスノキであり注目される。



▲ Fig.129 SD03遺物出土状況

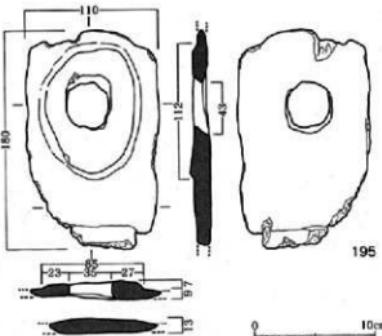


Fig.127 SD03出土遺物（縮尺1/4）

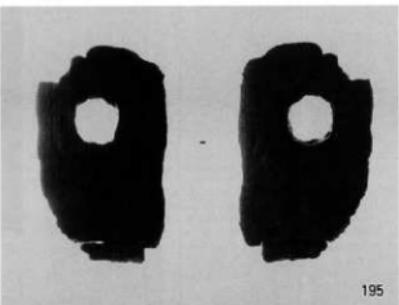


Fig.128 SD03出土遺物（縮尺1/4）

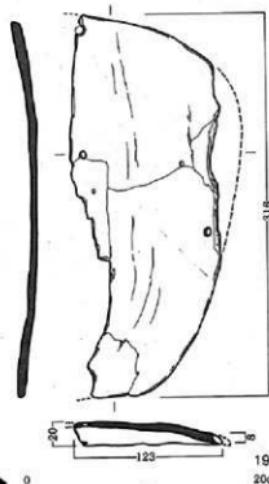


Fig.130 SD03出土遺物（縮尺1/4）▶

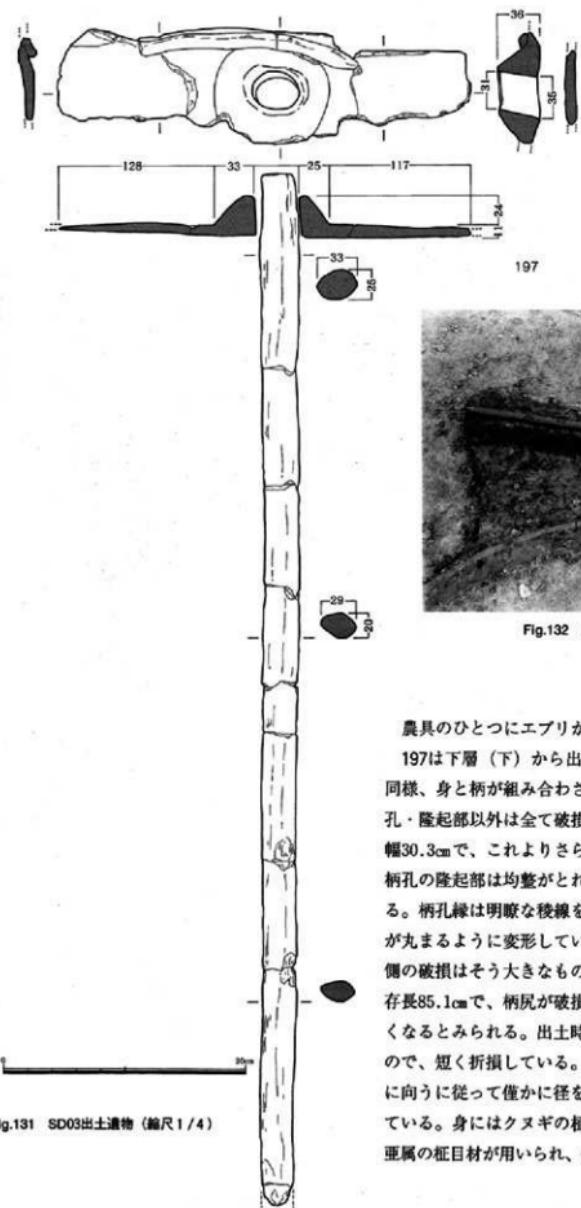


Fig.132 SD03遺物出土状況

農具のひとつにエブリがある。

197は下層（下）から出土したエブリである。平鉗と同様、身と柄が組み合わされた状態で出土した。身は柄孔・隆起部以外は全て破損及び変形を受けている。残存幅30.3cmで、これよりさらに幅が広くなるとみられる。柄孔の隆起部は均整がとれて高く、作りもシャープである。柄孔縁は明瞭な稜線を残す。隆起部より上部は上縁が丸まるように変形している。刃部は全て欠失する。両側の破損はそう大きなものではなさうである。柄は残存長85.1cmで、柄尻が破損しているのでこれよりやや長くなるとみられる。出土時より保存状態がよくなかったので、短く折損している。断面形はやや扁平で、先端部に向うに従って僅かに径を増すが、装着部はやや窄まっている。身にはクヌギの柾目材、柄には常緑のアカガシ亞属の柾目材が用いられ、使い分けがなされている。

Fig.131 SD03出土遺物（縮尺1/4）

エブリの製品は197の柄と身が組み合わさった一例しか出土していないが、身の未成品と考えられる部材が複数例出土している。エブリは初期水稻農耕には欠かせない農具のひとつであったことが容易に推測できる。以下、その未成品について説明しておきたい。Fig.133-198~Fig.136-202までの5点は全て落葉樹のクスギ材である。また、木取りは全て柾目となっている。

198は、全長54.4cm、幅17.9cmを測り、中央部に低い方形の隆起部を削り出す。外形はやや台形を

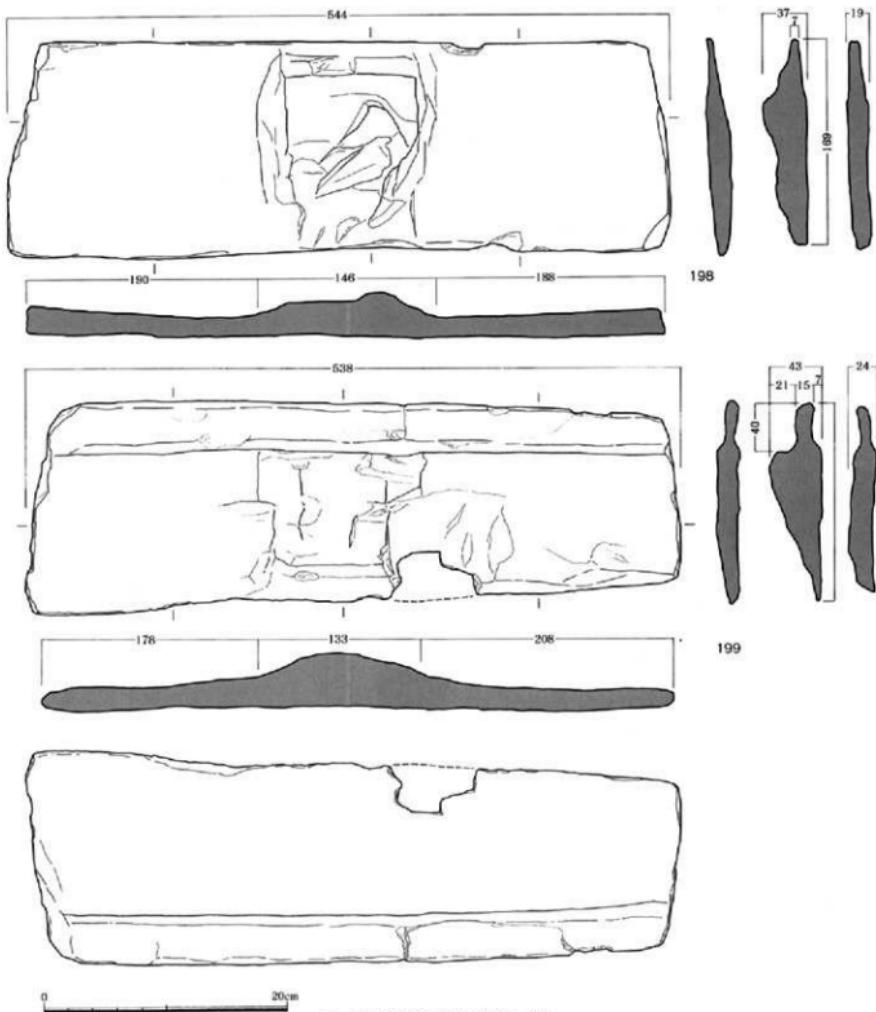


Fig.133 SD03出土遺物 (縮尺1/4)

呈する。全体的に扁平で、厚さはほぼ均一であるが、上端部がやや薄くなっている。

199も似たような形状となっている。全長53.8cm、幅17.7cmを測り、中央部に方形の隆起部を削り出している。方形の隆起部はシャープさがなくなだらかになっている。上縁には両側から加工されたとみられる段を有する。段の稜線は丸くなってしまい。

197の上縁が丸まるように変形しているのは、この部分の整形に関係があるのではなかろうか。

200は全長60.2cm、幅21.2cmを測り、198・199より若干大きめである。ただ、製品の大きさに関係があるかどうかは分からぬ。平面形は台形状を呈し、刃部側がやや外弯する。中央部上縁側を若干削り出して隆起させるが曖昧である。全体にまだ厚味が残り、これから加工を施していくという段階のものであろう。ただ、既に上縁

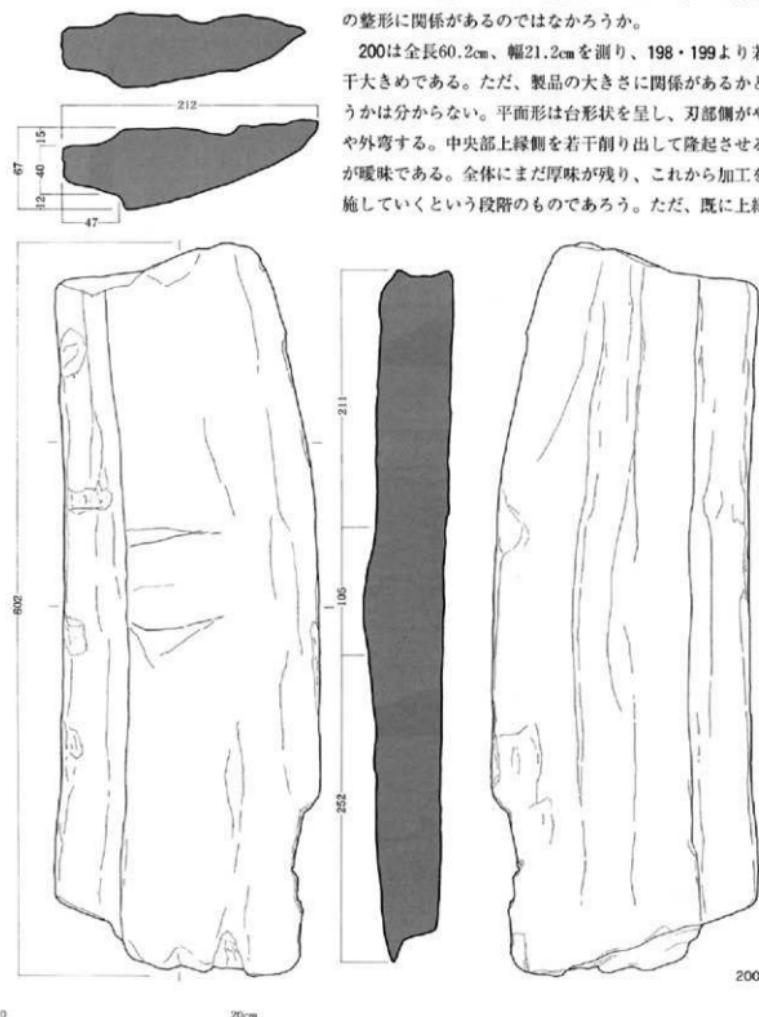


Fig.134 SD03出土遺物（縮尺1/4）

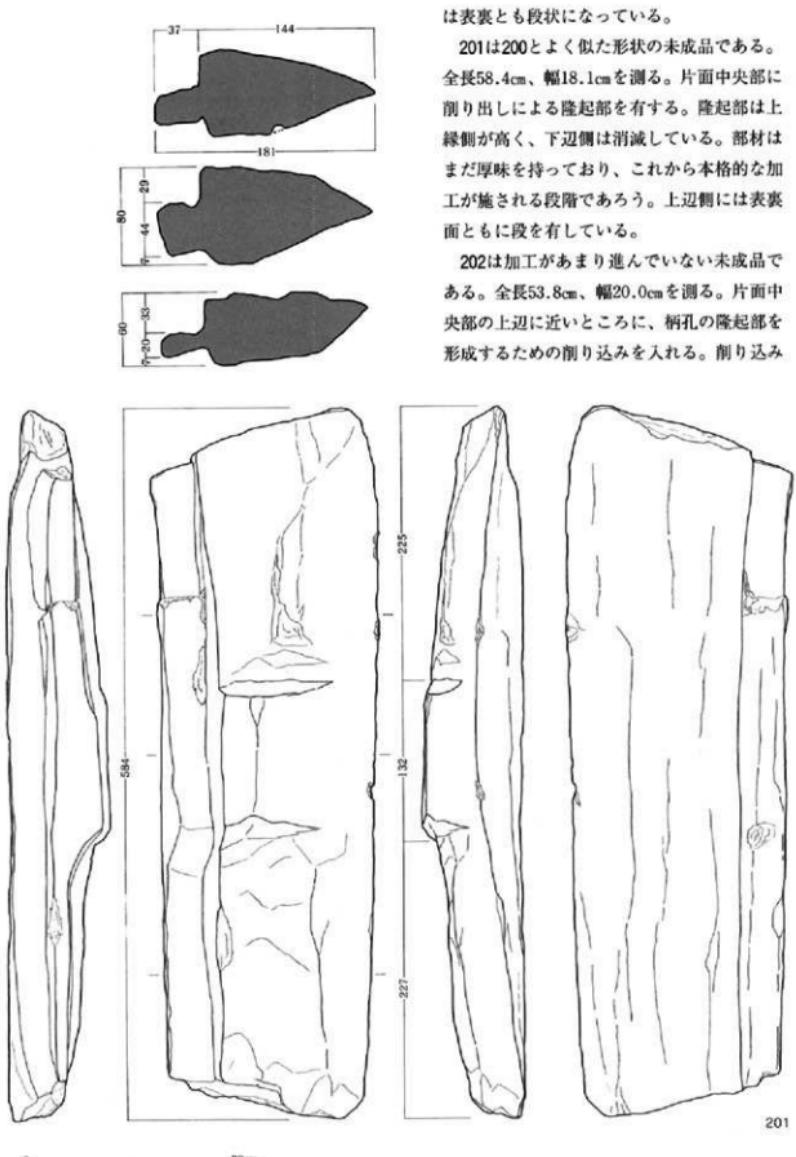
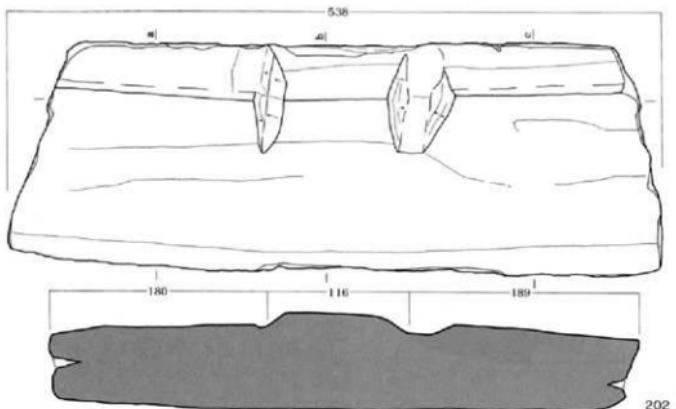


Fig.135 SD03出土遺物（縮尺1/4）



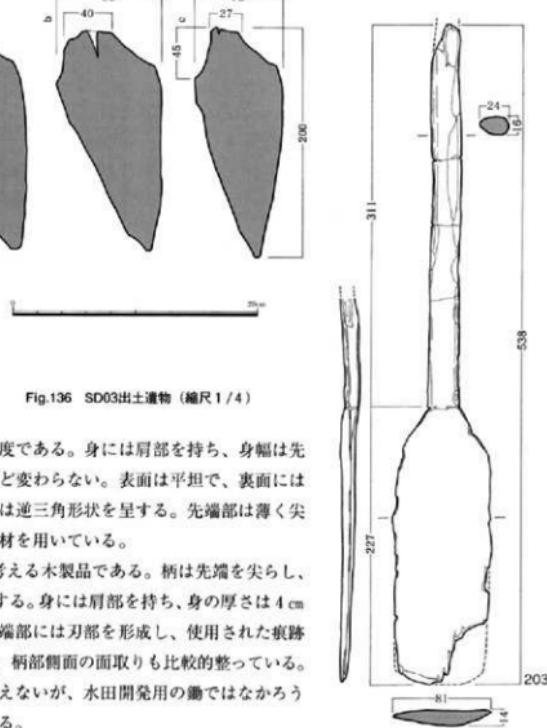
を入れた両側には素材の稜線が残る。上辺部には、まだ厚味を持っているが両面とも段状に加工されている。200と同様、調整加工の初期的段階の未成品であろう。

203は小型の鋤である。残存長53.8cm、身の長さ22.7cm、幅8.1cmを測る。柄の上部は焼けて欠けし

ている。柄は扁平で1.6×2.4cm程度である。身には肩部を持ち、身幅は先端に向かってやや狭くなるが、殆ど変わらない。表面は平坦で、裏面にはほぼ中央に稜がうすく残り、断面は逆三角形状を呈する。先端部は薄く尖り刃部を形成する。クヌギの柾目材を用いている。

204は純重であるが鋤の一種と考える木製品である。柄は先端を尖らし、表面は平坦に、裏面は山形に整形する。身には肩部を持ち、身の厚さは4cm近くで、裏面は山形を呈する。先端部には刃部を形成し、使用された痕跡が窓える。身部の表面は滑らかで、柄部側面の面取りも比較的整っている。突帯文期で定型化しているとは言えないが、水田開発用の鋤ではなかろうか。鋤の未成品や櫂との見解もある。

Fig.136 SD03出土遺物（縮尺1/4）



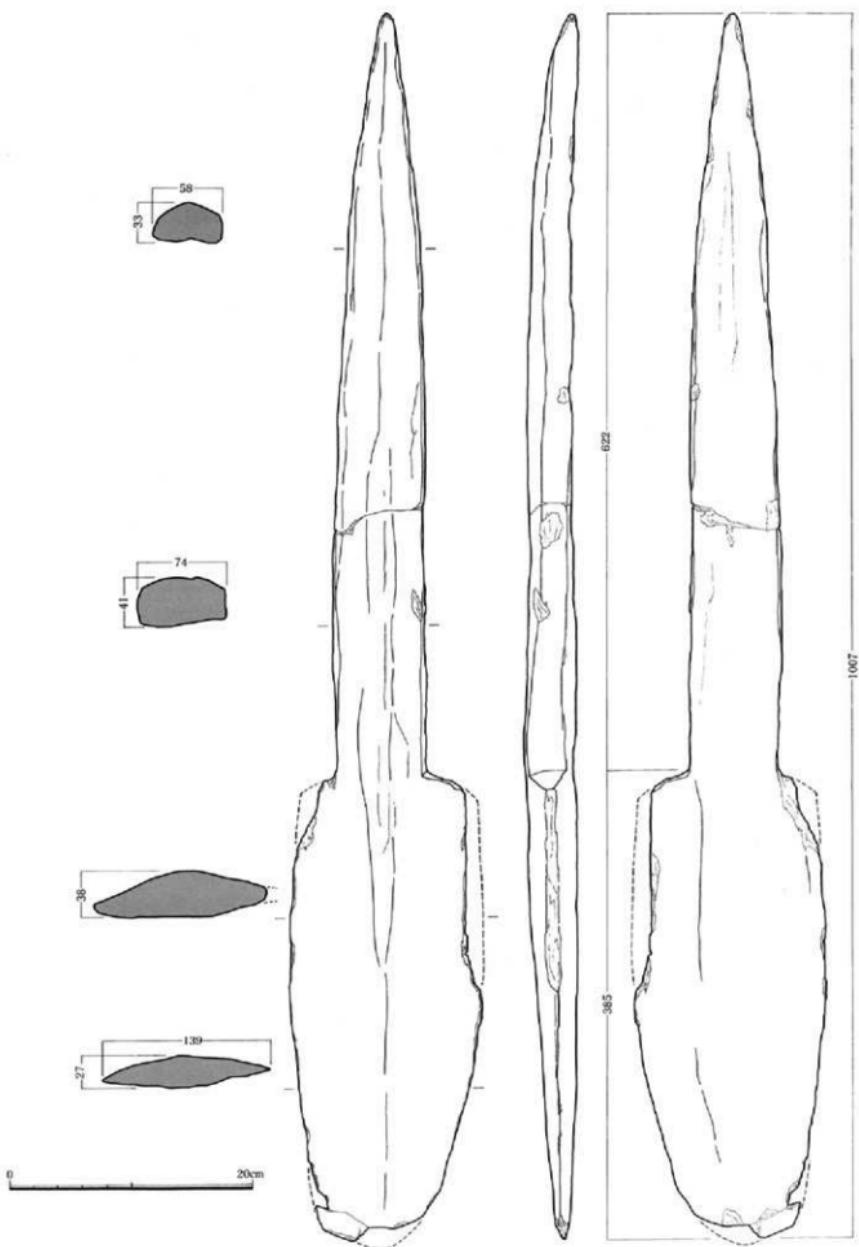


Fig.137 SD03出土遺物 (縮尺1/4)

数は少ないが横鎌や斧柄が出土している。205は横鎌である。I区B-5上層出土で、この部分は上層からも突帯文土器が出土していたので、突帯文期に属する可能性が高い。握り部の先端を失する。握り部から柄部へは緩やかに幅を増し、やや明瞭な肩部を形成する。握り部、柄部ともに断面は四角形に作られている。腐食のため使用痕などははっきりしない。先端部には棱を残している。

206は石斧柄の未成品とみられる部材である。木の枝分かれした部分を利用したものである。未成品の段階であり、樹皮や節が残存している。しかし、ある程度、先端部、後端部とともにケズリが施され、粗整形が成されている。着装部の加工までは到っていない。頭部長21.6cm、先端部径5.4cmである。

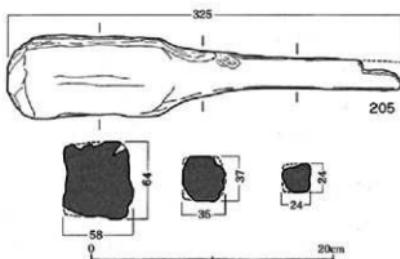


Fig.138 SD03出土遺物 (縮尺1/4)

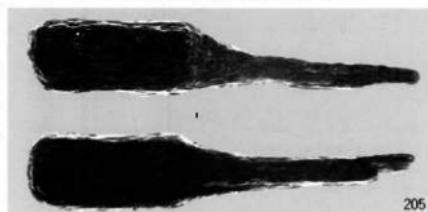


Fig.139 SD03出土遺物

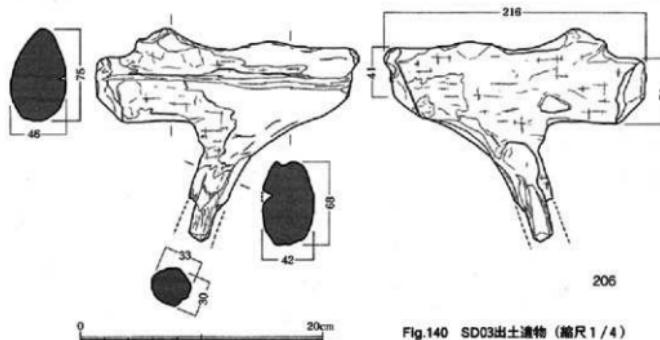


Fig.140 SD03出土遺物 (縮尺1/4)

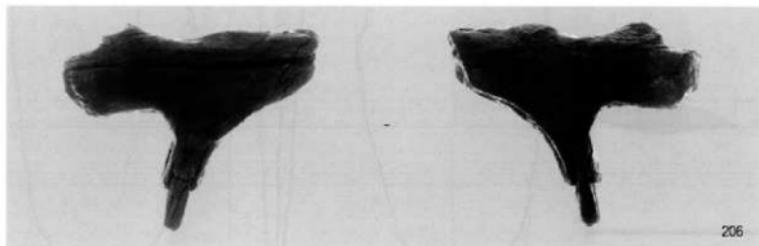


Fig.141 SD03出土遺物

207は完全な形で出土した斧柄である。しかも、磨製石斧が装着されたままであり、つい最近まで使っていたような感じであった。全長は60.5cmを測る。先端部は山形に尖らし、断面は片方が略三角形にもう一方はやや平坦に仕上げる。石斧を装着する穿孔部は両側から逆台形状に削り込み、平坦面を形成する。穿孔は石斧の中央部側が大きく、基部側が小さくなっている。石斧がピッタリ嵌るように開けられている。頭部から柄部にかけては幅を減じ、柄にはやや反りを入れる。この斧柄は形状的には弥生的（太形蛤刃石斧装着用）ではあるが、装着されていた石斧は極めて縄文的であった。

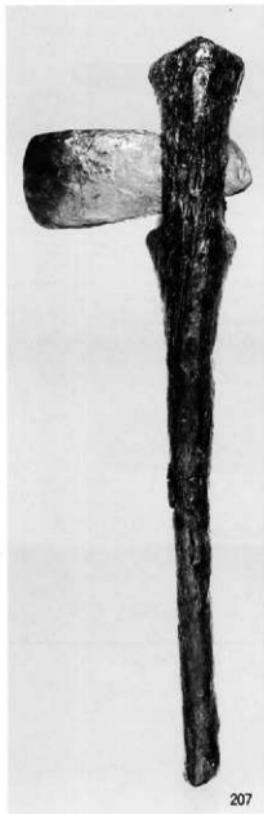


Fig.143 SD03出土遺物



Fig.142 SD03遺物出土状況

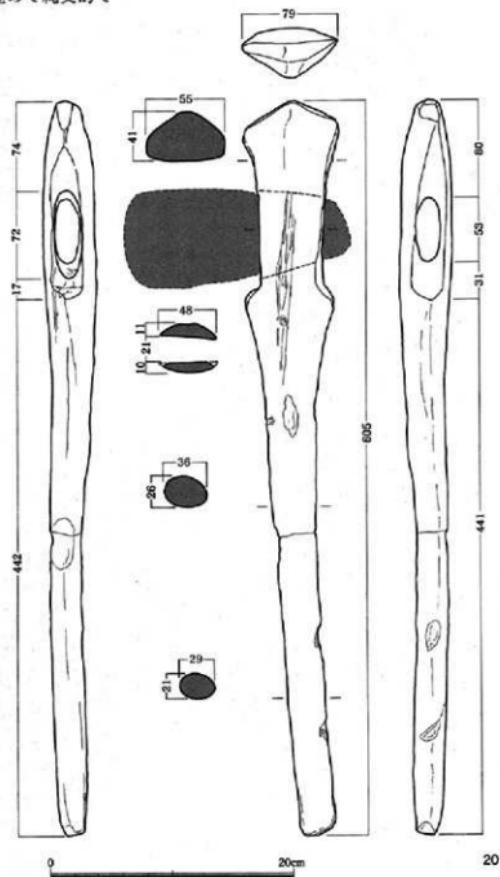


Fig.144 SD03出土遺物（縮尺1/4）

208は容器の把手ではないかと考えられる製品である。表面には沈線で縄文的な文様を入れ、裏面は無文のままである。左側面及び右下部側面は突出するように作られているが、折損していく形状が推測できない。全面に漆が厚く塗られ、色調は茶褐色を呈している。上部は部分的に赤褐色になる。一部には漆が剥落したところも存在する。材はクスノキである。

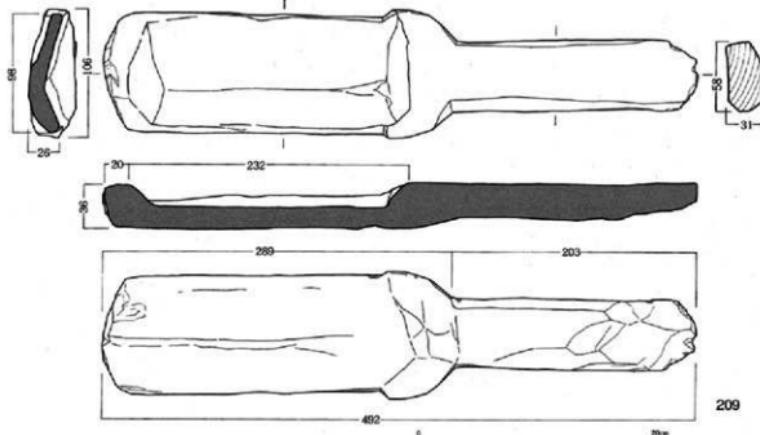
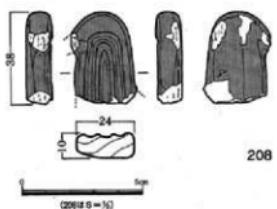


Fig.145 SD03出土遺物（縮尺1/2・1/4）



Fig.146 SD03出土遺物

209は208と同じく下層から出土したもので、形状から把手付槽としておきたい。全長は49.2cmである。把手は幅広く、上面は平坦に整形するが、裏面には大雑把なケズリが柄の端部方向に施す。端部には若干欠損した部分がみられる。身に移行する部分には肩部を持つ。身の窪みは三角形で浅く、容量も少ない。先端部はやや丸味をもって整えられている。全体的に重厚で、頑丈な作りになっているが粗い整形である。イスマキ製。



Fig.147 SD03遺物出土状況

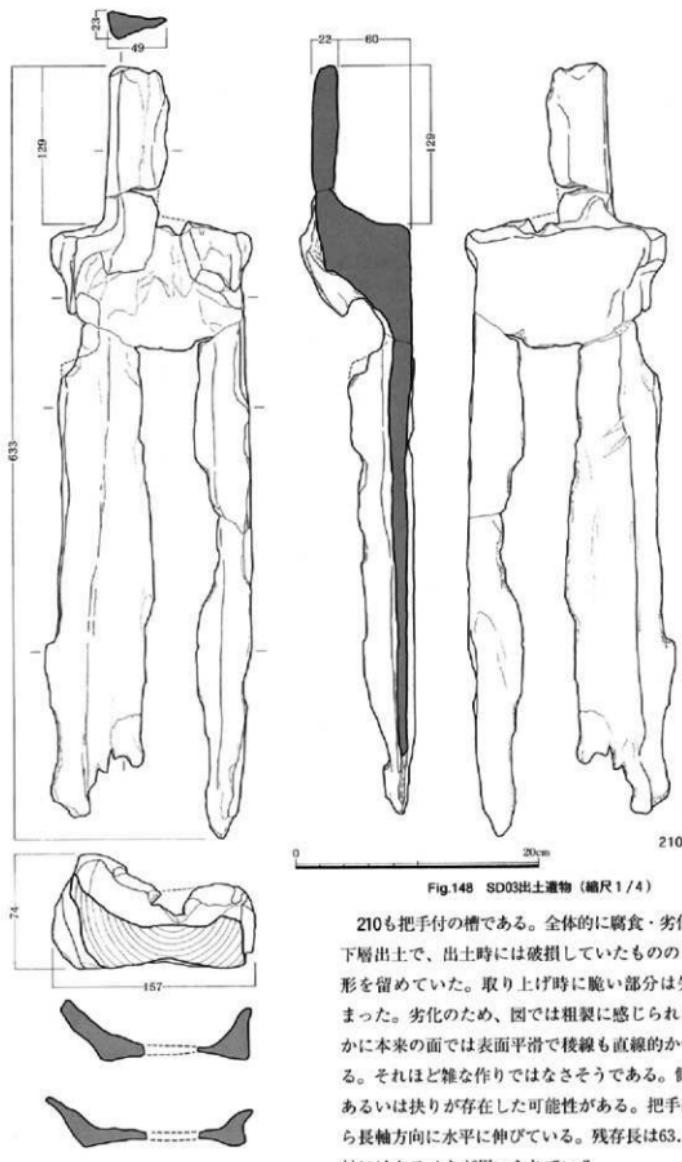


Fig.148 SD03出土遺物（縮尺1/4）

210も把手付の槽である。全体的に腐食・劣化がひどい。下層出土で、出土時には破損していたもののもう少し原形を留めていた。取り上げ時に脆い部分は失われてしまった。劣化のため、図では粗製に感じられるが、明らかに本来の面では表面平滑で棱線も直線的かつ明瞭である。それほど雑な作りではなさそうである。側面に穿孔、あるいは抉りが存在した可能性がある。把手部は体部から長軸方向に水平に伸びている。残存長は63.3cmである。材にはクスノキが用いられている。

211は木鎌の身の部分である。残存長2.6cmで中層からの出土である。時期的には前期になる可能性がある。

212は、丸木弓の再加工品である。木胎に黒（漆か渋柿？）を塗り、その後朱漆で文様を描く。文様には同心円文、梢円文、小円文、U字状文、直線文などがあり、それぞれ単位を持って

描かれている。部分的には朱漆の上に、さらに黒漆で文様を加える。残存長13.6cm、幅2.9cm、残存厚1.1cmを測る。両端はケズリで加工され、裏面も破断面をケズリで調整している。ケズリ面は極めてシャープで、金属器で削ったような感じを呈している。材質分析ではヤマグワの柾目材であった。時期的には夜臼式土器単純期である。

213は建築部材と考えられる板材である。残存長1.7m、幅14.6cmで、厚味は最大で3.2cmを測る。上部に19.2×9.6cmの抉り部があり、また、その横に幅1cm弱、深さ5~7mmの溝状の凹みがある。ケズリによって彫り込まれたものと見られる。別の部材と構造的に組み合せるためのものであろうか。断面は片側縁が厚く、もう一方は斜めに窄まる。また、下方側が全体的に薄くなっている。広葉樹の柾目材。



Fig.149 SD03遺物出土状況

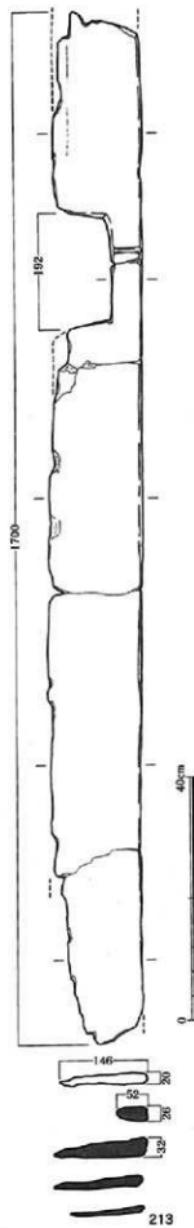


Fig.150 SD03出土遺物

Fig.151 SD03出土遺物
(縮尺1/2・1/8)

II区 SD03 (Fig.152~164)

調査区東南部をII区として調査した。下層はI区と同様、夜臼式土器單純期である。

214は諸手鍤の未完成品である。残存長37.7cm、幅22.1を測り、推定全長は50cm弱になると推測される。中央部には柄孔の隆起部がケズリ出され、ほぼ正円形に近い。形状はよく整っており、柄孔の穿孔を残すのみで隆起部そのものは仕上がっている。また、身全体の厚さも1cm前後で表面も平滑、また刃部まで存在することから最終的な仕上げ段階であると考えられる。しかし、一般的な鋸の製作順序は、隆起部を作り柄孔をあけ、その後、厚味を減じつつ表面を仕上げ、刃部を作るのではないかとみられる。また、この鋸は長さ・幅・隆起部の大きさのバランスが悪いように思われる。長さの割には幅広で隆起部は小さすぎるのではないかと思う。用材は柾目のクヌギである。

215も諸手鍤の未完成品とみられる。一部欠損及び変形はあるものの、ほぼ全形を知り得るものである。全長46.0cm、幅17.7cmを測る。中央部にはほぼ円形の隆起部を持つが、隆起部の高さは低く、稜も曖昧である。幅に対して隆起部が小さい感をもつ。一方の刃端部は二次的に変形している。既に両端に刃部が付設されており、最終調整段階にあったものであろう。全体的に扁平なため製品になし得なかつたものであろうか。また、形状からエブリ未製品という見解もある。材はクヌギである。

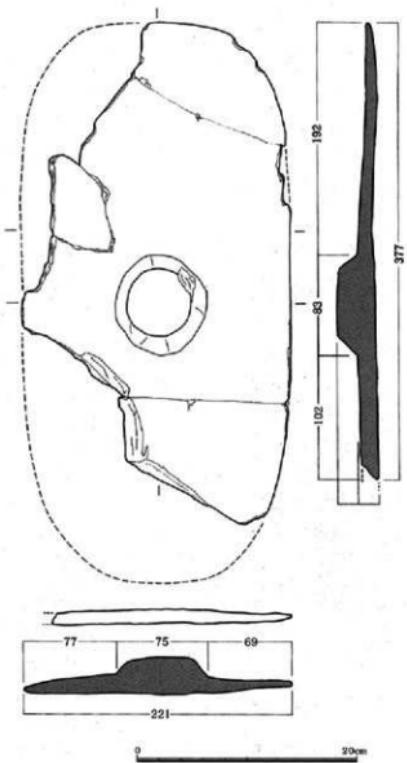


Fig.153 SD03出土遺物

◀ Fig.152 SD03出土遺物 (縮尺1/4)

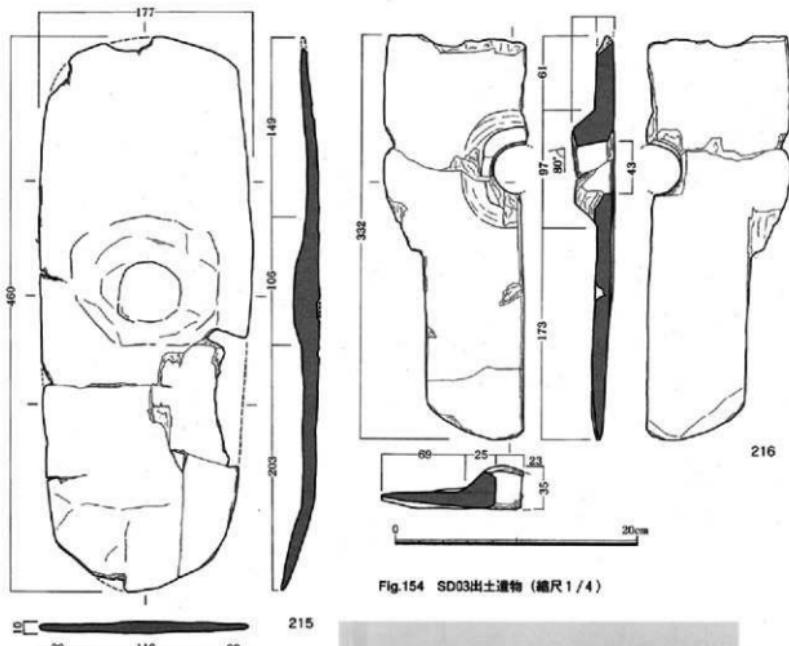
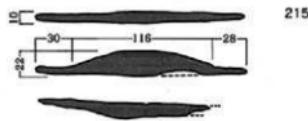


Fig.154 SD03出土遺物 (縮尺1/4)



216は下層から出土した諸手鋤である。縱方向に半折し、上端部と側縁の一部を欠失する。残存長33.2cmで、復元全長は45cm以上、幅は22.0cmとなる。全体的に幅広な感じを受ける。柄孔隆起部はほぼ正円に近く、径9.7cm、高さ2.0cmを測る。柄孔は径4cmで着柄角度はほぼ80度になる。体部の厚味は1.5cmでしっかりとした作りである。端部近くで若干厚味を減じ、刃部を形成する。調整は前後面とも平滑に仕上げられている。クヌギの柾目材を使用したものである。

217は、諸手鋤の未完成品の一部であろう。柄孔隆起部と側縁の一部が残っている。柄孔

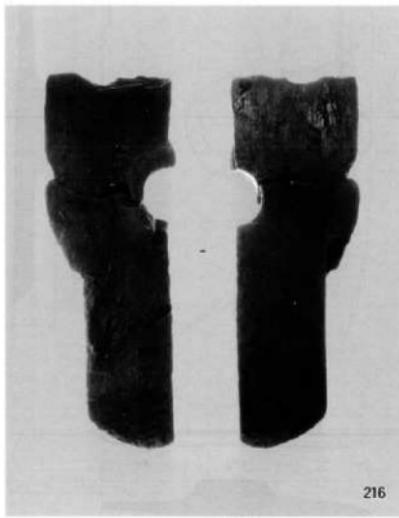


Fig.155 SD03出土遺物

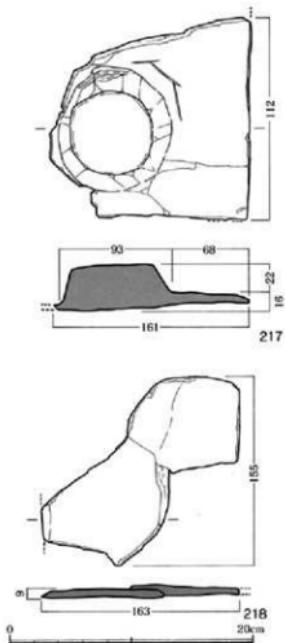


Fig.156 SD03出土遺物（縮尺1/4）

隆起部は底径9.3cm、上面径6.8cm、高さ2.2cmに整形される。側面にはケズリ痕が残る。体部の厚味は1cm前後で未成品にしては薄すぎる。復元幅は23.0cmと幅広くなる。材にはクヌギの柾目材が用いられている。

218は217と同一個体と思われる身の破片である。お互いに接合はない。断面が薄い体部で、製品に加工しても使用に耐えないであろう。用材も前者と同じである。

219はエブリの未成品かと思われる部材である。一端を破損し欠失している。外形はまだ整っていなく、中部の隆起部は山形に削られている。クヌギの柾目材を用い、表裏面とも平坦にしている。

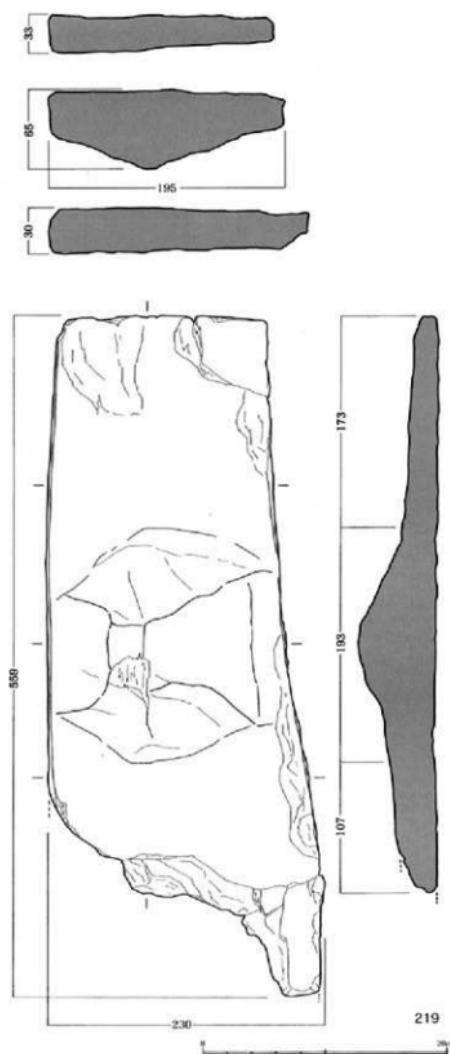
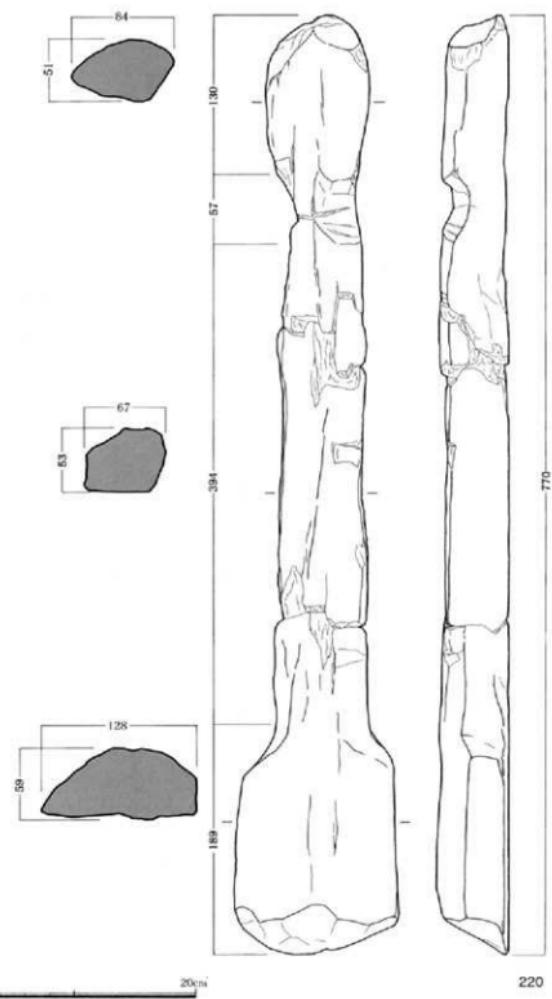


Fig.157 SD03出土遺物（縮尺1/4）

220は鉤の未成品とみられる部材である。クスギの削材を用い、粗加工を施している。上端部は尖らすように削り、端部より16cm下がった所には両側から削り込みを入れている。柄頭を意識しての加工であろう。柄の部分は幅6~7cmで表面は平坦に、裏面は丸く整形する。身への移行部は、削材そのままで一側縁を平坦に削る。身先端部は斜めに削り落とす。全長77.0cmを測り、203と同じ鉤を作ることが可能である。



221は板材である。残存長117.0cmで中層出土であり、弥生前期のものであろう。

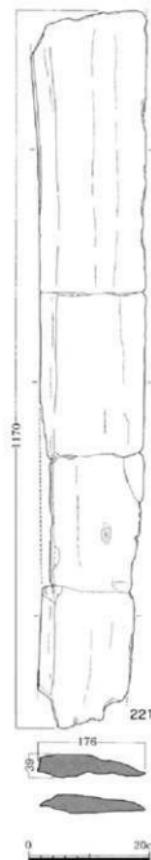


Fig.158 SD03出土遺物 (縮尺1/4~1/8)

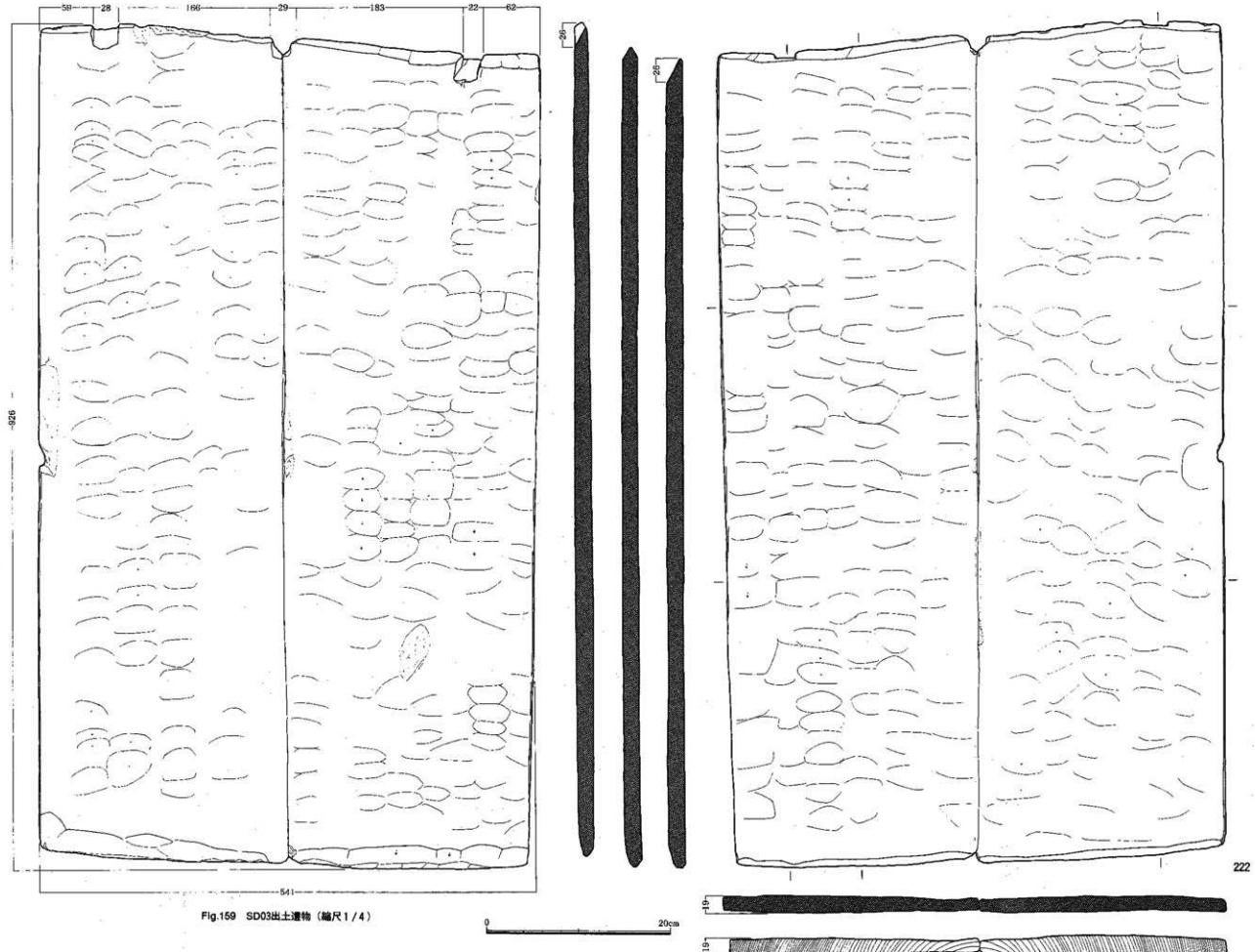


Fig.159 SD03出土遺物 (縮尺1/4)

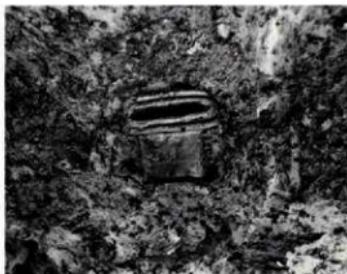
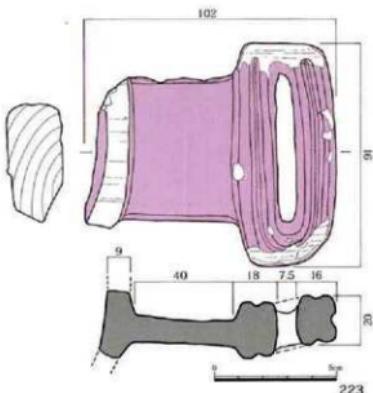


Fig.161 SD03遺物出土状況

◀ Fig.160 SD03出土遺物 (縮尺1/2)

222は上層（下）及び中層から別々に出土した大型長方形板材である。50cmの距離をおいて出土し、割れ口が摩耗して接合が若干あまい所があるが、同一個体である。直径が0.7m以上の大木の、芯材から数cm離れた部分で板目取りしている。全長92.6cm、幅54.1cm、厚さは約2.0cmである。全体に真四角になっておらず、僅かに菱形気味である。上端及び下端は両面からケズリが施され断面は山形を呈する。下端縁は端面を面取りしていて平坦面をもつ。上縁には両側縁から約6cm内側に入った所と中央部に、約3cm弱の抉りを入れる。抉りは片面より斜めに削って作られる。上下両端部の両面には

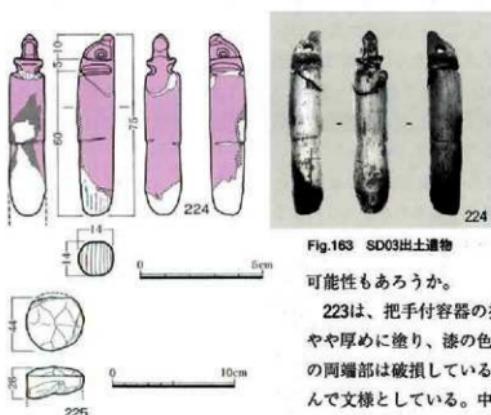


Fig.162 SD03出土遺物 (縮尺1/2・1/4)

幅3cm位の白色化した部分が帯状に残されていた。別の彫り込まれた溝を持つ部材に差し込まれていた当たり痕であろう。全面にヤリガンナで削られた匙面状の削り痕が残る。形状から大形机の天板と考えたが歪んでいるので別の部材であろうか。組み合わせて用いられたことは明らかである。板壁の可能性もあるうか。

223は、把手付容器の把手部分と考えられる。全面に漆をやや厚めに塗り、漆の色調は茶褐色を呈している。把手頭部の両端部は破損している。頭部には両面と側面に溝を彫り込んで文様としている。中央部は削り貫きで窓を開ける。把手の柄部は中央がやや厚く扁平で、両端は丸く仕上げる。全体的に绳文後晩期の石棒頭部を想起させる形状を呈している。残存長10.2cm、最大幅9.1cm、柄幅5.8cm、厚さ1.1cm、端部は0.6cm、把手頭部厚2.35cmを測る。材はクスノキである。

224は丸木弓の先端部分である。全面に橙色がかった朱漆を塗る。弓弭の部分は漆がやや脱落している。先端部は両側から削り込んで平坦に整えられ、長径約3mmの貫通孔を有する。弦掛けは両側からU字状に削り込む。先端部から1.5cm下がった部分に浅く削った段を有する。下半は焼けて失われている。

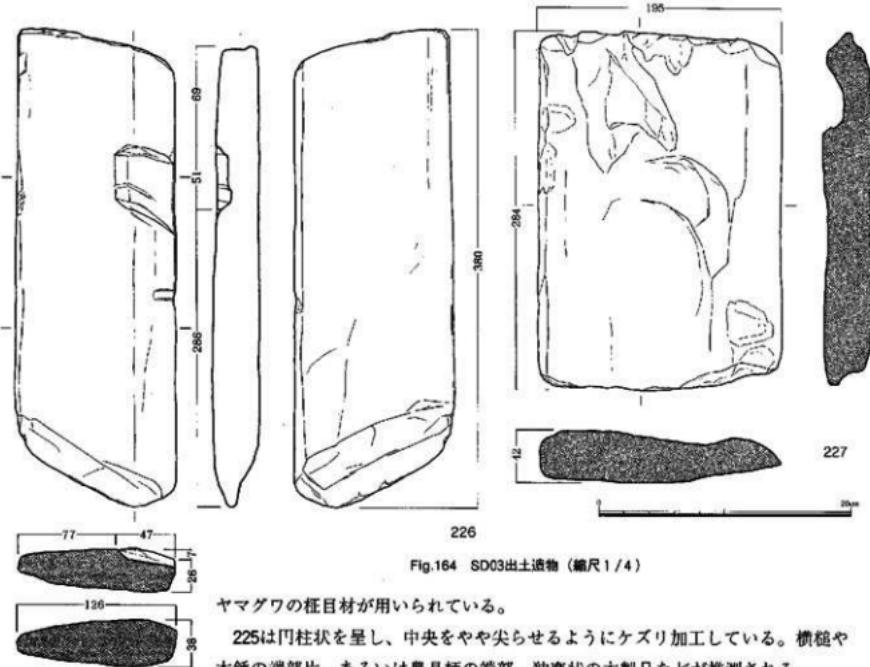


Fig.164 SD03出土遺物（縮尺1/4）

ヤマグワの柾目材が用いられている。

225は円柱状を呈し、中央をやや尖らせるようにケズリ加工している。横樋や木鍤の端部片、あるいは農具柄の端部、独楽状の木製品などが推測される。

226は長方形の加工板材である。一箇所に $5.6 \times 4.7\text{cm}$ 、深さ1.0cm弱の削り込みがある。削り込みの際のケズリ痕がよく残る。板材の端部は長辺に対して斜めに成形される。端部のケズリもよく残る。広葉樹の柾目材が用いられている。

227はカシの柾目材で作った板材である。農具の素材となりそうな板材であるが、現段階では何とも言えない。断面図に示す窪みは削れによるものかケズリによるものかはっきりしない。上記の木製品は下層出土であり夜白式土器に伴うものである。

以上、これまでSD03 I区・II区下層出土の木製品をみてきたが、夜白単純期としては最もまとまった木製品である。農具としては、諸手鋤、平歛2種類、鋤2種類、エブリ、泥除などがあり、種類や形態が豊富である。また、これらの農具の未成品が数多く出土しており、集落内で体系的に製作されていたことが窺える。脱穀具には堅柾が存在し、弥生前期のものとは形態的に若干異なっている。工具には、斧柄、横樋などがある。斧柄には磨製石斧が装着されていた。直柄及び膝柄とともに出土している。生活用具としての容器類には把手付槽、把手付の削物鉢などがある。削物鉢には精巧な把手が付き赤漆が塗られている。武具あるいは祭祀具としては、漆塗りの弓があげられる。単純に赤漆を塗ったものと、赤漆と黒漆で文様を描いたものとがある。SD03は5次調査区にも伸びており、農具類、工具類の追加資料に加え、脚付の鉢、紡織具の綿打具が2点新たに出土リストに加えられた。建築部材や用途が判明していない木製品まで加えると、夜白単純期にはいかに豊富な木製品が製作使用されたかが容易に想像できよう。

おわりに

これまで縄文晩期終末（弥生早期）から弥生後期後半（一部古墳時代初頭を含む）までの木製品について、造構ごと、器種ごとにみてきた。各時期を通じて豊富な木製品があり、弥生文化の内容を考える上で、これらの木製品はきわめて重要な資料であると言えよう。

中でも、夜臼単純期の初期木製農具のあり方は、これまでの常識を覆すものであった。そこで、初期木製農具について若干ふれておきたい。

夜臼単純期の木製品については前ページで簡単に種類と内容について述べておいた。もう一度農具のセットについてみておきたい。なお、製品名のあと番号は実測図番号を示している。

出土した木製農具には、諸手鋤216、平鋤194・195、泥除196、エブリ197、鋤203・204などがある。それに脱穀具としての堅杵193がある。既に、この時期には諸手鋤に加えて、2種類の平鋤が登場している。ひとつにはやや幅広で、諸手鋤の一端の刃部を削り取ったような直角に柄が着く平鋤194と、もうひとつは身幅が狭く、初めから柄が角度をもって着く狭鋤タイプ195である。少なくとも夜臼単純期には形態分化を遂げたこれらの鋤類が存在したことになる。さらに、泥除196の存在は平鋤195との関係で考えなければならないであろう。もうひとつ、鋤の存在が注目される。小型の鋤203と大型の鋤204が存在し、これも用途の違いによって2種類に形態分化を遂げている。これらの農具のセットからみれば、夜臼単純期には水稻耕作に必要な全工程の作業に用いる農耕具がそろっていることになり、初期水稻耕作の開始段階には木製農具が完全なセットとして揃っていたことを示している。

これらの木製農具は、また、集落内部で製作されていたことが明らかになった。未成品の出土がそれを物語っている。エブリの未成品198~202、219、小型鋤の未成品220、諸手鋤の未成品214・215・217・218などである。鋤は丸太材を半割して製作され、エブリや諸手鋤は大木を60cm位に切断し、ミカン割りにして素材を求めている。エブリ未成品の場合は200・202などが初期の段階で、次に201・219の段階となり、198・199のように粗成形されていく。これらは柄孔成形位置及び上端部の加工からエブリ未成品と考えたが、諸手鋤未成品も含まれている可能性がある。なぜならば、同じような工程を踏んで製作されたと思われる平鋤194・195の柄孔の位置が若干片方にズレているからである。あるいは個体差があるかも知れないが、考慮しておく必要がある。それと諸手鋤未成品について完成間近のものばかりで途中の工程が見当たらないのが気にかかるところである。諸手鋤未成品214・215・217・218は完成間際の製品である。しかし、これらは製品と比べると柄孔隆起部が小さかったり、低かつたりあるいは器壁が薄過ぎたりしたもので、製品にはなり得なかった品物ではなかつたろうか。いずれにしても製作工程を明らかにする上では貴重な発見であった。これら木製農具の未成品は、集落内で多数の農具を体系的に生産し、かつ使用していたことを物語っている。

次に、これらの初期木製農具の素材についてみておきたい。雀居遺跡出土品はほとんどが、製品、未成品を問わずクヌギが使用されている。つまり、落葉のドングリの木が選択的に使用されているということになる。弥生前期以降は常緑のカシ類が多用されるのとは対照的である。同時に出土した槽210や容器把手223には暖地に生育するクスノキが使われており、当時集落周辺には常緑のカシ類が生育していたと思われる。しかし、頗るにクヌギを用いているのは、もともとの初期木製農具の故地がやや寒冷な地域であったことを暗示しているのかもしれない。例外としてエブリ197には、刃部はクヌギ、柄は常緑のアカガシ亜属という組合せであった。いずれにしても、初期木製農具とやや寒冷地に生育するクヌギとの関係は深かったのではないかということを指摘しておきたい。

そのほか、漆塗り弓212も興味深い。弓を含めた漆製品は容器の把手などにみられ、夜臼单純期には豊かな漆の文化が存在していた。弓212に描かれた文様は、同心円文、梢円文、小円文、U字状文、直線文などであり、5次調査出土の土器にも同様の文様が描かれていた。高知県土佐市居德遺跡出土の木製梳にも同じモチーフが描かれていて深い関係を示している。大洞C2式の叢入品や韓国の無文土器の出土があり、今後広い範囲で検討していかなければならないだろう。

中期、後期の木製品についてもこれまで報告したように見るべきものが多い。後期の机については別にまとめたもの（『別府大学アジア歴史文化研究所報』第18号、2000）があるのでご参照願いたい。

なお、今回の報告でも、建築部材や礎板等についてはふれることはできなかった。調査終了後に奈良文化財研究所の光谷拓実氏より樹種の分析を頂いていたが、反映させることができなかった。遅ればせながら収録させて頂くことにする。弥生後期の掘建柱建物26棟を中心とした建築部材についての分析である。

雀居遺跡木器の樹種

奈良国立文化財研究所 光谷拓実

1. 積板 (76例)	3. 枕木 (2例)
クリ : 38例 (50.0%)	スダジイ : 1例
ツブライジ : 15例 (19.7%)	スギ : 1例
スダジイ : 9例 (11.8%)	
スギ : 10例 (13.2%)	
サクランボ属 : 2例 (2.6%)	
アカガシ属 : 2例 (2.6%)	
2. 柱 (20例)	4. 総数 (112例)
ツブライジ : 6例 (30.0%)	クリ : 41例 (36.6%)
スダジイ : 4例 (20.0%)	ツブライジ : 21例 (18.8%)
クリ : 3例 (15.0%)	スダジイ : 14例 (12.5%)
アカガシ属 : 3例 (15.0%)	スギ : 12例 (10.7%)
イスノキ : 2例 (10.0%)	サクランボ属 : 2例 (1.8%)
スギ : 1例 (5.0%)	アカガシ属 : 2例 (1.8%)
クスノキ : 1例 (5.0%)	イスノキ : 2例 (1.8%)
	クスノキ科 : 1例 (0.9%)

《傾向》

- 1) 積板ではクリが全体の50%を占め、シイ類が30.5%を占める。
- 2) 柱ではシイ類が全体の30%を占め、クリは15%に過ぎない。
- 3) 針葉樹の使用が極端に少ない。

以上のことから、建築部材についても樹種が選択的に考慮されていたことが窺える。今後の参考となろう。

最後になりましたが、この報告を作成するに当たり福岡市埋蔵文化財センター山口謙治所長、比佐陽一郎氏、奈良文化財研究所光谷拓実氏から有益な助言をいただき、また別府大学文化財学専攻の大学院諸君も手伝ってくれました。特に整理調査員の坂本洋子さんと境聰子さん二人の細かな観察力と根気、そして熱意なしには完成しなかったことを明記し、心から感謝申し上げます。

下村智（別府大学文学部）

雀居遺跡第12次調査では、弥生時代前期後半～中期前半、古墳時代前半の木製品が出土したもの、弥生時代早期～前期前半、弥生時代中期中頃～後期が抜けている。雀居遺跡木製品の時代的変遷を把握するには第4次調査の木製品は絶対不可欠な資料であった。今回、下村智教授のご尽力で抜けていた環が繋がり一つの遺跡で木製品の変遷をたどることは大いに意味のあることだろう。しかも水稻耕作開始地と日されている御笠川流域の場所だけに資料的な価値は高い。しかし第4次、第12次調査とともに未実測の木製品をまだ残しており、十分にその責を痛感している。（力武）

Sasai Sites IX: 13th campaign of the excavation

Fukuoka city, which is located in the northern region of Kyushu, played an important role in Japanese history as an entrance to accept culture, men and things from the Asian continent.

Fukuoka Airport as a gateway of Modern times need a new facility due to rapid increased air traffics; therefore, the rescuer excavations of the Sasai sites was carried out before development.

The Sasai sites are situated at a low terrace on the east bank of Mikasa River, and the area including the Sasai sites is known to the oldest one for the rice cultivation in Japan. Near the sites including the Itazuke site, important sites of the Yayoi period have been found. As a result, the excavation of the Sasai sites was expected to come to light the settlement and rice cultivation of the beginning of the Yayoi period.

The excavations of 1991 through 1998 lasted the thirteen campaigns, and during the campaigns archaeological remains and artifacts belonging to the early Yayoi period (4th century B.C.) through the late Heian period (11th century A.D.) were unearthed. The Sasai sites helped to bring us the important archaeological finds and results.

This is the report of the 13th campaign. Excavated area is just east of the area of the 10th campaign. Archaeological remains belonging to the I through III phase were excavated.

I phase belongs to rice fields of the 9th through 10th century A.D. Most of them were destroyed by flood, but some can be reconstructed as rectangular shaped-rice fields. Three successive archaeological excavations found that rice fields based on the Jhori-se system spread over the area.

II phase belongs to the settlement of the late Yayoi through the early Kofun period (3rd through 4th century A.D.). Pit-dwellings and wells were unearthed, and the hole extending from the area of the 10th campaign yielded most likely a Chinese made-bronze bell for horse trapping. The bronze bell has survived a clapper, and its sound revives in the present day.

III phase belongs to the settlement of the Early Yayoi through the first half of the Middle Yayoi period (3rd through 1st century B.C.). Especially several pillared-buildings stood in a line, and it is noteworthy whether they are houses or granaries. In addition, glass beads in a earth cut-tomb were discovered. These beads were scientifically analyzed by Yoichiro Iisa. This result is shown in the supplement. A circular ditch, which seems to be a small barn for livestock, was uncovered during the 13th campaign. The surveys of the Sasai sites can help to imagine concretely circumstance of the settlement belonged to the Yayoi through Kofun period.

Finally, unpublished wooden objects found during the 4th campaign appear in the report.

(英訳：林田憲二)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第748集

福岡空港西調整備に伴う埋蔵文化財調査報告

ささ
雀居 9

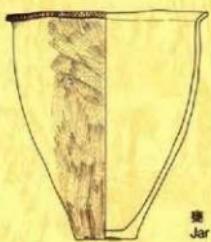
平成15年（2003年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1-8-1
電話 092-711-4667
FAX 092-733-5537
印刷 福博総合印刷株式会社
福岡県福岡市博多区堅粕3-16-36

Results of the 13th excavation of the Sasai sites

SASAI 9 (Supplement)

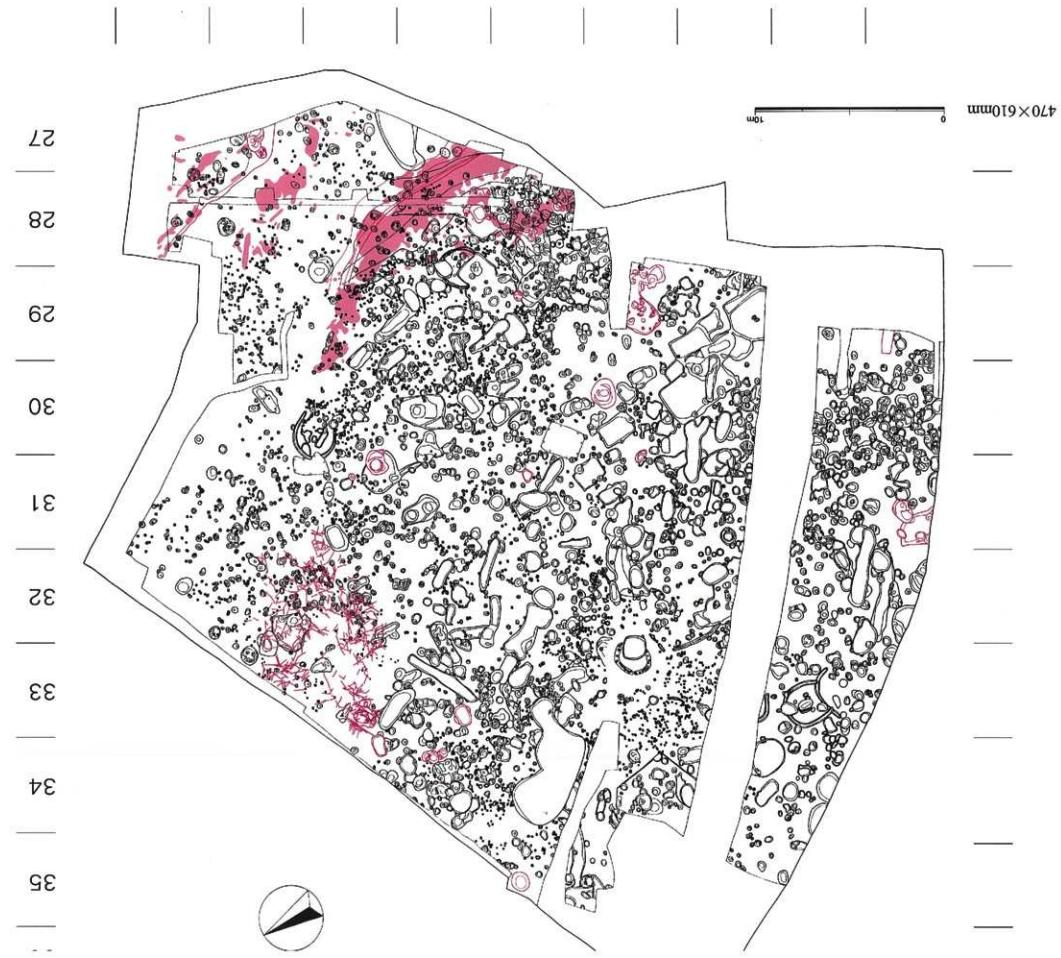
Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.748



March 2003

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
JAPAN

第13次調査区全体図(1/200)



M | L | K | J | I | H | G | F | E | D

